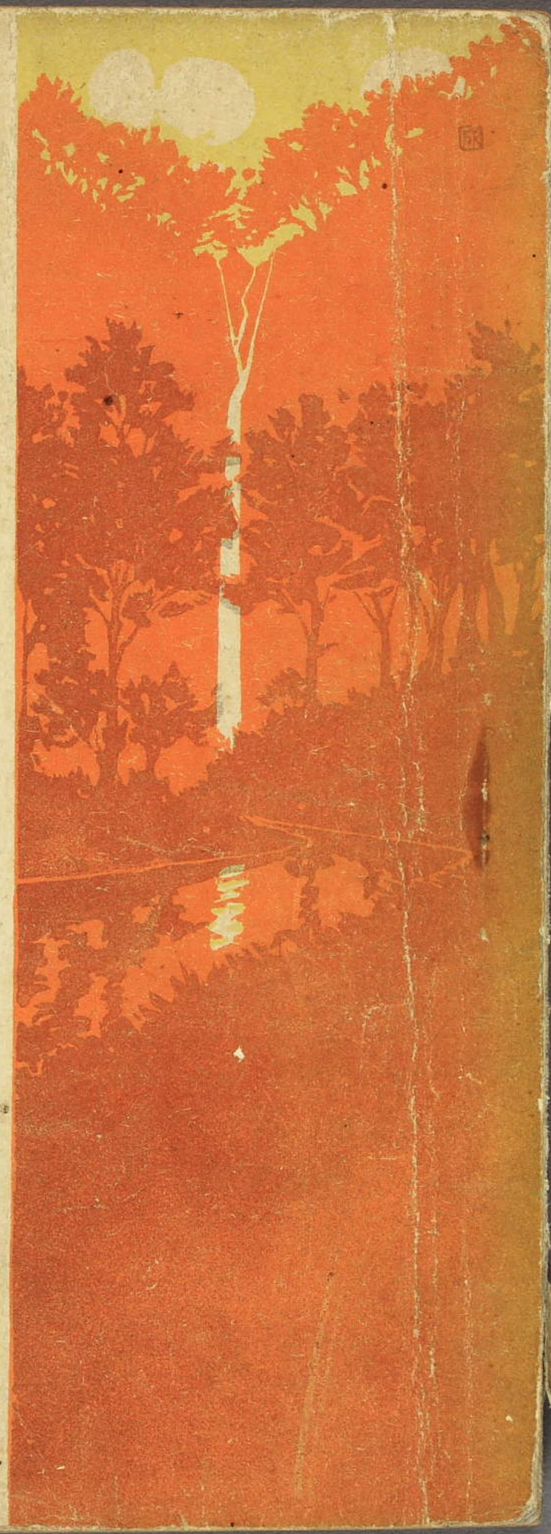
千葉江東著

山吹ならは



浪々

四ぎさらば

序

目を擧ぐれば故人目に遠し、しかも常住座臥、吾が身邊に繚繞する一個の人あり、その人は秋容老脫の相ありて、寧ろ我には好もしき友にあらざる如くして、我は懷に彼を忘るゝ能はず、彼を視ること、宛らなべての有情を司る府の如く、一念彼に想ひ到る毎に、彼の眷屬となるを甘んず、彼寂として聲なきに、いかなれば我ひたすらに彼を追ひ、追ひに追ひて、自ら蒼茫萬古の意を覺ゆることの長きや。彼とは誰ぞ、故郷なり。

吁嗟、我之を知んぬ。故郷は初めて我が混沌の眼を睜きたるところなるを。故郷は我がためには、數に於て一なり。我がためには、歷史に於て創世紀なり。我がためには、繪畫に於て一生涯の緣起の卷なり。我がためには、地文に於て人間と自然との接續なり。人世の大趣、實にこゝに肇まる。よしや萬法日に流轉して。某侯の城趾は

今犁かれて桑畑となりぬとも、我が曾て出沒嬉戯したる某家の花圃は、煤烟鐵臭の製絲場となりぬとも、土地の總べてが癩を病みたる癈人の膚の如く、四肢八爬せられたりとも、我が胸中の印璽には、單だ美哉山川を刻して、之を秘むるのみ。故郷よ、おん身ひとり願はくは、淪滅の大法に循はずして、こゝに我をして無邪氣なる十年前の童子に回らしめ、老いたるおん身の健在を、傍人に向ひて傲らしめよ。

されどいたましきかな、我が呱々の聲を擧げたる故郷は、汨々たる頽波のために、いつしか跡を湮して、醒めたる後のリップ、ヴァン、ウインクルならずとも、是れ現實か、是れ假相かのけじめに、瞠目自失せざるを得ざるもの、比々皆然り。

かくの如くして惴々焉、その零落を傷める哀音の、最も痛切なるものを、吾友人、江東千葉君より之を聞きぬ。

千葉君、少にして父母と同胞とを喪ひ、徒跣上京、一貧骨に徹して、苦學精勵人に嶄絶す、この間のこと、到底嘗粱の子弟に向ひて之を語る可らず、余は年齒に於て、聊か君より長ずるものあれども、未だ曾て君が人格の高潔なるに畏敬の念を捧げざるはあらず、しかも君は今猶未製品なり、君の人と爲りを紹介するは、今その秋にあらずとして、君の願はざるところなるべきを以て、是より多くを語らざるべし。而して故郷は君が少年時代に於て、寧ろ君が一家に向ひては毒咀の符を燒きたるものなるにも係はらず、是箇の多愁多恨の身は、故郷を視ること第三人稱の如くならず、却つて自己に遠竄を命じたる虐君のつたなき運命のために懊惱し、煩悶し、絶叫し、或は人を憂ひ、或は自ら傷む、傷めば必ず文あり、一文又一文、成れる者を拾收して此一篇を作る、君は世の所謂製書家にあらず、之を以て按排布置の如きは、未だ必ずしも當初より心を用ひたるにあら

ざるに似たり、さあれ我は最も能く君の文を知るものなり、君の文の幾ど總べては、神經の纖維より成るが如し、落筆突兀として次序なきや、坎坷凹凸の路を搖られながらにして奔るが如く、向ふところ前無きなり、之を以て偶ま粗氣横生することはありと雖も、その熨さざる襞積は、衣に在りて人にあらず、君の人と爲りは秋士にして愴情、君が文を行るは秋山の如く兀として慘目、盧允廸詩あり、曰く『秋士秋山一樣淸、各呈瘦骨鬪崢嶸』と、假りて以て本書に題せんかな。たゞ君の文は世の所謂文士の文にあらざるを以て、咀嚼の際多少の硬澁を覺ゆることはあらむも、しかも秋を秘むる甕の如く、之を敲けば紙上に黯淡たる愁光の四迸するを覺え、惻々人を動かすものあるに至りては、余未だ君の文の如きを見ず、たゞ余は君が親友なるの故を以て敢へて此書を江湖に薦引するの任に膺らざるべし、文藝批判の事、寧ろ之を友にあらず敵にあらざる第三者に推諉して

初めて公論を獲るに庶幾らんか。

故郷よ、書中の主人公よ、永劫に忘られざる幻影よ、汝の名は多年吾友を瘦せしめぬ、げに汝は吾友のためには、大なる感情なり、感情をして感情を悲歌せしめよ、在天の吾友が雙親同胞は、このとき神机を靈山の頂上に設けて、年々歳々人間の哀史と自然の零落史に、絶好の品題を寄附せる故郷、その故郷に、涙を揮つて永訣せる眞人の聲を享けたまはむ。

明治三十六年九月

小島烏水

序に代へて

露にしめりし草かくれ
　桔梗の花を見出てたる
胸のわなゝきやまずして
　他の國ともおもはれず

秋高き氣にふくらめる
　茗は君の花ならむ
咲いて五瓣のこむらさき
　故郷の花に似たる哉

詩人の抱く旅こゝろ
　野路、捨咲の桔梗に

陳き詩の句を活しても
　君は故郷に思ひ寄す

こゝらの歌も秘められて
　若き歴史も殘されて
あり〳〵見ゆる山川は
　人生なかばの地圖ならむ

ゆきなづみても古里を
　あとみかへらぬ旅の子の
たま〳〵清き秋草に
　折にふれての睫うるほす

吾友江東兄の需によりて即興の筆をとる、
盆の十七夜、大和みゝなし山の麓に於て

醉茗生

書中記する所、悉く「實」なりやと問はゞ、我れ答ふるに惱む。文つひに著者を顯はさずんば止まず、鏡面の花、水裏の月、書中自らにして爾ぢの影ありといはゞ、われ微笑を以て云はん、夫れ或は然らんと。若夫れこれ爾ぢが情の「眞」なりやと問はゞ、われ即ち絶叫せざる可らず、然り、これわが力めたる凡てなりと。蓋し記實の「我」を公表すべく、われはなほ左程に大膽ならず、文を以て自家を吹聽すべく、我はわが餘りに小なるを憾むなり

故ありて記す

秋立つてより七日

江東生

肅しんでこの一書を
故郷の舊師、在田亮先生
が在天の靈に献ぐ

目次

一、荒村行……一
二、わが村—郷黨……二三
三、學び舍—友がき……六四
四、わが幼時—故郷の山河……一一一
五、秋風一夜……一五一
六、歸省……二二五
七、歸んなん、いざ……二五三
八、いざさらば……二七七

いざさらば

一　荒村行

千葉江東著

"O Luxury! thou cursed by Heaven's decree,
How ill exchanged are things like these for thee!
How do thy potions, with insidious joy,
Diffuse their pleasure only to destroy!"

日ねもすの小糠雨、いと蕭條に檐を繞りて、花の都も秋は暮れ方の、とある物淋しき夕なりし。

かゝる秋の日、かゝる雨の夕は、もとわがいたく愛づるところ。

廂垂るゝこといたう低ければ、物の影薄暗き一室に閉籠りて、今日もまた、幽凄の想ひを獨り机上のものに遣る。

汨然たる忘我の境は、忽ち一葉の名刺を賚らし來れる、家人の跫音によりて端なくも破られつ。

『菱形なる帽子手にしたまへれば、大學生なるべきか、年まだうら若き人の、卿に會ひたしと望まるゝを……』

名刺の表には、小石川某の街に寓る、石田なにがしとあり、右視左視、打ち回しては思ひ惱む、わが記臆の糸の緒は、心の底より夢かとばかり微に搖げど、たとへば闇の夜の螢火か、明らさまなる印象の、さして何人ぞとも、つひに思ひ浮ぶべくもあらざるにぞ、果は思ひ屈して、其まゝに玄關に走り出れば、實にその人はそこに立てり。

『おのれぞ若葉なる。さて御身は誰人にか在す？』

其人は、世にも懐しげなる笑の波を、輝く面に漂はして。

『オー、いかに見忘れ給ふことのかくも遥かなる、われはこれ卿がふる里の友、石田碌二にてあるものを……。』

『ホー、おん身が碌二君とな、おん身が、おん身が！』

さるにても、男兒ながらに禿とか云ふらん頭の態の、鬟々たる亂れ髪、眉まで搔き下げて、青洟長くゝひ垂らしつ、惡戯好きなりし其頃の頑童の、思はざりしな、今日は既に、大學の門をも潜るべう、かくも立派なる壯佼となるべしとは。

青年の熱き血汐は、紅の頰に漲り、功名の炎は打沈める瞳に燃ゆ。

われこの壯佼を見たる今は、たゞ茫然として、「驚愕」の權力に壓し伏せらるゝを堪え得ざりき。

朝靄の次第に剝がれ行くらんやう、暫らくありて、「驚愕」は、ややに其鋭を收めぬ。閑却されたる自覺は、やう〳〵にもとに歸り來

りぬ。『あゝ時よ時よ、時なるかな。此の波濤、一たび滂湃として觸るゝところ、何者の嶮しくこゞしきも、遂に搖がざるべき、碎けざるべき、漂はざるべき。夫れものゝ嶮しうして硬きもの、世、巖に勝れるなく。ものゝ寂として默し、默して靜かなる、世、石に過ぎたるものはあらじ。さはれ此石にして、此の巖にして、つひに此變移を免るべからずとせば。ましてや生ありと雖も、一葉の脆きに堪えざる我が人間界の壽をや。

已に生あり、必ずや動なかるべからず。動くは即ち、生の一部を減殺する所以、一部また一部を耗ゐ盡して、つひに全部を地下に瘞め了りぬべし、かくして人は若く、かくして人は老ゆ、かくして幼なかりし君も若く、稚けなかりしわれも長けたるらん、何今更に迭ひの面變りしと、姿變りしとを怪しむことかは。

世にありとあらゆるもの、悉く老ゆ。乾坤長へに老ひざるもの、

それたゞ一の故郷あるのみ乎。

想へ。卿の齒われより青し、しかも山青く水綠りなる、衣川の里は、卿に於ても故郷たり。われや卿より老ゆ、しかも衣川の里のわれに於ける、また彼此なきふる里にあらずや。獨り卿とわれとのみならず、恐くは百年の前、曉烟殘月に迷ふて征馬嘶くとき、ほの白き菅笠を傾けつゝ、松原の露に泣き明かして、この里遠く離りけむ故人も。あるは百年の後、さらば幸くての聲、清瀨の河波に咽んで、行衞も白雲の空、はるばるとわけ入るらむ、世に便りなき村人にも、憶へば綿々として蠶兒の糸の、長へに絶えせざるべき衣川の里、あこれひとしきふる里ならざる可きか。

あゝ故郷それ終に老いず。

さらば卿、希くは語れ、卿が新らしき現實の故郷を。以てわが憶ひに生ける古き故郷。—水の泡よりも覺束なく、我想像と印象とに浮

べる、幼なきふる里に對照するとき、そはわが心にいかに貴く、はたいかに慰みあるべきものなるぞ。

希くはわが爲に語れ、新しき故郷を。

あゝ故郷、たゞこの二つの文字の響！

字しむ母の懷よりも懷かしく。岩間の清水よりも清く爽かに。九皐の上、白鶴の唳くらんよりも涼しく。神在すなる御園生に、咲き亂れたる苞よりも麗はしく。秋は野末の遠山に、人燒く烟り冲るよりも悲しく。かくて凡ての「想」と「念」と「響」とを併せて、國のいづこ、時のいつとのわいだめなく、ひとしき「遊子」の心の上に、限りなき福音と慰藉を印し、一種の神聖なる呼吸を賚らすもの、そはこれ「故郷」てふ觀念ならざるべき乎。

われや今鈿光帽影、塵は烟の如く、烟は霧の如き、大都の濤動の中に生く。世は人心、夜叉よりも凄じうして、道はたゞ螺宮の曲れ

るよりも歪めり。かくて我が途、いたくこゞしうして、心の惱み、ほと〳〵死ぬべう覺ほゆ。猶かつ一筋の光明ありて、夕闇に遠き山燒の火の、常に閃き常に搖ぐもの、たゞ「故郷」てふ想念、祇これなるなり。あゝ我れを慰藉するも故郷、われを想殺するも故郷。希くは卿、わが爲に卿が新らしき故郷を說け、しかして說くこと希くは詳らなれ。

卿よ、秋雨の夕を、暮の風いたく冷かなり、衣薄げにも見ゆるを、いざ、近う爐り火に倚り給へや。』

炭火豆よりも少さき炭桶擁き、冷えたる茗を啜りて、われ等が物語りやうやうに細やかなり。

× × × ×

外面には、降りしきる雨小止みなく、し吹き來ては、折々に雨戸を撲つ。室の中、いよゝ暗うなり勝る、またく暮るゝとにもあらぬ

を。さらに烈しく降り來るにぞあらむ。

愁の雲一抹、石田生の額を過りぬ。曇れる瞳、疊の上に落ちぬ。やがて太き吐息して語り出る樣は。

『……故郷長へに老いずと云ふか、然り長へに老いざるべし、然はあれ、そは人の「感想」と、「懷古」とに浮べるふる里にして、恐らくは現實の故郷ならじな、あゝ現實の故郷よ、現實の故郷は……

あゝ懷古の翼に鼓せられて、理想の虛空不斷に浮ぶなる、故郷そのものこそ洵に幸ある哉。何となれば、君がいはゆる「古き故郷」も、はたわがいはゆる「新しき故郷」も、恐らくはこれ、最後の「古き故郷」、最後の「新しき故郷」にして、かくてわが子、わが孫は、感想の上より、現實の上より、衣川の里の幻影を思ひ浮ぶべく、永劫に禁ぜらるべければなり！。

卿よ想へ、故郷、ひとしくこれ人の集り成せる地ならずや、人は

移り人は變り人は動く、その人を載せたる故郷、いかで長へに變らず、老いであるべしや。山は自然なり、水は永久なり。しかも卿、童子が誦するところを聞かずや、已に聞く桑田の變じて海と成ることを、更に見る松柏の摧けて薪となることを。自然にして、永久にして、なほ「時」の侵蝕を免れざる斯の如かり。況んや人、徒らに慾に窒いで情に賈しく、之を摧き、之を壞らざる、惴々焉として、他の後に墜つるを恐るゝに於てをや。

人去りぬ、山と水と空しくなりぬ、かくして故郷の映象、そこに貽れる底物の影をか止むるぞや。

さもあらばあれ、われもと理を說くに拙なかり、たゞ泣を飲んで、そを直ちに說かん、曰ふ、

故郷は滅亡に瀕せり。

はた瀕しつゝありと。』

「滅亡」となり！、

わが耳朶、この一語に撲たれたる刹那、宛らなる落雷の、我が頭腦に震ひ來るを覺えつ、諸々の體内の機關は、矢庭に其の機動を止めて、ひとりわが脈搏のみ激しく、わが聽覺のみ敏なるを覺えき。

さはれ恐らくは、これわが誤り聽けるならざるかを思ひ疑ひつ。

『滅亡となり！』

『然り、滅亡なり。』

『かの小桃源の衣川の里も！』

『然り、滅亡なり。』

一刀激湍を斷つ、罪を斷ずる明法官の、宣告の聲の如く凄まじかりき。

兩人相對ひて、拱手言なきものやゝ暫時。

× × × × ×

友、肅然として說き起しぬ。

『何時よりとは知られず、酒に沈湎する惡風、村人の間に養はれ來りぬ。影なき惡魔は、天よりも濶き翼を擴げて、家より家、小路より小路、またき一村を經廻りつ。いまやそこに、この汚れに染まざるべき、一つの草の舍さへ殘されずなりぬ。

人試みに、つとめて起き出で、洽ねくこの村を經廻れよ。そこに酡き顏なき一つの窓ありや。

果せる哉。村頭の居酒屋は俄かの富に誘りて、杉葉立てたる又六が門、繩の暖簾はいつしかに取除かれぬ、欅の何分板、軒頭高く掲げられて、その上には、この村の書家何某が、得意の署名と題字、いと麗はしく輝けり。——あゝ忌むべき豫言の標札よ。村の衰頽を豫表すべく、東門の伍子胥が瞳なるよ。心ある旅人、誰れか愁の顰みを額に疊まざらん。やがて村醪油の如かりしは、やうやうに黃金色

の澄めるものとなりぬ。正宗となりぬ、麥酒となりぬ、ブランデーとなりぬ。

自然の統計表は、恐るべき警戒を明らかに示す。曰く「近きにあつて、面積と人口と最少なるこの村は、近きにあつて、他の三倍の飲料を耗費するの村」と。

これ果して、わが村の名譽たりしや。將來の光榮を示すべき所以なりしや。

酒に酗する、たゞに酒に酗し、金錢を浪費するのみならましかば、猶恕しもすべけれ、默してもあるべけれ。アルコホールの峻しき毒は、獨り生理上より、人間を侵害するのみに滿足する能はず、やがては心理上に掩ひ到ること、極めて迫れるものありき。星を戴いて出で、月を蹈んで歸り、鑿ちて飲み、耕して食ふ、「勤勉」と「精勵」もて聞えし我村は、今や老いたるも若きも、「疎懶」と「遊惰」ともて

名高くなりぬ。白晝田舍の靜蕭を破りて、時の太平を謳歌すなる、梭の音、磨臼の響、から桿の響、挽臼の響、いまいづこの廣庭にも聞えずなりぬ、もし聞くべくは、「耕さぬ家」守る鷄犬の啼き、それさへ餌乞ふなるべき聲の、世にもいと力なげに、姿よろぼひて、骨いたく痩せたり。さらでは親と子と相論がひ、妻と夫とが相鬪ふなる、厭ふべき叫びなりき、咀ひなりき、泣きなりき、喞ちなりき、器物を壞るの音なりき、其爭ひの原は貧しきにあつて、貧しきの因は力めざるにありき。うたてき哉。

かくして、「荒廢」と「頽滅」との戰車が輾る途には、刄向ふ敵もなかりき、到る所人みな鋒さきを伏せて、むざむざと其轍の前に跪くなりき。曩の靜かなりしこの村を、たとへて埋められし活火となさば、今日の寂けさは、再び起たず死に行くらん人の、引く息微けき哀れの態とやなさん。

家家の壁、鋤と鍬と鎌と鉈と、今鏽に彩られて懸り、笹蟹の蜘蛛の網、いく重にも其上を封じぬ。

夕べ、井偃のどよみ涼しく、朝の風に薫りて、稚き稲葉に、露ほろ〳〵と滾れし門田。今や醜草、おのがじしに生ひ茂りて、ほとほと人の丈を沒しなんとす。畑や園や、亦またく荒れに荒れて、蓬や野茨やすかん穂や、車前草や蕗や、貧しき童に糧を給すべく、そを拮むべく、其蹂み躪るに委せたりき。

こゝに村の光善寺の住持、寛水師あり、波に巖の日に日に頽れ行く、村人の有りやうを見ては、心にうたてく思ふこと限りなく、いかで素なる途に歸さばやと、聲を嗄し身を苦めて、家ごとに戸ごとに、村人を說き廻るなりき、常に侶なふは其螟蛉なる、學び舍の長、岸田青波先生なりき。

遮莫卿知れり、隻手は以て、廻瀾のあらびを扛ぐべくもあらざる

を。また知れり、一掬の水は、以て逆捲く萬家の焰を消つべくもあらざることを。

流石に村人の、二人の長者が在る前のみは、いたく面伏なる態もし、愧ぢらへもすべけれど、張りたる弓絃の、いつしか素に皈へりては、露驗しあるべき氣色も見えざりき。さはれ卿これを惟へ、世の國民をして、豫言者の豫言を眞心に信せしめば。之を信じ、其警戒の鞭の指す所、心を傾けて護り愼ましめば、歴史は何の頁に、いはゆる豫言者の名を見ることを得んや。事、眉を焦すばかり唐突に起りて後、始めて立騒ぐは愚民の常なればなり。事起りて、始めて豫言者の聰明を驚くもの、これ愚民の常なりければなり。かくて愚民は救はれずして滅び、始めて豫言者の名は、歴史の上に耀く。禍なりといふとも、これはた奈何にせん。

然り、わが村人もまた、「見えざる禍」の影に膝行頓首せんには、

其頭あまりに硬かりき。かくして典すべきは典しぬ、鬻ぐべきは鬻ぎぬ、四壁髐然として、たゞ桷と床とのみを羸し、囊裡のもの屢ば空しうしては、天上界の興趣、また容易く享け得可くもあらず。かくして暗憺たる「死」を將ゐて、「飢餓」其面を睨んで立ちし時や、流石の村人も、始めて愕然として逡巡かざるを得ざりき。あゝ此時、わが村人は長夜の夢より寤めたり、已に寤めたり、いざさらば相率ゐて、單純なる昔への活計に歸るべきか。而して歸りたる乎？。

いな、いな。虚榮の渠等が肝を蝕せる、そは思料の外に深かりき。久しく遊惰に荒める渠等の、今平靜なる反省に立ち歸らんには、其氣の餘りに豪なるを憾むべかりき。かくして村の爲に身を屈せんには、餘りに無敎育に、餘りに決斷よかりし渠等の、最後の斷案は即ち曰く、「鄉を去るべきのみ」！、「鄉を見捨つべきのみ」！。

かくて村人の多くは、何等の殘り惜げもなく、相率ゐて其鄉關を

見捨てぬ。幾百年の昔、礎をこゝに置きてしより、幾十代を棲み老いし村の舊家も、昨日けふ、烟飛らずなりぬ。遠つ御親が鍬の跡、深く印したりし豊かなる畑は、たゞ荒れたるがまゝに廢てられぬ。蓑笠雨に白れて、絶えず弓矢を握る案山翁、好矣かの翁まことに憐れむべしとも、已に鳥啄むべき稲穂さへなきを、そも誰が爲に盡さん孤忠ぞや。

ある青年は出でゝ巡査となりぬ。教師となりぬ。とある一家は、鴉の浮巣の長へにゆられ行きて、所定めず漂らひ渡るものもありき。ある者は椰子生ひ茂る臺灣の原に、ある者は、胡沙吹く風寒き北海の濱に。榛の木高き田の畔より、栗の花白き伏屋より、昨日まで見たる耕人も、饁を田に運ぶ若き妻も、今日は其影失はるゝぞ多かりき。さるからに繁榮の光、今、山の端に入る缺月よりも淡く、一幅「頽廢」の畫絹、今し見られざるに懸けられぬ。また愴ましからずや。

然り頽廢！、人去りぬ、地蕪しぬ、炊ぐ烟颶ること日に稀にして、人棲むものやうやく微けくなり行く。われこれを以て「頽廢」と呼ぶ、果して何等の理りなかるべきか。

卿よ、卿は僕に憑りて、「新らしき故郷」を聞くべく望むといふか、さらば正直なる故郷の活寫とは、實にかゝるものに過ぎざるなり。

卿よ。卿は「新らしき故郷」の便りによりて、いくばくのなぐさめを得べしといふか。たゞ今し卿が、これ等によりて收め得たる慰樂の、そもいくばくなるかを我は得知らず――』

悲痛なる友の聲音は、打濕めれる室の空氣を透して、鳴り箭の樣に顫ひ動きつゝ、其鏗爾として言を斷てる今は、さながらなる深き淵の、深く沈める其眸には、抑へ兼ねたる悲涙あり、潸然、膝を撲ちて、雨聲よりも繁きものあり。

つれ無き雨、夜にいたりて猶歇まず、折々に、梧桐の病葉を戰かす風の音に、われほとほと情に得堪へず、「半夜燈前十年事、一時和雨倒心頭」。ひとり影青く、光朧ろなる短檠を掲げて、大陸漂浪の詩人、ゴールドスミスの『荒村行』を讀む。

× × × ×

……

あゝ甘美なるこの村よ、
かくの如愉快多き遊戯の連續もて、
勞働を怡ましめたるこの村よ。
これ等の怡樂多き感化をば、汝が小屋の周圍に坌湧せしめけん
この村よ。
すべてこれ、爾ぢが特有なる景趣なるなかりしか。
しかも今、凡てこの光景と風趣とみな逃れ去りぬ。

愛らしき笑めるが如かりしこの村よ、
國中に最も愛らしかりし村よ、
爾の遊戯今や去りて、爾が快樂いまや消え失せぬ。
汝の家の中には、たゞ暴君の腕あるのみ。
「荒廢」の黒き影、全き爾の原野と綠土とを掩ひたり、
たゞ一個の主人、またき國土を掌握して、汝の笑めるに似たる
國土より、稼穡の半ばは廢れたり、
玻璃なせし小川、また日光を反照さず、
空しくセッヂー草に咽んで、雜草多き汀を潛り行く。淋しき孤
客なる水駱駝は、爾が林中の大路を通じて、皺嗄れ聲の悲啼、
わづかに其巣を護るなり。
淋しき其道には、ラップキング翔り、單調なる叫びもて、周圍
の反響を勞らさずや。

容なき頽廢の中に、凡て汝の家は沈みぬ。
長き草、朽腐したる破壁に攀ぢ上りつゝ、
爾等の兒孫は、畧奪者の手より遁れて、戰慄しつゝ叫喚しつゝ、
遙かに遙かに、遠く此陸を見捨てぬ。

× × × ×

さはれ今や、群集の響すべて消え去りぬ。
夕暮風吹けども、樂しき叫きまた漂はざる也。
往來稀なれば、雜草叢なせるありし大路を、
忙はしき蹄音一つして歩むものなし、
人生の活氣、いま凡て遁れ去にたれば也。
凡ての中たゞ一人の寡婦、かしこにぞ取り殘されて、
今淋しく、せゝらぐ小川の畔に衰へて屈めり。
かくて寄る年波に便りなくなれるかの女は、

こしよう草掩ひ廣ごれる小河より
麵麭の料にせんとて何者をか索め
冬寒うしては暖を獲んが爲に、荊棘の中より柴をぞ抽くなる、
されど其夕に寢ぬべき宿りなくては、
餘りの悲しさに、泣きぐつ折るふもいくそ度。
あゝ純朴無邪氣なる群より、たゞ獨り取り殘されたるかの女、
あゝ悲しき國土の、愁多き歴史家よ。

× × × ×

詩人知らず何の情緣ぞ、白波騷ぐ太洋の北に、この般哀切の情絃を彈じて、殘んの響、遠く千百世に傳へ、東海の遊子をして、多恨の心を寸斷せしむること斯の如き。

「あゝ樂しきアーバンの村よ」、爾もまた曾ては國土の最も愛らしきものにあらざりしか。

二　わが村——郷黨

思ひやる、越の白山しらねども
一夜も夢に越えぬ日ぞなき。

わが郷は、越のしら山、深雪白き里にはあらで、黄金華咲く陸奥や、秋風寒き白河の關の彼方にあり。さはれ日に異に思ひ惱みて、一日も故郷を戀ひぬ日なきことの、いかでかの古詩人の想ひに劣るべきかは。

あゝわがふる里よ、美はしき故山よ、われ今し遙けく眼を擧て、慕はしき山河の影を思ひ望めば、故郷は遠し百里の空、蒼烟深く烟樹を立ち罩めて、故郷何のところにありとしも覺ほえず、いな、ふ

る里の面影の、ひとり今にして望むべからぬのみならで、百世また千世、永劫また現世、つひに得望むべきもあらざるを懷ふとき。人よ暫く容せ、せめては玉ゆらの慰めとも夏の夜の夢よりも儚なき、わが微けき記臆をわづかに呼び出でて、朧ろげなる故郷の輪廓を、こゝに描き出さなんことを。

× × × × ×

薔薇色なせる餘んの光、今小山の上に躊躇ひしとおもふも暫し、餘りに穏やかなる小山の姿の、はやも夜の眠りに入りたるやらむ。幾山川を踏みさくみたる、そが草鞋の下を無心にせゝらぎて、「夕暮の歌」奏づる里の小川の、淺瀬の波は、たゞたゞ濃き古酒の色と變せり。川の汀に、隙間もなく生ふる虎杖、牛額、川原蓬など、みな多言なりし其唇を緘ぢて、今しひとしく、閑寂としてたそがれ行く、餘りに美はしく、あまりに平和なる、この村の暮色に見とれて、暫

しを立ち止りたる若き旅人よ。

卿、その菅笠を斜めに、西の方夏かに振り仰ぎて、淋しき瞳子に、入日隱ろふ雲の帳帷深く見入る時や。

さて村の方を顧みて、そこに村の「富」の表章なるべき、甍の影と白堊の壁と、木の間を高く抽くものはなくて、檐を並ぶるは、たゞいぶせき埴生の小屋のみなり、艸の屋のみなり。人烟とては、もとより稀疎なる瘠せ村の、自らにして「文明」と「交通」との、握手を避けたるを語るを思ふ時や。

さればやそこに、「御本陣」の標札、いくとせの雨露に白らされて、風に唸る障子の破れは秋の蟬の鳴く音よりも幽かなるべき、一軒の宿りさへ索むべからぬを思ふ時や。

あゝ今し千草の葉末を歩むべく、露を含みたる空氣、天上の闇より下界に墜ちぬ。「沈默」と「幽寂」と、また旅人の精神の上に墜ちて、

獨り限りなき淋しみを、胸に刻むことなかりけんか。

心安かれ、わか旅人よ。

さらば御身は、たゞ〳〵しき木の下道を月に辿りて、カンテラの光り微かに洩るゝあたり、形ばかりの扉ほとほとゝうち叩け、叩くことい〳〵ばくならず、藁撲つ響、庭もせの虫の音とゝみに止みて、渥丹より赭き顔あり、心より御身を悅び迎ふべく、黃楊の小櫛の取りも見なくに、綠髮ほゝけたる其妻は、甲斐々々しくおん身が爲に立働きて、まづ御身が餓を滿さんと務むるなるべし。日光塗の食膳は、よし脚折れて煤けたりとも、その糲は粗くして石よりも硬く、村醪味なくして、さながらに水に似たりとも、さもあらばあれ、世に客人を待遇して、「心より」に勝る滿足と安慰とを與ふるもの、そも何の天宮にか之を求め得べきぞ。

あゝ旅人よ憂ふるものよ、漂ふものよ、悲しめるものよ、苦しめ

らるゝ者よ、御身等等しく、みなこゝに來るべきか。心の惱みと憂へとを洗ふべき、天の眞淸水はたゞこゝに湧く。汀の老松、翠蓋滴るが如きに掩はるゝものは、歡樂の夢長へに覺めざるべく。風そよぐ其葉末の囁きを、永劫に聞き得るものは、わが世樂しき圓滿の世界、長に棲み終ふことを得べければ。

好矣、其村は瘠せて貧しく、よし其人烟は稀疎なりとも、民は純朴にして情熱く、地は美はしくして水淸かり、祖先より其まゝなる太古の村！

これやがてわが憶ひに活けるふる里なりしなり。

× × × × ×

こゝにわが古き村の俯をして、さらに地理的に、精細に紙に模さしめんか。村を繞り村を包みて、一條の河あり東に流る、汪々として濫れざるの水、注ゐで以て濠となすべし。左と右に小高き阜あり、

きながらに張れる翼の、絶えず村界に押寄する、敵を警め告ぐること、なほ二つの望樓の如し。後は千頃萬頃の稻田麥田、天つ御空の底を撫づるやうに、いとはろばろと擴ごりて、雲に消えゆく鳶一羽、影は蟭螟よりも小さかり、かくてこの收穫よ、刈りて以て、百年籠城の糧に充つべき乎。

知らず天地鴻濛、未だ判れざるの始め、いかなる神の使ひ鳥か、こゝに一粒の、禾の種をば啄み墜しけむ。

知らず那者の大聖か、敢へてこゝに、かゝる自然の區劃と城壁を築き爲しけむ。

家を掩ふて杜あり、杜の影に鎭守の祠あり。家を繞りて渠あり、渠を掩ふて竹籔生ふ。麥を搗くべく、稻を扱くべく、いづくの庭にも、禾穀の滾れ種あり。

庭は宛らなる、草なき野邊と廣く、笆の下に鳳仙花と、鷄頭花と、朝顏とあるは、いづくの家も等し。

松葉牡丹は、繁殖極めて遄やかなるものなり。さはれ我村には「ほろべそ」と呼ばれて、語音の「滅び草」に通ずるより、いたくこれを忌みつ、この花を植うるを敢てせざるは、何れの家もなべて然りき。

「酒屋に三里、豆腐屋に二里」とは、極めてふさはしく田舍を寫實し、一句簡にして悉せるものとぞ聞く。げにや一軒の理髮屋なく、一軒の旅宿さへなかりし我村は、極めて自然なりき、しかも極めて不便なりき、しかも酒屋と豆腐屋のみは、確かに詩人が限定したるものより、除外例の特權を要求し得べきものなりき。

豆腐屋は村を西に、村校の前面にありし。主人は寡婦なりき。想ふ小さき胸一つに藏めたるべき、半生の悲劇そもいかに。夜着もや

薄き、夜や寒き、木枯寒き夜半の夢を、花羞づる乙女の昔に泣くことありやなしや、さはれ今は五十路の齡をこゑたり、其の土着の人ならぬは、輕き辯舌の節にもほの見えて、勤勉なる、親切なる婦人なりしよ。あすの勞働に、新たなる力を集むるべく、靜けき田舍に沈默の夜は更けても、かの女が窓の櫺子よりは、燈し火煌煌としてなほ洩るゝなりき。明星爛たり、昧爽の下界、曙の色未だ下らざるに、渠の女が家の磨臼は、はや遠雷の響きして、其齒の進みを忙ぐなりき。

村の中ほどに居酒屋はありき、酒屋更に湯屋を兼ね、湯屋更に可笑しきは、其氷屋を兼ねたることなりき、氷屋にして汁粉屋を兼ね燒薯屋を兼ね、更に甘酒屋を兼ぬるは、これ東都に見る所、たゞ氷と湯、積極と消極と和合一致せる、配合の可笑しき、未だ斯の如きは多からざる也。しかも其矛盾と照繳とは、獨り職業にのみ見らる

るに非りき。主婦といふは、體量四十貫目にも餘りぬべき、謂ふ所の衛生的美人なり。一たびこれを見ては、いみじき盜人の大將軍なりとも、恐れをなして驅け出しぬべき板額女なりき。主人は骨瘦せて丈矮き小男也、滑稽縱横口を衝いて出で、惡謔飜弄、人を人とも思はぬに、細君は怒り上戸の、至りて馭し惡き氣六かしやなりき。

實に面白き一家の組織よ。

またき村の死命を制して、需要と供給との權を握れる、村に二軒の雜貨店あり、かの專制の君主の如く、居然として村の中央に坐せりき。げにや全き村の財產と、日毎の勞働の生產とは、一に憑りて、この專制の主の掌に在ることなれば、村人みなが恐慌して、其店頭を覗ふこと、なほかの戀する男兒が、愛する婦女の一顰一笑に、心痛むる態にも似たりしは、げに理りありしことぞかし。

五十いくばくの職名を、一身に帶ぶる都の何がしが、其の繁忙な

るべきを想ふものよ。さらば來りて、こゝに軒を並べたる、二つの雜貨店の光景を瞥見せよ、蕓子は砥石に隣り、手巾は絹糸と雜居し、一里玉、玉兎、有平糖、（駄菓子の名）は甜瓜、林檎、巴旦杏と混じ、洋燈と草鞋は裏板に懸り、卵子と草箒は、つねに石炭の空函の中に寢ねぬ、七夕の彩紙購ふべく、村の少女嬉しげにこゝに走り。遠き家路の在所人は、大根と石油罐を空荷駄に載せ、駄馬牽いて店頭より立ち去るなりき。

かくして人、分業の要を感ぜざる此店頭を見て、いかに此の田舍の長閑なるかを思ひ。呉服屋、紙屋、小間物屋、糸屋、ランプ屋、雨と降る劇職一つ身に占めて、綽々として餘裕ある兩家の主人の、希有なる敏腕家たるを、たれか驚かざるべき。かくて興ある、渠等の物語を聆くことを、誰れか得喜ばざるものあらむ。

東家の才子は、顔圓く肉づきて、猫にも似たらんかし、齒は四十

路ばかりか、面にわざとらしき笑みと愛嬌ありて、人を看る眸に、氣味わろき鋭き光あり、心の奥底はいと測り難き曲者なりけれど、直ぐなる心、たゞ一筋ぢなる田舍人の、そを見破らん眼もなければ、いと巧みなる辯舌に、たゞうまうまと籠絡さるゝなりけり。

西家の才子は五十路を越にたるべし、蒼黑き顔に底光りして、大いなる口、破れたる鐘にも似たり。廣き額のあたり、青筋蛇の樣にめき〳〵と動きて、商人たるには餘りにふさはしからぬ、執拗と意氣惡るとの性、あり〳〵と顯はしぬ。かくてこれらの性に必然なるべき、貪婪てふ侶は、いづくよりか伴なはれ來りぬ。即ち特に渠れが爲にとて擇ばれし、名譽ある其の屋號に曰く、天竺屋！。けだし支那を唐と呼びしが如く、印度はその昔、わが國によりて天竺と呼ばれたりしなり、途渺茫として殆んど無限際、かの天上にありとの由因よりなりしならむか。即ち渠れが家の貨物の、値ひ甚だ廉なら

ざるや、價の「高き」、なほ天の「高き」にひとしてふ創意より、天竺屋といふ名は與へられしとか。蒼海ときに遺珠潜み、草莽荒涼たるの中、また自ら滑稽の大才を容れざるにあらず、惜むらくはかゝる創意を有せし人の、其名長へに湮滅して、其人つひに踪ぬべからざることよ。

我村の鍛冶は、不幸にしてロングフエロー詩中の主人公ならざりき、渠は即ち歌つて曰ふ、

萇々たる栗樹其の梢を開くところ
樹下に村鍛冶の鍛冶屋立てり、
渠れの軀幹は逞うして、渠れが腕は硬く筋立ち
かれが褐色なせる臂は以て鐵の索をも絢ふべし。
かれが黑き毛髮は捲き綰れて長く芟られず
かれが面の色は黃と褐とを交へたり、

かれが額は聖く尊き汗を以て濡らされ、
かれは自らの精力を以て其麵麭を獲、
素より纖芥を、人に負ふを屑しとせざれば、
「萬人と雖も」、渠れの往き能はざる所あらんや。
一週また一週、朝よりまた夕
女ぢ、渠れが鞴子の、絶にず風に嘯くを聞くことなからんや、
女ぢ、よく整ひたる緩急の調子と、安定と沈着をもて鐵鉆に
打ち下すなる、渠れが鐵槌の響、
たとへば殘照まさに山の端に沈まんとして、
鐘樓守が打ち鳴す晩鐘の如きを聞けるなからんか。

わが物語の目的、——この鍛冶屋の主人公は、其褐き面に於て、其剛き腕に於て、其むさぐろしき鬚髮に於て、而してその逞ましき軀幹に於て、かれはみな詩中の主人公に似たりき。しかも八重葎荒れ

茂れる庭もせに、一株の栗の樹さへも見られざりし如く、其性に於て、氣に於て、頗る軌を異にせりき。渠れは勤めたりき、これは然らざりき。渠れは神に祈りき、これは然らざりき。この人の天地は醉境にあり、盃酒の中にあり、「醉はんが爲に勞働し、勞働するが爲にたゞ醉ひ得」とは、これこの人が、生活の理想の all なりき。しかも渠れは、人がかゝる性癖に多く待ち設けたる、天才の腕を有せるものに非りき。

かくして、よしや、旭が丘に鴉の啼かぬ曉はありとも、かれが澁色濃き面の上に、微醺上らざる日とてはなかりき。かれが長虹の酒氣を噴く間、かれが鐵鈷に鐵鎚の音なく、かれが鞴子の前に火花散らざりき。さればや、早く寡婦となれる渠れが老孃は、他の爲に嫁衣を裁して、辛くも我れを養ふの、止むを得ざる者ありき。

さはれ今、生存の鬪ひ、わが村に止みたり、農夫の武器は拋たれ

て、塵ひぢの中に埋もれぬ。愧づべき「敗北」と「衰滅」の影と、雲を黑うして、わが村の額に懸れる今は、老いたる鍛冶のなほ何時までか、よく憂へなきその夢裡仙郷に、よく舞ひ奏づることを得んものぞ。

あゝかれや老ひたりき。願くは上帝、此の夢裡の仙郷より、渠をして長へに覺めざらしむべく、わが現し世の恍惚境より、一時も早く、天上夢幻の樂園に召還し給へや。

想ふ脛折れたる蟋蟀、露置きわたす八千草の、秋に咽ぶらん夜は半、かれをして、七十年一醉の榮華より覺めしめ、眼を故郷の零落に回さしむるときや、開けて口惜き玉手箱の、水の江の浦島が子が新たなる恨み、電狼の涙、あゝわれ遂に想ふに得堪へんや。

あゝ其皺は好笑の爲に嵩まり、其髮は雨雪の爲に白く、兒女の生活の外に一の憂苦なく、村醪一つぎの他、絶にて希望なかりし、理

想の人、田舎人よ。渠等が眼界は單調に、渠等が一生は單調に、天長けれ共天老いず、地久しけれども地古びず、兒女を殘して去り、墓碣を得て此世に遺る、平和の代表者よ、樂園の活模型よ。われは渠れ等の列傳を繰返へして、つひに倦むことを知らざるものなれども、憾むらくは到底に歸する所、ひとしく「單調」の糸車を廻らすものたるに過ぎざるを。

× × × × ×

いざさらばわれをして、遺り惜きこの過去帳を見捨るべく、その最後のものゝ、そのたゞ一つを、こゝに語ることを容さしめよ。――そは涙に染る薄墨の色、よしやいたく鈍びたりとも、悔恨と感謝との鐵筆かたく握りて、想懷の巖の上、深く彫りつけたりければ、湧き立つ千世の荒波にも、永久に拂ひ退けらるべくもあらぬもの。

秋風白く、眞葛の裏葉吹き返す夕を、われその人の、いまぞかり

し折偲び出でては、この怨綿々たり、つひに忘られ得べうもあらぬもの。

かくして我れは、先師岸田先生を語るの止むを得ざる也。

想へば先生が、始て其鞭をわが村に執られしは、わが齡漸く九つの折にして、その病に斃れたまひたるまで、凡て十有四年の光陰を經たり。かくてこの間、君が成し玉へる凡ての事蹟は、げにや君が咯き給へる熱血もて、わが校の壁に銘すべく、榮あり、譽れあり、光りある歴史なりしかな。

先師いまだ、わが校に臨まれざるの前、多くの教師は、而て校の長は、いかに指斥きすべき、嗚滸の痴者なりしぞよ。餘りに平和に、餘りに無智なる村人を導くべく、渠れ多くの指導者は、尊とかるべく、威あるべく、重かるべき執鞭の人として、いかに其の擧動の放縱なりしぞよ、無風流なりしぞよ、大膽なりしぞよ。而して躬らが

天職に愧づべかりしよ。村の平和を破りしものは、實に渠等自身也。曩の平和なる村人をして、敎の人と諍ふに到らしめしもの、實に渠等なりければ也。

生徒が入學の折の束修は、一升の酒德利にして、敎師は新入の生徒と、及び其父兄を膝下に侍らし、兒童の將來と、小學に入るの目的とを、諄々と說き訓ふべくして、しかも夫子自身は、肴を茹ひ、核を求食り、酒盃を啣んで、宛らに盃中のものゝ、甘美か否かを味ふが如かりしもの、これやがて、入學宣誓式の光景なりしなり。かくて校長の私室なるものは、わづかに一板を隔てたるのみにして、敎室と相隣りたりし也

衛生の演說と、敎育幻燈とに、村人を會すべき校の樓上は、いま相撲の土俵となり、亂舞の好舞臺とぞなりぬ。酒に酗せる校の長、やがて去りぬ。迭りたるは、近村の富豪の子、温順なるを能として、

他に能なき校長なりき。日毎二里の道を、歩みて往復するなりき、近眼を裝ひし青眼鏡、これぞ渠れが目印しなりき。かつて村人に惡まるゝことあり、ある闇夜の歸り路を、礫の雨に要擊されしと噂あり。てより、這の箇の青眼鏡は、再び村界を見舞ふことなかりき。村の青年、剽悍狠の如く、野性習を成しぬ、ほと〳〵治す可らず。時ならぬに敎室に濫入しては、またく理りなきの難題と、陋野面を背くべき、卑語陋辭を弄び、年まだうら若くて、物馴れぬ敎師を苦しめては、快哉を大呼して散ずるなりき。まして怪まじな、兒童の自ら縱つこと、偏へに春の若駒の、野に蹄み跌みて銜なきが如きを。素よりこれ自然の數なれば也。

村人は喞ちぬ、而して憤りぬ、叫ぶらく、「敎育乎、敎育乎、敎育それ胡爲るものぞ、白堊の層樓、摧いて以て薪となすべき哉」と。聞け！ 木の葉さやぎぬ、風樓に滿ちぬ、噴火の雨、まさに下らんず

る危機一髪の刹那！、わが青波先生、卒然としてこゝに臨み給へり。村人の凝れる眸は、ひとへに先生の渺たる一身に萃められぬ、温乎たる白面郎君、知らず何等の徳かある、學かある、成算かあると。先生凝然たり、動かざること南山の石の如、はた北斗の樞星にも似たらんかし、道聴途説、君つひに耳を傾け給はざりき。村人の一類一笑は、葉末の露に宿る稲妻の如く、君しばしだも念とし給ふことなかりき。かれたゞ其天職を自信したればなり、邁みい往きて、いくばくも躊躇なきことの、自然の勝利なるべき外、他に一つの、當日の急務を知られざりければなり。

こゝに自信と勇氣と侶なはゞ、人は凡ての禍を變へて、光榮ある勝利となすことを得むなり、わが先生の例は確かにこれなりき。人よ更に想へ、文なき闇は天地を埋めて、わが帆破れ、わが檣摧け、我船迷ふ、劔に似たる暗礁前に當れり、われまさに玉藻の底に沈ま

なんとす、飈ちにして波の面焔燿たり、磯山影の燈明臺に、其光を掲げ始めたる見ては、舟人誰れか相擁いて、今絶望より救ひ上げられたる其復活を相慶せざるものぞ。先生は燈明臺なりき、救ひの火なりき、村人の蔑視は今畏敬となりぬ、そらぞらしかりし揖禮は、いま心服となりぬ。夫れよ、わが始めて先生が愛撫の下に服したるも、想へば實にこの過渡の比ひにありしか。

記す、先生が、われ等衆生の前に立ち給ふときや、温乎として玉の如、雅やかにして物静かなる風牟、内自ら云ふべからざる威嚴を含んで、親しむべし、狃る可きにあらず、眼に熱情の輝き燃ゑて、渾身に職に忠なる勇氣溢る。今宵限りの生命のみ、あすは仇し野の露に消ゑんと、深く思ひ定めたる勇士の姿あらずや。

先生はいたく己れを愛しみ給へりき。われ幼し、其何故なりしやは覺ほえねど。われは下手の横好きの、好んで漢文調の似非文章を

作りにき、先生懇ろに訓へ給ふらく。

『文は意を達するを主なりとす、まして日に事繁き今日をや、爾ぢなど猥りに險字難字をあなぐり列ねて、變屈儒者の所爲に法り、得得として誇り衒ふことを敢てするや、「爾來久濶臺下恙なきや否や」は、よろしく「其後は打絶ねて御無音にのみ打過ぎ候處、貴兄如何御消光遊ばされ候哉云々」などあるべく、「抃舞雀躍屐齒の折るゝを覺えず」は、「此上なく嬉しく存申候」にてもよからずや、爾ぢ旃れを戒めよ。』

われたゞ唯々。尋いで『作文類纂』『開化用文章』など、何くれとなく心を用ゐて、われに貸し與へ給ふなりき、われたゞ首を俛して、其恩の渥きに謝するのみ。しかも次回のわが文は、即ち記して曰ふ也、「昨芝眉に接す、生平の幸事此れに過ぎたるものあらじ云々」。曰く「人生朝露の如し、耆翩これを奈何かせん」！ 先生一瞥、微笑

みてまた何事も宣はざりき。其まゝにわが頑陋を恕し給ふなりき。

さはれ先生の素養は、漢學に於て最も深かりき。わが古き歴史帖の緒言に、「開活眼讀活書」とあり。地理帖に、「一瞬千里」とあり。作文帖に「文章不朽之盛事」と魏の文帝の言を記され、わが雜記帖に、「五侯鯖」と名づけ給ひしも、みなこれ我を字しみ給ひし、美はしく懷かしき紀念なる、先生の水莖の跡ならずばあらず。はた一冊の手帖を新たに作る毎、序といひ緒言といひ跋といふ類の、こちたくことごとしき七つ道具を引き出すことは、癖多き中の、わが最も惡しき癖の一つなりしよ。

筆一枝、紙一葉、「先生の御用に立ちし」てふ語は、世に此上なき光榮と覺えたりし。そのわれ等が間に、雲雀麥畑に冲り、微風袂を拂ふ野山の晴日、先生が筇の後べに隨ひまゐらせて、貝殼の化石なんど拾ひしことの、いかばかり誇るべき出來事なりしぞ。

家居に訪ひて、『外史』『政記』『家道訓』なんどの講義を伺ひまつり、それ終りては、先生の愛子と共に、歌留多、雙六など、心ゆく許りに遊び戯れつ。ある日のことなり、わが先生のひたすらに、われを庇護するよとのみ思ひ邪み、日ごろ嫉み、憎みつゝありし某生の、事に觸れ、突如として叫ぶ様は、「兎角に先生の、くれかし君のみをいたく庇ひたまふこそ、教師、はた校の長の仕業としては、またく心得ね」。

詰り問ふ息吹、をさをさ激しかりけるを、默して他を言ひ給ひし先生の御心、何事かありけむ、われは得知らず。たゞこの人の御爲、一身を捧げて、醢たるを悔いじと誓ひしは、げにこの刹那にありき。

われ一朝故園を逝りても、秦樹楚雲、尺鯉なほ相通じて、慈しみ深き先生が御情、つねに掬むべきものありき、「われ一日も卿を忘せず、それかしの雜誌の上、勇名常に高き卿を想ふて、轉た欣喜に堪

えず候、猶一層の御奮勵祈り上げ候」など。われもと駑駘の才、世のいはゆる勇名といひ何といふが如きもの、戯れにだも捉ひ得たることあらむや。なほ且つ故先生の、眷々としてわが爲に懷ひ、われを鼓吹せらるゝ、げに斯の如きものありしかを思へば、われや瞻然として、頭の自らに垂るゝを覺えず。今夜屋梁の殘月、瘠せて人に似る、噫、噫、いま先生在さぬなり。

わが故郷を省せるひと日、己れ先生を訪ふて、疎濶の罪深きを謝し、想懷の胸、赤子の慈母を懷かしむものありき。さはれ、伏し目なる眸上げて、師が御面の瞥見を竊める一瞬や、わが心慘たり、云ひ知らぬ哀痛の、われを壓するものあるを覺ゆるに堪えざりき。あ先生、など瘠せ憔れ給へるのしかく太だしき。

歸來友に語る、

『先生の御心を務めの爲に勞させ給ふ、一にこゝに至れるものある

か、何ぞその顔容の、髣髴として病めるの人に似玉ひつる事よ、

『然り、卿徂いて數年、先生肺の患を獲給ひぬ、某街の醫[illegible]士、その枯葉樹を繞る蒼流山のあたり、晩鴉啼くこと佗しき、ある夕なりしを診して云ふ、恐らくは長へに癒へざるべしと。それよ去年の秋、

よ、師が妻の君、──貞淑にして清婉、いたくわれ等に懇切なりしは、卿もなほ記さるべき筈の。しかして伉儷いと睦まじかりし──さしたる病とてもなくて、他界に隱れ給ひしは。

それより暖き惠の光、また師が家の檐を窺はず、師の氣頓に萎れぬ、面瘠せて窶々しくなることの、日毎に際立ては、村人いたくこれを傷み、はた面を背けて、泪さしぐまぬものなかりき。痛むべきは師に一人の愛子繁夫の君なるよ、二人が中の掌の玉、はた偶像たりしいたいけなる和子の、いまは片羽なる、雛鳥の片親となりつ、性さへいたく父君に似通ひて、いと打沈めるを、流石に父なる人の、

わが生くることの長からず、亡からん行末を思ひ遣りては、淋しく相對ふ爐り火の、消えがてなることも屢なりとかや』。

われたゞ答ふらく、

『あゝ然るか』。

× × × ×

光陰の梭、飛ぶこと羽よりも急也、われ孤劍こゝに落ちて、はやくも六年の今日とはなりぬ。切なる思ひ出に、我胸は狹霧に閉ぢつ、彩ある雲に、心いと淋しき夕なりき。一封故園よりの飛信、はしなくもわが机上に墜ちつ。曰ふ『師、つひに逝き給ひぬ！』。

凄慘こゝに極まる、われ愀然として、後を顧るに堪へざりしもの、やゝ久しかりき。あゝ禍神、其の根を岸田一家の礎に植うる、何ぞれ深きものあるや。

友附記して云ふ。

『驚くべき強き意志と熱誠とは、これ先生が生命なりき。活火内に燃ゆる先生が痩軀は、然り葦よりも弱く見えたまひにき。御面は、紙よりも白く見えたまひにき。しかも人は、いかんの雨、いかんの風にも、教師室の一椅子の前に、粛たる先生の坐容を拜さぬその一日もなかりし也。われはかくして、情と熱誠とが重きいたつきと戰ひ、つひにいたつきを壓服したる、希有の例をこゝに認得たりき、深き驚嘆の賛へと、熱き感謝の涙とを以て。

さはれあゝ先生は！。

先生の養ひ親なりし、この村寺の住持寛水師、わづかに數日の激病にて斃れられつ。

先には千歳とも飽かず契り籠めにし、いとしの美はし妻を喪ひしに、いまはた村の重き望みたるべく、朝たに夕に省りみ侍べりて、そのすこやかなる温顔をば、千鎰にも易え得じと喜びし親人の、期

すべしや一葉の草の露、脆くも朝の風に散らむとは。深く蠢みて、隨うつろなる林の朽木の、自ら勵み、自ら障へて立たむには、そは餘りに激しき、一吹き風の荒びなりしよ、力に堪へざる大打撃なりしよ。かくして一つの柩は、一つの後にまた一つを添へて、ある夕、菩提寺の門をくぐりぬ、暮の雲に消え行く蕭々の一行、夕の輓歌、いかにうら悲しかりしか。燒香の比ひ、闇すでに洽ねかりき、線香の烟り、ほのぼのと立ち颺りて、消え行く末をふり仰ぐ方に、はらはらと墜つるは露か雫か、はた泪か。老杉の木ぬれに、新星の影二つ、殘んの夢に似たり。それや默して柩に伏されたる、二人が不滅の御靈魂にはあらざりしか。

村人皆ひそかに袖を沾しぬ、われも泣きぬ。さはれ今は、わが拙き筆により多くを語りて、君を悲ますことをなさゞるべし。たゞ云ふ、またき孤し子なる繁夫の君は、繼しき其母と共に、家居を鬻ぎ、家

財を濁ごして、數里の田舍へと便られぬるを。光善寺に後住の若き僧は、說敎に漢語の片腹いたきを交へ、政治を論じ、金儲けを計り、法要には、たゞ布施を貪るなど、破戒無慚の賣僧とはなけれども、斷じてこれ、佛弟子とは名づくべくもあらぬ、剃髮緇衣の俗人のみ。苗代小田の、日に月に濁り行く世に、淸瀨の河波、眞如の月、長へに澄み果つべくもあらず、漂ふうたかたのうたてきは、げにわが鄕の今日此頃ならずやと』。

あゝ寬水師や、靑波先生や、終に逝けるか。鸞輅の軋り遠く、遠く、白雲の故鄕に歸り給ひしか。

三年家門に入らず、坐暖まるに遑なし、禹の水を治むる熱誠、これ寬水師が法る所ならざりしか。魏賊と天を戴いて生きず、死しては漢家の鬼とならむ、孔明が職に殉するところ、これやがて先生が則とせし所にあらざりしか。寬水師は、ひとり法の道を說き布ける

のみならず、また袈裟を着けて鋤を執り、身躬ら、日暖かき南畝に芸り給ひつ、かれ村人が溫順なる胸に、「勤儉」てふ薰り草のその一粒を撒れたりぬ。わが先生は、無邪氣なる敎へ兒の、岐に哭せるを、糸の染まざるを、正しきに導き訓へたまひぬ。しかのみならず、滿面の鬼髯、鬼さへ拉ぐらん村の髯漢子に、人たるの道、民たるの道、村の譽れと國の愛と、遺る所なく說き戒めたまひぬ。かくて曩きの豺狼たりしもの、いま欄に眠る小羊となりぬ。曩きの驕兒たり、頑兒たりしもの、今從順なる嬰兒となりぬ。云はずや村人、過ぎて先生の門側に及べるとき、馬上に小謠の聲をひたと止めたりしと。

あゝ寬水師在せり、先生在せり、荒野にさまよふ旅人の、行くらん途指す北斗星の如。此村に師と先生と、爛として輝き給ひしとき、我村は、花咲き匂ふ春よりもうるはしく、宛として希望に充ちたりき。士、夜闌にして繩を絢ひ、女、鷄鳴にして起きて織りにき。

師在らず、先生在さず、きのふ巖間の姫百合の、けふ溪川の溢れに擔ひ去られし如。

師と先生と、此村に在さずなりて、廢滅の雲、彈丸の如く村の額に墜ち、希望の光幽冥にかき消え了んぬ。

あゝ先生と師と在さず、村は回復すべからぬ損害を蒙りぬ、回復すべからず、力救すべからずに、墜落の梯子を、次第々々に、地獄の底にまで傳ひ行く。

あゝ師や先生や、倏として逝き給ひしことの、何ぞ夫れしかく遄かなりし。小さき翼に「無限」を帶びて、羽影微かに、いま雲に入りし小鳥の如、

× × × × ×

さはれまた想ふ、村の衰滅と頽廢とは、少くとも「命」なり、また「時」なり、已に命なり、時なるべくは、羿が矢を射る雪消水の、

木の葉の柵そを偃き止むべくもあらず、二人の君たとひ在ぞかるとも、ことごと崩れたる此の村の態、たとへうたてしとも、何とかすらむ。いな日に荒び行くその態こそ、中々に二人の君が、苦しみと悶へとを添ふる媒ならざるべしや。すなはち天に慈しみあり、これらの憂目に遠ざからしむべく、はやく卿等が靈を、招び還したるにあらざるなきを知らむや。

さらずは山櫻の、人知らず散り行く如、むざむざと此村を衰滅せんには、餘りに惜しきを憐れめるより、燈し火の消えなんとする、先づ一とたび、其光りを亮らかにすべく、村の最後を華やかにすべく、天が卿等二人を下せるものにあらざりしか。

あゝ一生を人道の犧牲として、聖壇つねに崇く、倦まず撓まず、道を説き、德を奬むるに怠慢ならざりし卿等、卿等が敬虔なる生涯は、生涯を通じて、それ自ら「詩」なりしかな、崇高なる詩なりし

哉。さてその「人」たる一生の頁は、いままたく滿足に閉されて、今し墓石の間に冷え去りぬ。こゝの村人、はた都より歸省の青年が、年毎、日ごと、其墳の前に叩首きて、懷舊の涙、玉よりも清かりし。それもしばしはあれ、世は轉じ、時は變り、兒は壯に、老は逝きぬ。里人塵の如く散らぼい離りて、明媚の江山、空しく他し村人の領に附せんずるときや、卿等が名長へに忘られて、卿等が墳あつく苔の衣に掩はれなんか。さもあらばあれ、これ卿等にあつて、何の恨む所ぞ。朽葉が丘の櫻樹は、摧かれて薪ともなるべし、丘を繞る川の水瀨、あせて丘ともなりぬべし。しかも悠々たる卿等が魂や、父や夫や妻や、一家團欒、白雲の上、ありしながらのありさまに、飄として故鄉の山川を翺翔す。現世に無情なりしその不幸は、いま天上餘りに多く償はれぬ。さらば卿等、長へに長へに、心安らけく無窮に眠りて在せ。

× × × × ×

疎らなる短き髯、一文字に引き緊りたる口元、皙き面、漆黑の髮、そのやさしき眼ざしは、穩やかに沈みて、決して急言し、激語したまはざりし先生の俤よ。

一閃して、たゞちに人の心射洞くべき瞳子。言言肺腑と信仰より出でゝ、すべての人をして、自らに頭垂れしむべき胴聲の說經。清きは紅き白き花蓮のさまや、薰り高く咲き滿ちたる小池を前に扣へて、法の文、やまず繙き給ひつる、手跡よきに名高かりし、寺の師の君よ。

『おん身が父上は發く逝き給へり、卿が逝ける兄上は、再び鄉に歸らぬべく、吾妻へ啓行の前の夕、我れを訪ひ、卿が行末をわれに囑すること、極めて慇懃なるものありき。われはいづくまでも、卿の將來を眷み顧ざるべからずして、しかも卿、いまはやく鄉を辭はむ

とす、好矣、男子到る處青山なからめや、いざさらば行け、たゞ行け、行き行きて、斃れ臥すとも萩の原、行きて勉めよ、彊めて熄むなく、身を立て家を興してはやく歸り來よ、金鞍玉馬、卿が歸り來らん日や、われはや頽然としていたく老いてあらんか、さはれ指を折り僂ひて、日におん身がある方を待ち望まんものを』。

郷を出るの前の日、われ永訣を告ぐべく、先生の許を訪ふ、先生のわれを延いて、訓へ給ふところ、げに娓々として斯の如きものなりき。

われたゞ唯々、思ふ、「若し此の行にして、笈を負ふて郷關を出で、學もし成らずんば、死して歸らざるの、榮ある旅ならましかば」と。尋いで思ひぬ、「白雲の行衛なく、白雪の跡さへ定めなき旅の空、君が海嶽の恩酬ゐまつらむ時やいつ」と、涙潸然たり、伏して長江に似たるありしのみ。君の靈いま天に在す、十有三年の昔、なほ今日の

如き思ひあるものを！。

あゝ心弱き予れなりや、卿が未だいまぞかりし折、敎への鞭擧げて指し示されし、「正しき逕」の辿りこそ、己れ今日までも昨日迄も、危ふき乍ら蹈み迷はね。嶮しき巖、峻しき嶂、わが脚いくたびか「浮世の旅」に行き惱んでは、我心消え惑ひ、我眼暗く、流石に堅かる不退轉の猛氣も、やゝに碎け行かんとするぞ哀れなる。あはれ日は暮れて途は遙けし、水は逆まに流れて、楊柳飜々東西を知らず、卿と誓ひし金鞍玉馬、誘り得んはそも何の時ぞ。聲は老いたる秋にすがれて、叢の殘蛩、夜の小雨に啼く夕や、われ燈前昔を懷ひ、來らん末を想ひて、しぬにしほるゝ玉の緒の、今にも絶え行かなむ心地ぞすなる。

あゝ悠然たり、靈天上に息らひ給ふ、かつてのわが師の君よ、卿いませし時魯かなりし、卿が魯なる敎へ子は、卿世を逝り玉ひて、

愚ますます愚かなり、あゝ情け厚かりし師の君よ、なぞ哀れなる此の子を憐れみ給はずや。

× × × ×

遙けき彼方荊棘丈け高く生ひ茂れる所、
かつては一つの標牌ありて過客の見得を捉へにき。
鳶色の麥酒痛飲されけん居酒屋今低く横りて見らるれど、灰色の髯したる快活なる漢子、
面つねに微笑を帶べる勞働者の、いま見らるべくもあらぬ也。
嘗てそこに、村の政治家あり、物識げなる貌もて滔々と物語り、
其飲める麥酒より古き新聞は、旋れる人みなによりて話し廻さるゝなりき。
此美はしく壯麗なる客堂の今空しく廢てられたる見て、たれ

かありし盛なる昔想ひ見るを好まざらむ。
白堊なる壁、麗はしく細かき砂敷かれたる床、
ワニスもて塗られたる時計は戸の背後に時を刻み、
夜には寢床となり、畫引出具ひたる簞笥たるべく、
其箱は二重の用を自然に爲すものとこそいふべかりし。
實用と裝飾とを兼ねて、
繪畫、十二善行の規則、鵞鳥と狐の賭事など、貼られぬ。
三冬氣冷やかなる折ならざれば、
華やかなる火爐アペインの枝と、くさぐさの花と、ヘンヲル
ともて裝はれつ。
輝きて上に列み居る破碎したる茶杯は、
外見を衒はんには、まことに恰好はしき東西なるべかりし。
たゞ夢一ときの華奢なる驕りよ、

まさに倒れんとして踉蹌たるこの大厦を、
爾ぢその頽廢より救ひ緩むること能はざりしか。
そはつひに湮滅の中に沈淪し去んぬ。
さはれ貧者まだそが爲に何の一片の意を介するところぞ。
彼方にもまた、貧者は、一日の麵包の料に追はれて、其他を
思懷ふべき遑なければなり。
はや農夫の新聞なく、理髮師の物語もなし、
獵夫と杣人との俚謠いま耳より消え去り、
村の鍛冶の、其黎黑なる額を清め、其重げなる體軀を前に傾
けて、物語り聞かんと焦燥れるそれもあらざるべし。
泡立ちたる麥酒の、配たれて平かなるや偏せざるや、苦ろに
見廻りし、酒店の主人はや見られざるべし。
顧客に盃を強ひられて、半ば迷惑氣に、半ば喜びけん、かく

て殘杯を他に送るべく、接吻したりけん、羞らひし給待女の
今はや見られざるべし。

（西詩）

三　學び舍——友垣

一すぢの鐵鎖、無窮の谿より無窮の谿に、永劫の雲より永劫の雲に、たゞ蜿々として懸け亘されたり。もし夫れこゝに人あり、この橋の中らひに立ちて顧みする時や、わが過し方は、狹霧深く立ち埋められ、白雲迷ふ行く末、また覺束なしや。輪みな名を刻みて「人生」といふ。

物あり、蟻の樣に群れ聚ひつ、鎖を攀ぢ鎖を傳ひ、一つの端より他の端に、われ先に亘らんと犇めく態の、いかばかり哀れに凄まじくもあるぞ。つくづくと見てあれば、あるは宛らなる凍蠅の、たゞ其のまゝに縮み行くもの、はた力足らずてや、磯々と壑底に轉ひ墜

ちて、巖角に其身を碎くもの、或は咽び、或は號び、あるは嗚呼として泣き、あるは冲々として訴ふ。其聲一に何ぞ悲しき、すべてこれ苦悶の噫氣なれば也。

あゝ傷むべき人生よ、好矣、人生は傷むべしともあれ、人生れて呱々たるの始め、天帝已に赤熱の鑄型もて、まだき柔かき背の肉に、印深く「運命」の二字を鑄れり。あゝ此の文字、よしや泣けばとて悶燥けばとて、つひに銷ち得べき物の類かは。已に解く可らず、銷つ可らず、兎ても角ても逃れぬ身の、さらば人人よ、暫く爾ぢが喘ぎを緩べ、爾が歩みを止めて、いとしばしなりとも、現し身の苦みを逃るべく、せめては汝等が、刹那の慰藉と救苦とを索めずや。

こゝに「忘憂」の天の眞清水あり、「回顧」と「思ひ出」の甘美水、溢るゝばかりそこに湛ふ。いざさらば、われ東道の主人として、まづ卿等が爲に、その甘露の一抔を毒味せんかな。

夫れ思ひ出の樂しみは、「幼き折」に過ぐるはなく、「幼き折」の樂しきは、學び舍の生活に勝るものあらじ。おのれこの泉の水を味ひて、今し陶然として微醉ひたり、かくてわがありし昔の、わが學び舍の生活を說く、人恐らくは尤めじな、醉ひる人の無禮を容すは、おほ方人の常なれば也。

旅人よ。卿が一夜の草枕を許すべく、一軒の旅宿さへもなき、このさゝやかなる寒村を、傾く暑とゝもに、東より西に轉り來つ、こゝ河堤に立てる旅人よ。波色黑ずみ行く大河の汀に、やゝに迫るたそかれの呟きを聞き、前途程遠くして脚は疲れぬ、思はずも愁然として、笠越し西の方ふり仰ぐときや。おん身見ることなきか、木立こんもりと茂る一むらの小丘、上に木造の質素なる一つの樓あることを。殘んの暉、死人の引くらん息にも似て、斜めにその白堊を射、餘光さらに微けく、力なく玻璃窓に流るゝを。

さらばわれ卿に告げん、これぞ少やかなりとも、これわが鄕の學びの舍ぞと。

鄕黌！、わが鼓膜、この一語を捉ふる時、いかに新なる生命を帶び、いかに凄まじき活火の燃ゆ來りて、わが記憶の竈に焚やさるゝを覺ゆるぞや。

さはれ空に奏せらるゝ天樂の、いかに靈妙なるかを說く前に、人はまづそを奏づる仙姬の、いかに端嚴微妙なるかを語るべき約束あり。吾人にもまた、その活火の焚さるゝを說く前に、まづ其竈を造り、薪を拾ひし人を述ぶべき理由なからずや。

知らず何の時代、名なくして埋もれたる伊能忠敬が、まづ此校の建築を、始めて設計はしたりけむ。渠れ先づ其舊式なる、巨大なるコンパスを把て、蕞爾たるわが小村を、容無き一圈の內に籠め、更に其起點のあるところ、一坐の小丘を起し、小丘の上、更に一宇の

層樓を建てたり。これやこれ、原始の、而して現在のわが小學校なりけらし。さるからに、地は高燥なれば、空氣つねに乾き、つねに清く、若し人、空晴れたる日、その樓に上らんか、見る眼遙けきかな、其眺めや。清瀨の川波、遠く碧玉を展べて、往さ來るさの白帆影、明ら樣に數ひ得べく。遠くは伊更子、久良岐、須磨の村々、斜めに西に折れて、耕し人の鍬の刄、ちら〳〵と日光に閃めくなど。いかで我が村の、かく美はしき幸福享けたるを思ふては、誰れか氣の自ら王なるを辭み得べしや。近くは村界まで、一すぢの坦途髮より直く、その極まる所、そこに一すぢの小流れあり。底いと淺うして水涸れ涸れに。さゞれ波、其根にさゝめく石の上には、鶺鴒しきりに飛翔りて、紺青色の尾羽、幽かにしば叩く。汀に野茨生ふ、五月の風吹いて、夢の色に紅の花を裝ひ、一つの土橋、宛らの繪のやうに懸りて、今しそを超ゆる、うら若き旅人あり。平和なるこの眺

めをすて難ての風情に、いくそたびか、立ちもとろふるも見ゆ「花茨故郷の道に似たるかな」、かの若者いま懷ひ重く、百里の彼方に領巾振りて侍つ、愛ぐく美しき若妻を懷ふなるべし。

境や高し、さながらの城廓にて、前と後に二つの坂あり。人よ見ざりしや、聞かざりしや。朝新潮の湧くらん響あり、夕蜂の窠の破れたる喧ぎあり、棱に昇り降る幾百の健兒の群を。口と頰とのわいためなく、墨斑々たる縱痕横痕には、けふ習字の日課ありしを知るべく。しかも爛々と輝ける眸の中、悲みと愁ひの曇りなくて、延びやかなる其額は、人生辛酸の爲に皺まず、あゝ羨ましかりしかな幼き時よ。

今こそあれ、われも昔は男山、幻現、たのしき夢に榮ゆきたりし、その童が一人たりしこともありけるものを。

僂ふればはや十有幾年の昔、そは若草萠ゆる春の一日なりき、今

は亡き母上に手を曳きて頂き、一升入の酒樽片手に提げて、村校の長がり、音訪ひたりしは。

入校の折の一升樽は、固き束修としての、校の無文の法律なりければ也。

面に痘痕滿ちたる小男の、肉瘠せ寒ばひ頰落ちて、齋僧といふにも似たらんかし。折々白眼勝に人を見上る、瞳子に異樣の光さへあるに、鵠のそれなる皺嗄れ聲まで、世にも恐ろしき人かなと考へ乍ら、われの恐る恐るそが前に跪きしは、それよわが六とせ老ひたる、その春の更衣月の頃なりしか、

かつて西の國の歌人が、人生を『航海』に寄せたる歌を聞けり。

吾等は彩色麗はしき浮標後に殘し
浮標は入江の口に震ひ搖きつゝあり、

われ等が速かに、南差して帆走る時や、
われ等が胸ひた菅怡樂に滿ちて、ほとほと狂ふべく躍るなり。
渺茫たる蒼海に、逶迤たる長汀曲浦に、
見るとし見、聞くとし聞く、何れの景色か美はしからざりける、新らしからざりける、鮮かならざりける。
われ等は識りぬ、樂しきこの地球は形圓やかなるを。
われ等は知りぬ、われ等永久に帆走り得べきことを。

微風温かく船の額に當つて裂け
さらに帆綱を淋しく鳴らせば、帆もまた答へて叫ぶなり。
船首なるレデースヘッド、澎湃たる潮水を障へ、邀へ來る烈風を裂きてぞ進む。
渺茫たる海波龍骨に逆つて高まり、また沈むなる。

かくしてわが迅快なる星槎、かくも遥かに輕く駛る時や、
われ等は感ず、わが船震ひ動き、わが船逶迤するを。
われ等また感ず、われ等が太陽の方に帆走りつゝあるを。

夜の闘に燃ゆ、燃ゆる浪路の底に沈み、
黄金の柱に似たる、殘照の下に眠り行くなる
入り日の影を、われらいかに屢眺めしよ。
天地萬有の、安らけき熱眠猶覺めざるに、
われ等再び、黎明の方に進むべく、
曙色の紫緣取れる衣、
下界徐かに垂れたりしを、われらいかに屢眺めたりしか。

新星あり、水天の際に顯はれて、終夜を我等の前に輝きぬ。

船脚走ること遥かにて、水平線瞬くごとに地を變ふれば、
星影現はるゝこと、また極めて迅かなり。
目にも遮るものもなき、青海原の末遠く、波たゞ躍る波間押
し分けて、輝き登る月影の汐路夐かに冴けしや。
月讀男脚早し、輝いて走り、走りて輝く、
思ふ、月の暈を朧ろ氣に曇れる一面の楯となさば、
月それは、其楯を裝ふなる銀の飾鈕子なるかも。

嶕嶢たる島々一つ一つに容變り、
小丘の上の小高き市街暗澹として眺めらる
われ等ノーザン岬の長き途より、
露深く綠なせるノーザンの牧場を過ぎぬ。
われ等今潮流暖かき海に入りて、

限りも波間の西の方へ、われ等が舵はるかに進めつゝあり。
荒びおらぶ沖津波、肉豆蔻生ふる巖に碎け、苜蓿茂る離れ小島の岸を洗ふ。

そこゝに焔を噴く高嶺より降り來て、
灰の雨、低き洲濱と、漣漪立てる海の面を暗くし、
廣ごりては世にも奇しき羽毛の形、さては皺紋黑き古松の立てる樣をなしぬ。
砂地、濕地、沼澤、さては百川の深流を容るゝ河口に沿ふて、
われ等速かに船を走らしぬ、
そこに小丘あり、眞紅の一片萬綠に混はりたる叢林あり、
われ等過るとき、瞬くの間輝きぬ。

あゝ久しかりしかな、樂しかりしかな、懷かしかりしかな、夢裏ひたすらに過ぎにけん、鬢に八とせの春よ秋よ。さてはエメラルドなす朝凪の海の、なだらかなる玉ゆらに心安堵ゐつ、浮世の嵐、浮世の浪、つひに思ひ知らぬ一葉舟の、船路の行衛さて覺束な。

* * * * *

想ふわが村校、咿唔の聲玻璃窓を洩る眞晝や、天地始めて創造されし曙、上帝の德を頌美したりけん、天の萬軍の雄叫びの、その勇ましきにも似つかはしからずや。

あゝその讃美の唱歌者たる、玻璃窓の中の羽なき天使よ。色黑うして骨頑丈なる、幾多の小英雄よ、小愛國者よ。想ひ起せばそれかこれか、數ふるにも堪えぬ未來の闊龍、未來の那翁。それもみな、弱き翼を雲の跡に任せて、暖かき塒より巣立ちたる今は、知らず侶を尋ねていづべの空にか飛び迷ふらん、甘蔗實る熱泉の汀か、白熊

叫ぶ極地の野末か。

＊　＊　＊　＊

わが母上は、其性いと雄々しく峻しく、はた矢の樣に正しく在しき。されば己を敎へ導き給ふ、常にいと嚴かに、塵ばかりの「僞り」とも、そを假すことを肯てし給はず、手以て言に續ぐも、あへて珍らかならざりければ、いまだ穉なかりし己れの、只管にその嚴しきのみを見て、御胸の底深く埋もれたる、「慈」の泉掬まんよしをなみ、いくそたびか君を怨み參らせしことの、今にして思ふそゞろ空恐ろしさに得堪えじよ。

母上の嚴しきは、獨り己れに對してのみならず、また外に對して、一歩を讓り給ふことを愧ぢ給へりき。されば われ等が母上を畏るゝ如く、戸外の人も、亦ひとしくわが母上を畏れ憚りぬ、かくして母上への畏敬を透して、同時にわれ等は、割り合ひに慇懃なる待遇をわ

が村人より受取れるなりき。

獨りわれは、畏敬を村人より受け取りたるのみならず、等しくまた、其の眞心の好意を受け取れるなりき。村人の眼より觀到せるわれは、村のわが學友、および村の小兒等より、全然として相違せるものなりき。實にや極めて嚴格なる、はた割合に狹隘なる、わが家庭の敎育は、村の兒童等が、野の若駒の如く放縱なる、自由なる境界より獲たるそれに比して、當然に相異るべきもの存しき。村人の常食は麥飯にして、わが家は米の飯なりし如く、見聞に於て、擧動に於て、而して言語に於て、また軌を別にするものあるを免れざりき。わが母は東都の產なり、われの都音を享けて母を「阿母さん」と云ひ、敎師を「先生」と呼ぶや、「お母」「先生樣」と、土音の音調奇しく發音する村人より、常に嘲笑せらるゝを辭み得ざりき、遮莫誰か烏の雌雄を知らむや、想ふ渠れ等、自らが口裡に繰返して、いづれの音

か重濁、いづれの言か輕快なるぞと悟るとき、自ら愧ぢて、唇を緘ぢざるを得ざりしならむ。

わが嗜好は讀書にありき、歷史譚にありき、稗史小說にありき、凡そこれ等のものは、みな母上の嗜好を通じて、家庭の搖籃に養はれたるもの、從つて我れの、校にあつての多少の特長は、――もし云ふべくは、讀書なりき、作文なりき、歷史なりき、地理なりき。

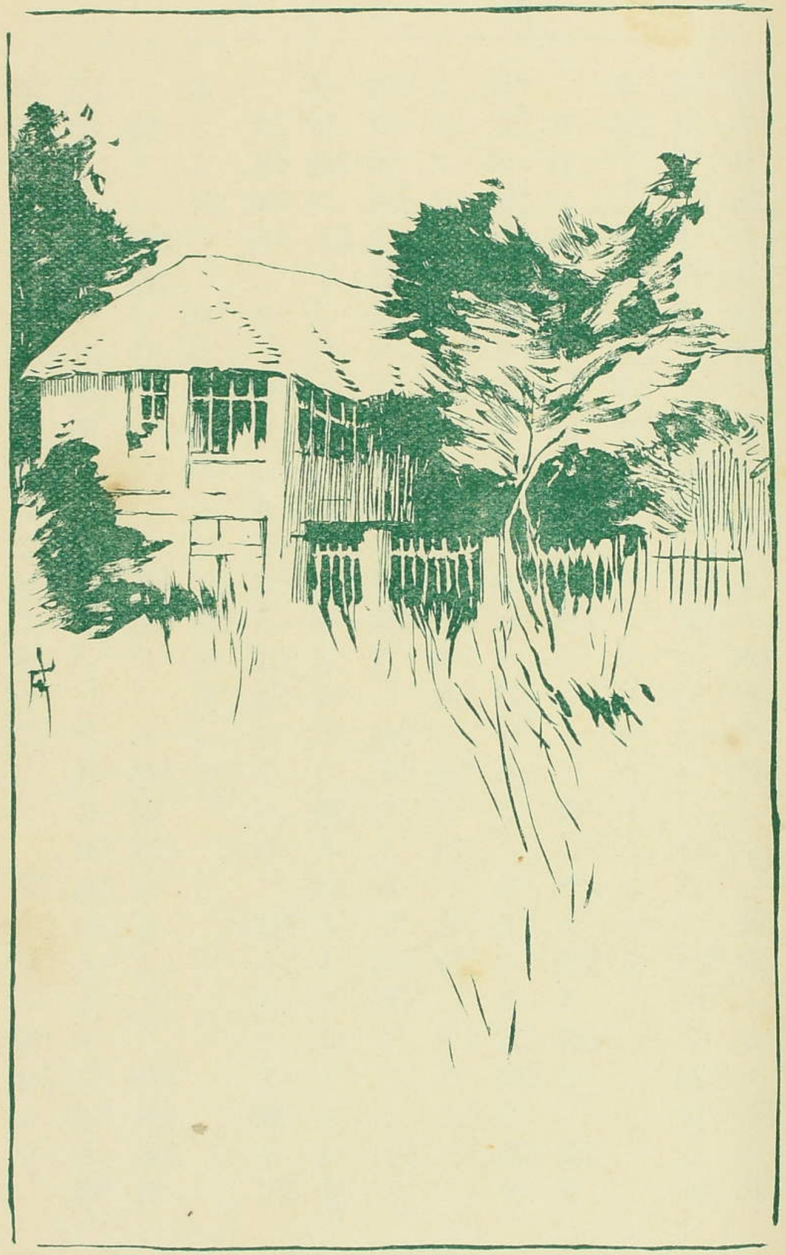
官と民との差別、いと嚴かなりしこゝらの例の、これもその一つなる、過去の滑稽劇なりしか。ある日のことなり、縣の長、郡の長、いくそばくの下役を卒て、髯面いかめしく、黑塗車の轍を列ねて、とどろ〳〵校の門に乘り入れたることあり、校の長、村の長、重立ちたる富豪、紳士、みな恭く膝行頓首、之を奉迎して慇懃を極めたるは、これぞ正しくこれ、その頃の村の歷史に、特筆大書すべき出來事なんめりと覺えし。さるからに渠れ等、はや名殘りなく、凡て

の教場を巡視し了へぬ。偖て廣き講堂の裏、列位星の如き面前に、恐る恐る呼び出されたるは己れなり、卓上安置されたるは、『皇朝史畧』の一部！、校の長、まづ其一葉を飜へして、讀むべくわれに命じつ、凝と己れを見詰めたる瞳子の、以心傳心、言はざるに語りて、ものあり、鉛の如く入りて、我が胸壓せらるゝを禁じ得ざりき。さはれこゝ一世の大事、學校の名譽、安危存亡、この一擧に懸ると云ふも大業なれど、わが胸とかくに騷ぎて、さながらの急鐘を擊ち、肌は慄ひて、風鈴の暴風に鳴るにも似たらんかし。とかうに心押し靜めて、からく讀み了へつるは、折柄の書中の事、入鹿が前に表文棒げ讀みけむ、倉山田石川麿の當日、かくもありけむかなと、後の日思ひ出でては、獨り笑壺に入りたりしよ。夫にも增して忘れ得せぬは、わが讀み了へしその刹那に、列席の官人の一人が、目鼻もわかぬ髯の中より、發せし一言の賛辭なりき。この時よ、棧の長が胸、

はしなく電氣の樣に顫ひ動きけむ、隱し得せぬ滿足の紅潮、南面の王たらんより嬉しかりし樣に、颯と眞白き面に漲りたりし。

それもみな、罪なき幼なかりし昔よ。車の轟き、まづ耳より消えて、罪なかりし羞耻、今それもあらず、たゞ朧ろげに想ひに活くるは、滿足溢れたる其の折の、先師が御面影あるのみ！。

わが著るき短所は、算術にありき、習字にありき、圖畫にありき。算術のわが得點は、辛うじて及第點に達するのみ、圖畫と習字との得點は、符を合したる樣に、「丙」或ひは「丁」なりき。かつて簟笥の寫生を爲したることあり、消護謨のあらむ限り摩り消したれば、紙膚薄きこと雁皮紙のやうになれるを、例の事とて意にも措かず、そのまゝに提出したりけるが、居あはせたるは、例の皮肉なる一敎師なり、＝露西亞人流の隆き鼻先、鷲の嘴の樣に折れ曲れる。＝會釋もあらばこそ、忽ちに朱を下して曰ひけるは、「この簟笥、少なくとも



百年以前のものか、脆弱ほと〳〵木質を失して、到底もの〻用に立ちさうにも見えず！」滿場の嘲笑、ひとへにわれに向つて破裂した る時！、想へ、我慚愧そも〳〵いかばかりなりしかを。

さはれまた想へ、『記事論說文例』より、其の皮と骨と奪ひ、胎を母上の敎へに得つ、「早乙女は紅ゐの襷掛けて」と云ふを近來の名句としたる、半紙約三枚に亘れる「挿秧の記」が、評點、甲の上々！、當日試場の高第とて、衆生の面前に、敎師によりて朗讀されし時の、わが頰に上りしプラウドの光、そはいかに輝きたるものなりしかを。

凡上瞑目して、靜かに過ぎ來し方思ひやれば、迢々として岫を出るしら雲の、あはれ極みもなき思ひ出かな。

在りし我校の暑中休暇に、「朝習ひ」と呼ばれたるあり。昧爽校に登りて、朝すゞを學課の復習に費し、やがて日高からざるに皈る事例なりしが、われいかで友どちに後れじとの、儚なき小兒心より、

ひたすらに取り急ぎ、二時三時が程に行きては、藪蚊に手足を食はれ乍ら、數時を學校に寢くらしたる頃もありし。想ふ、未明に置き添ふていと繁き、道の邊の露そぼちて門を立ち出づれば、殘月依稀たり、光を下界に横ふる山の端より、紫の横雲、ほの〴〵とやうやうに離れ行くところや、颯爽たる曉の氣身を冐しては、はやも新秋かと疑はれ、ほのかに黑き栗の樹の梢より、亂鴉啞々として亂れ立ちては、風の面を嬲る心地よさ、古なほいまの懷ひあるを。

郡の小學校、其數併せて十有四、その合併の運動會が、我が村に執り行はれし朝あり。さて其場の光景こそ、またなき世の觀物なりしかな。常には和服にカラーを着けて、文明風と悟りし校の長、今日は取ッときのモーニング、折目の跡もケバケバしく。堅縞のズボン脛短かに穿ち爲して、手に鞭あり、脚に草鞋あり。校の小使の老爺、生年積つて六十二歳、鬚髮皤うして赭顏火の如きが、こゝ一生の晴

れの大事と、恭しく旌竿を棒げ持つこと、寶玉なんどを擎ぐる如、鞠躬如として眞先に立てば、紅白だんだらの唐縮の大旗は、小雨そぼふる青山嵐に、翩翻として翻へる也。すはや一行四百幾十人、額を約するは白金巾、二尺の鉢卷結んで後に垂れ、田舍道の泥濘を揑ね返して、てんやわんやの腕白連、喧々擾々として押し出したるは、村人の視聽を聳だたしめて、いかに奇しき快興なりしぞや。

一日釁の晝休みなりき、友ごちと共に、例の清瀨川にとい行きつ、泳ぎ酣なるとき、突然として始業の報に接しぬ、みな〳〵大に慌てて陸に上るに、あな、人みなの着衣は、凡て彼方に漕ぎ行く船中に置き忘れぬ。されども時は夏なり、水は涸れたり、とり來られぬことのあるべしやと、われは奮躍一番、携へて河中を歸るさ、小石に跌きて其まゝに沒入しければ、着衣、悉く濡れ浸りぬ、慘瀝たるを着て、其まゝに登校したるも可笑しかりし。

もと尋常校なりしわが校の、尋常科の上に溫習科あれど、そは素より尋常科の附屬にして、教授も自然不廻り勝ちなりき。さはれ校にすべての慣例として、上級生なるわれ等が、暴威と權力を下級生に振ふは、勿論なるべき不言律の、殆んど怪み要せざるものなりし。

我が一級は、凡て十有六人より組織せられ、教授の任は、凡て校の長岸田氏が管轄の下に在りき。われは級中の最年少者として、一席より四席の間は、石田生、金山生、水谷生とわれとが、試驗毎の爭奪の餌食として、兼てあだし人に許されざる獨占場なりき。

石田生は農家の子、肥えたる肉と、屈竟なる體格と恐ろしき膂力を有せる渠れは、自然にして恰好なる、一箇の小農夫を形作りにき。若夫れその輪廓圓き顏と罪なき微笑に、及び其遲鈍にして活氣なき動作に、よし平和にして朴訥なる、其の性格は認め得るとも、誰れか渠れが、推理考察の力に饒かなるを曉知し得んや。即ち曉り知ら

ずと雖、かれは實に級中に於ての算數家なりき、思慮周匝、ガリレオ第二世なりき。

金山生が流暢なる辯舌、及び敏捷なる交際術と、總明快利なる穎才と、白皙にして眉目明かなる、父母より享け得たる風采容貌とは、實に級中の呼び物なりき。しかも自ら構ふる尊大に、やゝもすれば人を蔑視したること。かつ癖癖强くして、愛憎の念極めて烈しかりしとは、寧ろ多くの場合に於て、人の愛を惹くこと能はずして、忌憚と嫌厭とを惹くこと多かりき。かれはまことに、爆裂彈性を帶べる大鹽平八郎の風あり。或は恐らくは、「われ寧ろ人に背くも、人をしてわれに背かざらしめん」と颺言せる、あるものゝ片影を捉へたりき。かれが特長は、習字と圖畫とにありし。

何等の場合にも、よく圖りてよく處し、常識に富みて、判斷と理性に饒かなりしこと、恐らく水谷生に過ぎたるあらじ。まことや今

日の世に立ちて、最も圭角なく最も圓滿に、最も平和に發達すべき希望ありしもの、われ等四人の中、たゞ渠れありしのみ。渠が常識の充分に發達したる如く、學術に於て凡てに成績よく、凡てに缺點なく、凡てに通達せりき、渠れが品格は溫和なり、かれが天資は勤勉なり、いさゝか其誇衒的なるを厭ふの外、世に何人にも愛せらるべき、圓滿なる人格の模型は實に渠れに備はれりき、渠れ官にあらば循吏たるべし、野にあらば好處世家たるべし。

こゝに水谷生の人格を徵す可き一事あり、そは瀛車が、わが村に設けられたる始めなりき。瀛車見物てふ發議は、當日出席の級中の生徒、十有四名によりて提出されぬ、直ちに總起立を以て可決されぬ。善は急げ(?)ぞ、直ちに今日の授業を廢して、われ等は直ちに出發すべく、潛かに校門をぬけ出さんずる、世にも大膽なる企は唱へられぬ。順從なる某々一二生は、いさゝか踟躕して見えたりしも、

後日に一致の非難を恐て、やむなく賛成を表したり。されど曩より口を緘して、獨り一句なかりしは水谷生也。此時顏色自若、斷乎としていふ、『われは諸君に從ふことを欲せず、しかも獨自にして止まらんは、いさゝか從順を衒ふに以て、諸兄に忠なる所以ならねば、僕これより家に在りて、以て卿等の歸るを俟つべし』と。事に處してよく斷ずる、屹として大人の風あり、級中の長者、渠が平生、概ね斯の如かりき。

かくて汽車見物屆てふ、古今に類なき屆書の一通は、後級生の手に托せられぬ。われ等は、前後の思慮もなく、隼の如く校門を出で去りぬ。かくて數時の後、平氣に歸來せしわれ等は、校の長なる人によりて、いかに電雷の如く叱咤されしぞ。退校のみは辛うじて赦されたれど、責罰として、戒飭減點の五點づつと、一週を通じて、放校後の一時間を、直立すべく課せられつ。しかも水谷生が、何等

の罰なきは勿論にして、衆生また一人の、爲に嫉妬の眦を反すものなかりし。以て其鷹揚の態度が、いかに一級を支配せしかを見るべかりし也。

石田生、南畝に耘り、金山生、法に入り、水谷生、兒童教養の職に其心を潜めぬ、各々其ところを知りしものか。馬琴翁いふ、「こはこれ後の話なり」と、われまた云ふ、こはこれ後の話なりと。

凡そこの三人が、世に處する能ある、概ね斯の如し。わが如きに至りては、殆ど無意味、殆ど不得要領、つひに云ふべきものあるなきなり。しかも僅かに云ふべくは、われの頗る感情的にして、何事も受動的に、意志極めて薄弱なること即ちこれ。而してこれ頓て、他の三人に之れ無くして、われ獨りこれを保つものなりき。われは抵抗するよりも、寧ろ多く服從せり、條約なく主義なく服從せり、故に人の嫌惡を招ぐこと、極めて稀なりしとするも、猶これを水谷

生の、畏敬を以て愛せらるゝに比すれば、極めて品下りたる者なりしを自白せざるを得ず。しかもわが萬づ感情にのみ偏して、やゝもすれば婦人の仁に落ちたる、＝害物の他は、出來得る丈け、生物を殺すを避けたるなど、＝みな母上が、「嚴」の袍脱かれし内の質の、涙胞く在せしより來らずばあらず。

われ極めて稀に人と鬪ひき、また爭ひき、力足らずして壓服されんか、たゞ潜然として、木立の片蔭に泣くを常としき。然も潜然たり、いかにもして、之に報讐せんとの執念は、決してこの中に含まれざりき。たゞ負けたるを口惜み思ふ、一時の情の發作に泣きたるのみ。されば數時間を經たるわが面には、曩の怨みと涕涙の影を慝して、また見る可らざるものなりき。

かくして我稗史小説を嗜好するの慾は、食ふに從つて、ますゝ其飽くを覺えざりき。よしや夫によりて、わが「悲觀的の觀念」養

はれ、「自然」に憧憬するの傾向をば加へたりとするも、わがそれ等を通じて、朧ろ氣ながら、人世の輪廓を學び得たるは、これ爭ふ可らざる事實なりし也、はたこれ等の智識に於て、一部稗史を手にせざる渠等に比して、一日の長あり、蘊醸ありしことは、これまた確かなる事實なりしか、――遮莫恐らくは、渠等が稗史の一葉を飜へさゞりしことは、寧ろかれ等の幸福なりしなるべし。

何となれば、かくして蘊醸されたる我智識は、境遇の轗軻により て一層の重荷を加へつ、われを牽て、枯れ蘆よりも心弱き、感情の犧牲となし果てたれば。――かくしてわが、それ等より抽き出せる一つの利益、――もし利益といふべくは――そは單に、いさゝかなる讀書の嗜好と、覺束なくも文の美味ふべき、云ふに足らざるの能力となりしのみ！。

其他狡猾にして殘酷、われを苦めける武田生。無邪氣にして呑氣

なる星野生。無謀にして亂暴なる石川生。意地わろくして負惜みなる米山生。馬鹿力もて鳴りし佐藤生。居睡りの熟練者なりし木山生。呑込み早くして、記憶力乏しかりし熊屋生。女の如く羞らひし永田生。敏捷栗鼠に似たる廣澤生。阿呆多羅經が唯一の特長なりし大江生。途方もなく奇妙なる叫聲を放つて、教室を賑はせし犬塚生。諸教師の仇名と肖貌に巧みなりし、級中の曾品利たる川上生。渾然相合して、わが一級は作られたるものなりき。

＊　＊　＊　＊

金山生の家は、門地に於て甚だ高きものにあらざりしも、資産頗る饒かなるを以て聞えにき。世々酒造を以て業としたるか、殊に渠が祖父なる人の、勤勉勵精なる收穫が、與りて最も力ありしと傳へらる。しかも安易を以て享けたりし、勤勉の結果なる財産は、かれが乃父、――かれが祖父の不肖なる子に對して、甚だ有益なるもの に

非りき。乳母日傘の間に育てられて、温順にして寛大なれども、他に識なく、才の助けなく、寧ろ凡凡の人たりし渠が父は、其處世の迷路に立つも、また箇の失敗兒たるを免かれざりき。渠はいつしかに、資産の多くを蕩盡しつ、美なる其妻、――生が母は、その夫を抑制し、諫止し、奮興せしむべく、餘りに堅剛の氣を缺きたりき。蜘蛛の巣、破れたる壁を縱横に綴りて、板剝がれ、廂朽ち、鼠矢床に堆かりし古き倉は、大小の酒槽をもて滿ちたりき、しかもそはみな空なりき。われ等の鬼ごつこするいつもいつも、いくたび其槽中を、賴朝が朽木の窟となしけん。此時の渠が父は、はやく其世襲の業をば、永遠に見捨てたりしなり。

かれが父は、亡き兄上の莫逆の友なりき。われはいくたびか金山生を訪ひぬ、家の構ひ、庭のしつらひ、昔の俤も思ひ偲ばれて、そぞろ泪ぐまるゝものもありしが。渠が家に、『眞田三代記』の寫本と

『武勇百人一首』とを藏しき、われそを借るべく、いく度かかれを訪ひぬ。さはれ本能的に、矯飾を容れざる少年の氣質は、絶えず相距れる異性を反撥して、われ等兩者の中らひを、近き友情に持ち來すべく、常に、とことはに相防ぐものありき。恐くは他人の渠れに於ける、また等しきものありしならむ。

わが親しきは水谷生なりき、われ常に渠れを訪ひぬ、渠れつねにわれを音づれぬ。或は期せずして、兩者が家路の半ばなる、茶の木畑の畔に相遭ひて、共々に、學校の空庭に徜徉ふこともありき。われは多く友を訪はず、友また多くわれを訪はず、母上を畏れたればなり。われたゞ水谷生を訪ひぬ、母上が嚴なる監視は、わが交友の上にも落ちて、わが爲の友擇び、極めて精細なるものあり、たゞ其撰に當れるもの、ひとり水谷生あるのみなりければ。

今日は理髮の職人が着くるなる、上下一なる奇なる服裝の、體操

服とか名づけられて、わが村に流行し始めしその頃よ、まづ新調し出せしは、水谷生とわれとのみなり、水谷生のは廉價なる縮にて、われのは手織の、細かき辨慶縞のなり。まづもろ共に村人に誇らんとて、石さへ光る夏の日中を、靚裝せる西洋のレデーの樣、尾羽擴げたる孔雀の、小さき胸高く打そらして、一對の蝙蝠傘、御苦勞樣にも、村を洽ねく經圍れるなりき。

そもみなこれ、罪なかりし小ヴニテーの昔よ、

＊　＊　＊　＊

あゝヴニテーか、ヴニテーか、人暫く「名」をいふなかれ、「富」を唱ふるを止めよ。みなこれ等しく、目には見えて、手には捉られぬ水の月の、あはれ儚なきヴニテーの影にあらずや。あゝ足曳の尾の上の山鳥の、己が影に溺るゝ人生は苦みか。

ひたすらに影を趁ひ、幻を望み、今日や、一つの岑、明日や一つ

の丘、柳暗く、花明かなる一村、また超ね超ねて、糧罄くる所、脚力竭くる處、無名の河畔、そこやかて敷かれたる永劫の褥あり、依依たる楊柳の下、波の面は絶えず他界の名刺を描き、朝な朝なの草頭の露ならでは、名なき白骨の菩提に手向くるものとてなし。あゝ望みもなき苦しみの、この現し世に生き生きつ、限りある糧を負ひて、無期の長途に走る、われや愚かか。

水谷生、今遠く徂きぬ。また現し世の人にあらず。

あゝ卿や幸あり、未だ人世に老ひざるに、蚤く玉帝が膝下に招徠されて、風清く、氣美はしき古里の青山、長への眠り、たゞたゞ穏かなり。想ふ宵々の松の風、樂しき無明の夢を護りては、苦下の人とゝもに、塵の世の儚なき、世の人の覺めざるを哂ふことなからんや。

浮き乍ら絶えせぬものは身なりけり

うらやましきは水の泡かな

われは弱き人の子、わが世佗しき塵の身の、思ひあまりて紛糾の巷に泣く夕や、中々に羨ましかりしよ、小ヴニテーのその夢を。秋の伏屋の砧の音と、いくそたびか繰返さずはあらざる也。

＊　＊　＊　＊　＊

七とせの昔、われ故郷を省せることあり。とあるたそかれ、われ獨り人なき校の庭を徬徨ふ、入日の跡に流せる卵黄色、いまそれさへ沈み去りぬ。ふる里の三日月、茫として薄鼠色の空斜めに、夕露ひしひしと、肌に徹る冷やかさよ。いざよう清瀬の河波、はつかに白く見えて、近く灯火洩るゝは、水谷生の故宅なるべきか。杜蔭墨よりも黒く、死よりも静かなるあたり、質朴にして快恬なる白井生、いまいかにかあるらむ。その他のなにかし、くれかし、その面影の印象は、みな日よりも灼らけく、わが記臆の鏡裏に上るものから、

しかもそれ等の多くがみなこゝに非ず。功名の念火の如く燃ねて、今し他しの郷に漂らふべく、雲縱四散、殆んど痕跡を知るに由なくして、好矣、剩されて故郷に止まるものとても、亦茫々として晨の星よりも稀に、寥々として十の指に出でざるを思ひては、わが胸の慓として、自ら怒むことあるを禁じ得ざりしよ。

昔しは木下長嘯子嘗て歌ふ、

見し人の一人一人に出でて去なば
たれと眺めんふる里の月

われたゞ杳として懷ふ、あゝ當日遊を同じうせる學びの友や、吟歌の伴や、いまあらざること十に七つ八つ。かくして後も、望みある村の青年は、功名の金冠を戴くべく、都の學窓に、螢や雪の燈し火掲ぐべく、いくたりか遠く遠く、この村界を見捨つべきものぞ。しかも夫れ等のいくばくか、運命の荒磯はかなくも難破しつ、碎け

たる心、瘁れたる面輪、たゞやさしき、懐かしき故郷の懐に、誠ある慰藉得可く歸り來て、わがごと、この村界に立ちたりし朝の、刹那の悔ゐと嬉しみはいかなるべき。

それも今は昔、鍬と鎌とに手馴れし今日此頃、穏かなる田畝の夢のいほ安くては、浮ける利慾の巷に立ちきほひけん、ありし魯かさを悔ゐ怨むことなかりけんか。もし夫れ殘照はやく秀つ峰に沈みて、吹く風うら寒き夕暮れを、淋しき影のたゞひとり、わが如此校の空庭にさまよふては、樂書の跡淡く壁に殘れる、相合傘に頬赤め合ひけん、それも今花耻る乙女となりて、他し園の香りの王たるべく、標ちて實さへあるに感愴うたゝ繁く、朝開き、漕ぎ行く船の跡なき如、あるかなきかの回想の緒を、はつかなりとも捉らまく欲りする、玉ゆらのわが如き想ひなかるべきか。

腰は弓を張れる小使の老爺の、いたくも老いたるかな。はや仲よ

かりしわれを忘れてか、霞める眼、いと冷やかに、はた訝かしげにわれを見詰めて、やがて室に入りぬ。それも其筈よ、われの郷を去りてより、こゝ七年振りの歸郷なりければ。

崩れたる壁、墜ちたる瓦、こゝはこれ、わが體操場なりし處よ。かしこはこれ、蓁草履に地響きさして、身も宙に狂ひ廻り、飛び廻りたる廊下なりしよ。

わが教場と定めたりし、室を南に老櫻一株、垂たる枝の參差として、今なほ見られ得るに非ずや。風あり、影なき魔神の杖の如く、さは〳〵と梢ゆらめかして去るときや、葉末のさゝやき、そこに神秘の意味あり、髣髴として、わがありし昔、幼なき嬉戯の聲の怡しきを聆く。「人生無根蔕、飄如陌上塵、分散逐風輕、此已非常身」！。

夕闇四方に罩めぬ、夕星聰しげに空に瞬く。獨り故山の巷に故人を悲み、寂しきわが孤影を弔ひては、哀怨轉た禁じ難く、心無窮を

思ふては、あはれ人事の定まりなきに泣きつ。
われ凝然として、人なき校の空庭に立てりき。

嘻、爾ぢ、林が中の沃ひたる野良を裝ひて、地を雅びに、麗はしからしむべき、
爾ぢ遙けき尖頂よ、古く奇しき塔よ、樓よ！。
その尖頂の下、塔と樓との中、
閎博に深奥なる學びの光長へに輝きて、
たれ人か今、此校を創め立てたる、——の聖き御靈を崇へ敬はざりける。
——丘の、高く威き懸崖より、爾ぢ等が眺め負けく瞰下すときや、
そこに擴ごれる列み樹あり、芝生あり、牧場あり

そこに——の河あり、芝生の芝土、列み樹の綠影、牧場の幽けき草花が間を貫き、
銀漂ふ波の光、蜿蜒たり、杳々たり、はてなくも流れ行く。

嘻樂しき丘よ、嘻悅ばしき杜影よ、嘻草萋々く、眺め涼しき青野原よ、
みなこれ世の憂知らず、世の悲しみ知らざりし、童子たりしわが終日の遊びの庭なりしよ、
さはれ予れ今、これ等麗はしき景色見るも何とかせん。
風あり、馥郁として爾ぢの塔の頂より來る。
われたゞこの風の音を聞く時、
そは我が疲れたる魂を、ひたすらに慰むるかの如く思はれ。
その嬉しげなる、生命ある響を、其の翼の上に波立たす刹那

や、
われは束の間の歡樂の盃を啜りて、
怡樂と青春との芳ばしき薫り、われ第二の春に醉ふことを得るなる。

父、――の川波よ、
爾ぢは嘗て、骨逞しく勇氣鬱勃、敏捷にして快活なる數多の壯佼が、爾ぢが畔りなる綠野の上に、世にも樂しげに、終日を遊び暮せしを見たりき。
さらば說け、今いかなる青年か、其軟やかなる臂に汝が碧波を裂きて、われ先にと泳ぎ樂むかを、
誰れか紅雀を捕ふる、
いかなる遊び好きの童等か、或は廻る輪を趁ひ、或は飛べる

球を樂むかを。

學び子のある者は、力めて勵み、力めて學ぶ、
はた規定られし時に迫らざらんとて、
校より退ける自由なる時の間、聲を潛めて讀書すべく、渠れ此上なく樂むなり。
學び子のある膽太かる者は、いつしかに校の域を超ゑて未だ知らざるの地を探り、幽邃の景を逍遙ふなり。
さはれ其走るや、常に後方顧み勝ちに、
笹原走る一と吹き風にも、われを呼び止むる聲音かとぞ思ひ惑ひば、半ばの喜び、未だ半ばの懼れたるを得免れず。
渠等が懷ける希望は極めて華美なるもの、

そは空想の翼に駕するとき、弘大ほとほと無限際に達せん。
さはれ其希望達せらるゝや、その樂みは期待せし如くならざりき。
渠等が悲み、流涕によりて掃ひ去られ、
渠等が胸裏、つねに日光遍く照して一片の曇りなく、
彼等の薔薇色なせる顏容、以てかれ等の健康なるを知るべく、
彼等が智惠は天眞なり、渠等が創見は常に新たに、渠等が潑々たる生氣、其比ひなき强健の骨骼より泉む。
日はひねもす憂ひなく、煩ひなく、
夜はよもすがら安く、穩かなり。
其精神は飽くまで潔く、
曉の色迫り來て徐ろに退き去るべき、其睡眠は極めて靜かなり。

アラース！、これ等壯き者よ、
渠れ等小さき犧牲屠り食ふべく、いかなる「薄命の手」そこに伸べられたるかを渠等は露知らず、
はた將に來らんずる奈何の「禍」をも悟らず
「今日」を今日として無邪氣に遊び狂ふ、渠等が無心なるもまた憐れむべきかな。
看よや眸を凝して、壯き者爾ぢ等の周圍には、
人の「運命」主る者共と、暗憺として懼るべき、「不運」の一列が、什麼に立て籠めて群れるかを。
噫、かれ等壯き者をして知らしめよ、
かの情知らぬ一群が、其餌食捉ふべき伏勢となりて、そも何の處に潛みて待てるかを。

渠等もまた等しき同胞なりければ也。

壯き者の情熱は、恐ろしきまで激まさるべし、
情熱これを假ふ、猶胸の中なる隼か。
「憤ほろし」の極み、人を喇り人を罵り
「恐れ」の極み、顏色蒼白く變り、
「愧耻」の極み、心の亂れ鼎の沸くらん樣あり、
「戀愛」は、青年の雄心を銷り滅し、
「猜忌」は劒なす牙を現はして隱れたる方寸を嚙む、
「羨み」と「妬み」には顏と容と憔せ悴れ、
「憂へ」と「苦み」には、形と骸と枯れ槁るゝべし。
光りも消えぬ、慰みもあらず、世はたゞ、疎ましき寒巖枯木
なるべき「失望」や、

さては投げ鎗よりも鋭き「悲しみ」や、
みな交る交るに胸に刻みて、いづれか「不運」の麾下のもの
たるを宣傳せざるべき。

ある者は、其逞しき功名の心滿たさんとして、
青雲まよふ千仞の巖より、困窮の淵にまで轉び墜ちぬ。
かくして渠れ、成否たちまち地を變へつ、
到る所唇を反されて、輕蔑と惡評との犧牲となり、「欺瞞」の
針、また絶えず渠が肌を刺すなるべし。
かくして不親切に、絶えず變轉する渠が眼は、
眼自らが漂はしたりし、血なす泪を嘲むべく始めぬ。
鋭き悔恨は血をもて汚され、
變り易き狂燥は、烈しき悲哀の只中を、たゞ荒れに荒れ廻る、

見よ！、爾ぢが一歩の下を、
「年」積りたる谿間には、恐ろしき一隊現はれたるにあらずや、
なぞ一隊とは。
そは「死」てふ悲むべき一族なり。
渠れ等や人の子の關節を拷問臺に締め上げ
人の子の脈管に灼鐵を施し、
其筋と肉とをば、再び緊張すべく禁め
人をして再び働き動くこと能はざらしめ、
他の一部、さらに其内臓に入りて、
思ふがまゝに其荒びを行ふ。
看よや、かゝる時、
さらに此一隊の使命をまたくあらしめん爲、

「貧窮」まづ來り、氷よりも冷かなる掌もて、
人の靈魂を感覺なからしめ、
徐ろに寄せ來る「年波」ありて、
遂に人の子を不歸の鄉の渚に打寄す。

世に生るとし生ける人、誰かは受くる所の哀苦なからむ、
已に生れて世に人たるからは、吐息と泣とに勤さるゝべく、
皆ひとしく、定められたるものを。
されば よしや、心優しきもの、他人の難苦に同情し、
情無き人、己が苦しみによつて悶燥くとも、
さはあれ、悲哀は決して遲く來る者ならで、
なほ幸福は直ちに消え去るものなるを。
たゞわれ、そを渠等壯き者に告ぐる、そも何の手柄、

かゝる思想、これ却りて、渠等が樂園を遺りなく壞り盡すに等しければ。

あゝ早、われは何事をも云はざるべし、

智なきものは却つて幸福なり、

愁ひに賢からんは、寧ろ魯かの至りなるべきを！。

（西詩）

四　わが幼時——故鄕の山河

故鄕を語れとな。

われもまた故鄕の一片にあらずや。

人は故鄕と天然とに對ふ時のみ、よく天眞なり得といふ。夫れふる里の天眞は、つひにふる里の幼時に若くものあらず、希くは予れをして、わが幼時を說かしめよ。

わが幼時の精神を熔鑄したりしもの、そこに家庭あり、朋友あり、鄕黨あり、而して自然と讀書と、また感化の多くを與へたる者なるを辭み能はず。

五歲なりし折、百人一首を悉く暗誦じたりとて、他所の叔母樣よ

り、菓子を頂戴したりしを記臆す。

六歳の折、われ母方の叔父なる人に就きて、『大學』を習ひたりき。叔父上今故人となりぬ。村に有名なる大酒家にて、飲めば必ず家を漂ひ出で、道行く人を捉ひては、理もなき揖禮を強ひ、さては理路もなき、漢書の講義の眞似、憶れ氣もなく、滔々と吐き出す片腹痛さよ。さるからに、金盥叩くやうなるその醉聲の、街の一角に聞ゆるいつも〳〵、かの五臺山上の魯智深の如き、其醉態を思ひ出でられては、云ひ合せしやうなる一樣の顰みの、必ずや村人の面に上るなりき。幼き折には、いさゝかものゝ書をも手にしたりけん、その紀念をばこゝに止めて、其醉歌はいつも〳〵、豆を煮るに豆の莢を焚くてふ、曹子建七歩の詩なりける。これに就きて可笑きことあり、叔父上の云ふ樣は、こは七歳詩とて、子建七歳の時の詩なり。母上の曰ふ、否とよ、曹植兄に迫られて、七歩の中に作りしものなり。

否然らず。さらばといふに、『三國誌』てふ生きたる證據あらはれて、さしもの叔父上、口を噤まれたる、可笑しかりし。

勤勉なる田舍の朝は、人みな夙に起き出ることゝて、己れもまた、つとめて起き出で、書包を擁きて、叔父上がり訪ふなりけり。村校にては『小學讀本』一の卷、那珂某の著といふを、亞細亞人種、歐羅巴人種と、節面白く讀み上げしわれの、いかで『大學』の難句を解し得可き。さはれ其御師匠樣とても、正體は頗る怪しげなるに、大學朱熹章句より、たゞ口移しに敎へられしを、また口移しに誦すれば、それにて滿足せらるゝなりき。弟子もとより不審をいはず、師もとよりよく解せず、天下以て太平なりき、覺束なき敎へ樣よ、覺えざまよ。

ある日我校の師、予れを誚むるらく、『今日此頃の開けたる世に、『大學』一冊讀みたりとて何の手柄ぞ、夫よりは卿が短所なる、算

術や習字などこそ、正當に勉むべきものなりけれ』。われ歸りて後、母上に告げまつる、母上は例の性、いたく憤り給ひつ、『われはわが思ふ所すなるを、いかで渠等の關り知ることかは』。

かくて辛くも、『中庸』を讀み了へたるものから、なほ自然の趨勢には克ち難くて、われ何の益を見ずして止みつ。さはれ校の教科書に、『皇朝史畧』など用ゐらるゝ樣になりて、死灰再び燃ゆ始めぬ。われ太だしき興味を、漢學に感ずるやうになりぬ。『外史』や『政記』や、『國史畧』の類、そこゝと求食り求めては、一日を家に籠るぞ多かりき。折り折の話半ばに、「前門虎を防ぐ」「良藥口に苦し」など、用もなき危ふき漢語繰るより、智識單純なる村人を煙に卷きて、天晴學者の名を博し得たるなど、思ひ出でゝは中々に含笑まれもする。

記して忘れぬことあり。ある夕叔父上の訪ひ來られて、再蘇の事を頗りに母上に奬めらる。そは富裕なる村人なるが、其私有として、

年に籾一俵づつ貯ゆるを許すべしとなり。自ら汗し、自ら苦まんよりは、兒等が爲に計るも、また好都合ならずやと。眠りたるわれのいつしか目覺めつ、苦ろなる奬めを、默して考へ給ふ母上を思ふ。思ふ、父上は村に類なき學者に在せしと聞くを、よしや富裕なりとても、農夫づれの何とかする。再蘇か、再蘇か、われは斷じて、再蘇の好もしきものにあらざるを知る。まして萬知り給し母上の……、しかもわれ等が爲としあらば、恐らくはいかなる犧牲にも、堪へ忍び給はん母上の、……恐らくは鐵石の心とみに碎けて、……、さることの誓つてあらぬべきか、……、あらざるべきか、さてありもせば！。……、村人が嘲りと風評といかに激しかるらむ、さもあらばあれかゝる事は、幼きわが如きが喙容れて、兎かう論ふべきものにもあらず」、……撚り糸の心亂れて、わくらむ由なく、わづかに夜着の袖より、「貞女兩夫に見ゆず」と、うろ覺ねの聖言、聲高に叫びつ、

言ひも了へぬに、床の中にもぐり入れば、ひとしき驚きに撲たれた
る母上叔父上の、叔父上に驚きの色あり、母上に悲みの色あり。か
くて其議の、いかになり行きけんかは知らず、つひに沙汰やみとな
りにき。この事に就きて、母上は己れに對して、一言をもの給はざ
りけれど、醉へる叔父上の、いつしか村人に告げ知らしたるより、
予れいくたびか村人に語り出でられて、面赧めたることも多かりし
ぞかし。

凡てかゝる觀念、かゝる言語は、今更に繰りかへすを要ゐず、す
べて漢書より獲來りたる、自然の收穫なるべくして、しかも頑々た
り、寵下に媚んには餘りに硬く、世に容れられんには、餘りに魯か
なる、わが今日のこの態を形りたるもの、またひとしく、その收穫
ならずばあらず。悲むべきか、はた喜ぶべきか。今人はこれを嘲み、
悲むべしとなす。然りや、吾は知らず、なほかつわれは其の悔ゆべ

き所以を知らざる也。

われは『外史』を讀める如く『八犬傳』を讀みぬ、『國史略』『王代
一覽』を面白しとしたる如く、また『小栗外傳』を快讀せりき。正
成や幸村の運命に泣けるわれは、またひとしく、濱路雛菊の薄倖を
哭しぬ。「即曰朝廷賜我於大島」の爲朝を快誦したる予は、またひと
しく、池の庄司、風間兄弟の忠魂義烈を賛め稱へざるを得ざりき。

われは小説を讀みて、いくそたびか泣けり。小兒の情は眞率なり、
その涙や清かりき。『美少年姿』の蘭丸、白菊、福壽丸を讀み、『血達
磨』の大川友衛を讀み、『執着譚』の時鳥を讀み、「折からはげしき日
まけせず、滸我へ參りて名をも揚げ」の濱路を讀むとき、われや眞
に愀然として泣くことを辭み得ざりき。

しかも『天下茶屋』の塙團右を讀み、『天草軍記』の千々輪五郎左
を讀み、『岩見武勇傳』『柳荒美談』の主人公を讀み、どこに行きても

負くることなき、武勇なる武者修行者の傳記を讀み、讀んで蔗境に至る毎、肩自ら昂り、眉自ら動くことを禁じ得ざりし也。

お家騷動の千篇一律なる、なほわれは其局面の變化多く、忠奸の轉變、日蜀葵の日に向ふが如きを讀みて、悲喜交もわが快感を動かせし如く『七偏人』を讀み、『八笑人』を讀み、『西遊記』の猪八戒を讀み、『膝栗毛』の主人公を讀み、捧腹絶倒に堪え能はざりし如、われはまた、荒唐不稽なる妖怪譚に、わが嗜好を移すことを禁じ得ざりしなり。さればや、井上勤氏譯の『アラビヤン、ナイト』より、『西遊記』より、『白縫物語』より、大江山の酒顛童子まで、みなわが腹笥に入りて、怪談庫中の一部を占領したりし也。

蓋し人の稚き折や、抽象的思索的の讀み物が、その單純なる腦に入り難くて、事實的、特に實感を悚動する如き、傳記的作物に其興味を訴ふるは、これ自然の傾向ならずはあらず。われもまた、其例

に洩れざる一人なりき、否、獨りこれを、思想に印象むるのみに心滿たで、更にそを實行せずは止まずなりにき。

薔薇色の光、夕べ朽葉が丘の巔に流れて、夕靄は四方より逸足して押し寄せぬ。あたり小暗くて、やうやう人顔もわかぬ逢魔が時を、蝙蝠飛び出づる土橋のあたり、人は見ることなかりしか。手頃の蜀黍桿の長さ四尺許りなるを手挾み、顧眄揚々として家路に向かへる、一人の小さき童ありしを。さらばこれぞ、今日村童が集ゐの莚に、劇曲家たりはた役者たり、眞似の芝居に大喝采を拍せし、われなりしことを知らざる可らず。われは好んで、燕人張飛たりき、烏山秋作たりき、孫悟空たりき、清正たりき、五關を破る關羽たりき。わが竹桿は、片鎌の槍たり、丈八の蛇矛たり、億萬丈の金箍棒たり、頗る融通のきく便利なるものにてありき。

校の休憩の時を竊んで、われ等三四人、例の名劇を演じ始めたる

とあり。われは兒雷也たり、他は綱手たり、大蛇丸たりき。座頭のわれ、まづ日頃の棒切れを大上段に振りかぶりて、「賊名自雷也、まことは尾形周馬弘行とはわがことなり、汝を賊の張本、大蛇丸と見たは僻目か、いざ尋常に勝負せよ」など、見得宜しくありて何屋張りかは知らず、衆生の喝采に、天を呑む意氣、いよ〳〵凄まじかりしその時よ、忽ちわが背後に大喝一聲、

『何だこいつ等が、いつでも學校の休みッてと、來ちやあ散々に麥畑を荒しくさる、こん畜生、こん度は承知しねいぞ……』。

阿羅漢の如き相貌して、銀の鬚髮悉く逆立つ。畑の持主なる傖夫の、桿を手にして、あはやわれ等が後より逼り來れるなりき。すはや事なり、戯劇は活劇となりぬ、流石の綱手も、大蛇丸も、この場合、印を結んで呪を稱ひ、傖夫を金縛りすべき術は忘れたりと見ゐて、たゞ這ふ這ふの體にてぞ逃げ失せぬる。凡そ心細く、賴み甲斐

なきこと夥しかりし。

こゝに哀れを留めたるは、はた頗る奇態なりしは、而て至つて心得ぬは、天下希世の豪傑として、知る人ぞ知る尾形周馬弘行、一名自雷也君の振舞なりしかな。竹棒いつしか掌より墜ちて、べたりと地上に座せる態は、黄蘗木を嘗めたる啞ともいはんか。人柄にもあり、事柄にもあり、三縮みの蝦蟇といはんには都合よかるべけれど、正直に云へば、餘りの驚きに、脆くも腰を打拔かしたる也。流石の衆生、この態を見兼ねけむ、わつと再び盛り返し來り、御大將を肩に引懸けて、三軍總敗軍の體、命辛ら辛らに、辛くも本陣に引返したりしか。これより先、我が腰を拔かしたる見るより、先の傖父は後難を恐れて、はや影も形も見ゑず、家の中にと退却せしなりき。

われは壯烈なる、怪奇なる小説を好みき。いなそれにも增して、更により多く、悲愴なる物語りに於て、わが戀々の情を擔ふもののあ

りき。かくしてわれを勾引せる影響は、浮世の轉變、人世の缺陷を、朧ろげながらに了得せしめつ、「自然」殊に「幽寂」の、頗る愛づべきものあるを知らしむるの傾向を養ひにき。想ふ、雲ひくゝ垂れて鴉の聲わびしき秋の暮、深灰色に打ち曇りたる夕間暮を、われうらさびしき晩風に、そよそよと打戦ぐ庭の穂薄に見入りて、母上が怪訝招きしこともありしよ。

黄色なる日影、いとも力なげに、はた悲しげに、夕ぐれ寒く、風衣裾を捲く村の小徑や、瀟洒たる野菊の、糠星より小さく輝ける花の、何の粧もなく咲きみだれたる。

あるは雨霽れて空山横はれり。簟狩らんとて、栗の林を穿ち、小枝さしかはす、楢や櫟を搔き分て、堆き落葉朽葉の山徑深くわけ入る時や、鑿々として脆くもくづ折るゝ濕土に生れて、紅き白き名無し簟。あるは青塚累々として、薄、刈萱の手、何來の冥魂を招ぐ、

日蔭のあちこちに散ぼいて、世にも淋しげに咲き出でたる、名も無き草花の眞紅に淡紅に、淺綠はた濃紫に、皆他界の色を帶びたる見る。其の悄然として立てる天眞の姿の、たゝ何となう、世にも知られず、慰めなき身、喞つにも似たるを覺えて、そこに言ふべからざる淋しさあり、幽けさあり、凄涼の氣一道、水の如くわが胸に沁み來るものなくんばあらざりし也。

× × × × ×

遙かに廣き百千の谷間、
咲き出る花新らしく、美はしく、
日影暖かに、綠り兒は母が腕の圍りに跳ねつ、躍りつ。
われは聞く、喜びを以てそを聞く、
さはれ多くの樹の間たゞ一樹、
わが瞻上ぐるところ、淋しき野原、

この二つの者は、過ぎ來し方を細かに語る。
わが脚下なる三色菫の、また同じ物語りを繰返しつ。
何處へ幻想の光り脱れたるぞ、
今それらいづくにある、光榮と、夢裡の榮華と、いまはた何處ぞも。

（西詩）

× × × × ×

美はしきは、わが村の自然なりしかな。
忘れがたきは、わが村の自然の俤よ。
われは智者にあらねども水を愛す。水か水か、あゝ瀨音淙々徒らに耳底に存して、波流の綠、つひに尋ぬべからぬ名も清瀨の流れよ。
遠く西より來る一奩の波流、汪々たり、煙横たふ其水は、まさに造化か、千簇の毫毛を一斗の藍青に浸して、畫き來れるかとぞ疑はれ。
枯楊の堤に咽び、菰蒲の洲に漂ひ、漁翁の釣竿をめぐり、小船

の舷にさゞめき、百の小山、千々の村里、溶々として滎り洄りつゝ、黄金のさゞれ、白銀の立つ波、徐かに緩やかに流れ行くなる、大河の懷のいかに廣やかなるよ。
もし夫れ一帶の碧油を湛へたる春のこの河よ。向岸の青柳條々地を拂へば、夢見る陽炎の、半地より起ちて舞ひつ。鼈甲の櫛笄に結立ての丸髷、鴉の濡羽色に油つやつやと、惜しや二八の白齒を涅めて、今日よりぞ浮世の憂には染む。何とかいふらむ、衣地に總ぢらしの裾模樣、金襴てふ帶纏ふて、羞げなる面、伏目勝なるは、今日を里歸りの花嫁御寮にや。折目新らしき墨染の法衣に、紫の袈裟にあたりを輝かして、麻衣の雛僧を後へに從へたるは、村寺なる住持の、法要に招かれたる行手なるべし。村婦もあり、また傖夫もあり、河柳の岸に應と招べば、應と答ふる彼方にも、こゝら佇む客を數に充てりとや。煙掩ひつくして、ありとも見ぬ葎の家より、悠々と

顯はれ來るは、夕顔棚の光秀ならぬ、赭顔の渡守なり。やがて人みな船に乘り移りぬ、舵を操る篙師が嚙める、鉈豆煙管よりたなびく煙は、伊軋たる棹聲に和してゆるやかに、春風に靡きて中つ流れに消ねぬ。此方より渠方に、かなたより此方に、柳にのぶる長閑けき春も、萬山みな痩せくろみて、猿の齒白く峭壁に哀叫する秋の夕も、送りて迎へ、迎へては送る、つとめに露の撓みとてなく、あはれ一柄の水馴棹、はや幾とせの世波をば凌ぎつる。頭は時ならぬ霜をぞ措きて、餘れる命いくばくかあらむ、水のうたかた、世にも賴みなき行末ぞかし。

世の中を何にたとへん朝開き
こき行く舟の跡のしら波

舟は空しく澪汀に繫がれて、渡守は歸りぬ。鷺鷥沙洲に眠りて、夢いとおだやかなるところ、碎沙泊々、紙の如く平かに舖かれて、

（沙彌滿誓）

艙の底ねぶる膚寸の皺をたゝむ。ありともわかぬ波末天末、あゝ漂渺たる眺め哉。遠山の裾を繞り繞りて、細きと佼し女が一髮にも似たるよ。あるは碧沙淺水のほとり、雪とまがふ白脛を、赤裳の裙よりほのめかし、河水さゞめくにまかして、衣洗ふ乙女の姿やさしも。

もし夫れ揚柳空しく垂れて、青帝羅綾の袂かろく、はやくも鸞輅を還し給ひぬ。淤魚や多情、落花を歛ふなる、此の河の暮れ行く春、孤棹を碧波に濯ひて、鳧鷗の夢を亂しゝもの、これわれ等の徒ならざりしか。

「夏を忘るゝ浦風に、蘆葉そよぎて夕陽の影を紊し、水や天なる走り帆に、沙鳥飛びて江山の雲に入る、江に臨み水に對するとき、萬事たゞ無心、竿を揚げ綸を垂るゝ時、三公にも換ひ難し、一波動きて萬波皆從ひ、細鱗動きて巨魚あるを知る」とは、これぞこれ蓑笠翁が『八犬傳』中の好句、移して以て、河の滸りに熱砂踞せる、心

悠けき釣人を形容すべからざりしか。

校より降りぬ、書包を門口より抛つも遲しや、『只今』も口の中にて、家門を脱兎のごとく跳り出でつ、こゝらの桑畑、はた麥畑、大根畑を、たゞ夢うつゝの間に驅け拔けて、こゝ堤防に上れば、校の友どちが游泳の聲、手に取るばかりに聞ゆるなり。咄、後れしか、後れじと、衣を脱する間もあらせず、滄然一番、氷の如き流れに、隕星の勢ひにて飛び入れば、萬解の汗と塵とは、十里の河下に消ゆ去んぬる心地よさ。あはれ仲夏のこの河は、われ等を大焦熱地獄より救ふべき、尊とき佛世尊にあらざりしや。

あるは夕暮れ方の秋の風、汀の枯蘆衰荻にさやいで、更に河づらを瓠るときや、忽ち吐かれ出だされて、白波潜く一つの小柴舟。舟には鬢白きこと蘆花よりも白き、老いたる夫婦の棹を取れり。迭みに小手かざして、晩烟一抹、弓なせる長汀に罩むるを見つゝ過るの

妙趣、いかに自然に描かれたる、秋江一幅の圖なりしぞよ。

あるは黄金を散す波瀲灩、月に閃めき、月を碎き、渺たり、漠たる、大江の秋よ。其江心に一葉を點じて、紗よりも淡き狹霧の中に、岸邊に蓋なせる長松と、天邊馬背に似たる重山とを、たゞあるかなきかに認めつ。浩歌短棹、空明に溯りては、獨り天地の幽玄なる境に眠り。陶然の興つきては、羽よりも輕き孤つ舟、蘆花淺水を、たゞ其漂はん處に任す。かくて世界悉く寂莫の床に憩ひて、虫聲ひとり醒めたる叢を、露そぼちて家路に向ひし此河の夜毎もありしよ。

秋の天に月なくして、星斗氣は澄みわたり、高く銀砂子を密布せる、渡頭のありさまこそ凄まじかりけれ。前灣柳岸の草燈、螢かとばかり微かに洩れて、黑干玉の黑き波影に映ずる時や。たえて眠らず、さながらに大河の闇を護る、河伯が瞳の光かとも思はれつ。夜氣蕭として、肌にせまるさへあるに、絶えざる潮聲、暗に舷底を瓠つて、

絶えず濯々くの凄じき響きを傳ふる其の折々を、夢安かるべき波裏のうろ屑、何に驚く、淘然として躍るを聞くなど。

× × × × × ×

己が嘗て郷に歸るや、幾とせ相遭はざりし、一人の友を家に訪ひ、言いさゝか他聞を避くるものあるからに、共に携へて、河の涯に聳え立てる、朽葉が丘影へと赴く。くねれる苔の徑の木下闇をめぐりて、河に對へる半腹に、氈に似たる青苔しきて偃臥しつゝ、徐ろに世事を談じ、過去し方を忍び、さては來らん行末に泣く、悲涕清話、しばらくはやまず。目に滿つる麥朧は、見わたす限り果もなく、その間老杉のむら立ちて、自然に一つの杜なす中を、神の祠の、古宇兀として現はるゝあれば、人は豆よりも少さくて、桑柘に桑を摘むもあり。木橋遠く横はるところ、水其あたりより潺紆し來り、杳々たる波白く、水青かり。此岸の青松影なせる下には、釣する童の世

にも心なげに、綸の糸しづかに垂れつゝあり。折しもあれや、木の間を渡る天津風は、この般の清景に見とれつゝある、われらがあたりを自在に吹き通ひて、午後の日光容捨もなく、眞むきにわれ等が面上を射ぬ。雲は迢々とのべられて、今しわれ等が頭にあり、互に默せる霎時のわれ等は、たゞ忘機の境にと入りたりしか。

× × × × × ×

行く行く吟じて暮天に向ふ、
何の處か凄然たらざる
蛙影幾家の柳、笛聲いづこの船ぞ
樓は瓜步の月を分ち、鳥は抹陵の烟に入る
故里人の到る無し、
郷書誰が爲にか傳へん、
ありし昔の波光水色、わが宵々の夢を惹かざることなし矣。

（漢詩）

× × × ×

われは仁者ならねど山を愛す、山か山か、われ瞻然として、頽廢せる朽葉が丘を想ふ。

裏坂より登るとき、松杉道を夾むで、日晷洩さぬ木下闇わびしく、吹く風腥う、深林の古き薫りを賚らし來て、宛らに木魂叫えうめくなり。幾百年の倒れたる古木、雪より白き菌の上衣を掩ひ、落葉朽葉積み重りては、下や朽らむ踏むに簇々として、山鬼なんど踵に追ひ來るべう、空なる心地いと寒しや。しもと原こゝにつきて、差す日の光いとも眩ゆく、昔へ烽櫓の跡なりけらし、缺けたる瓦、頽れたる石、莓苔あつく封ぜられて、磊砢たり、こゝら堆かき。數歩のあなた、老いたる杉のたゞひと本、梢寂しげにひよろりと立てり。村人傳ふ、これかつて幾とせの前、雷ありてこの樹上に霹靂し、此樹の枝と梢を劈いて去れり。蓋し老樹の幹の窟には、大蛇常に好み

て棲むものなり、大蛇の領下、つねに徑寸の珠を藏む、雷のこれを奪はんとするや、まづ必ず來りて之を下り擊つものなればなりと。

樹の下に一つの小池あり、村人呼んで、底知らずの池といふ。げにや蓼一むらの涯、水深藍の色を湛え、浮藻、蓴の浮き漂ひて、たゞ湛々として深く澄めり。叢を出づる縞ある蛙の、まれ〳〵に淵然と跳び入りては、穩かなる池の面に、緩き波圏を擴ぐるときや、われ常にかつて聞きたる、古き譚を思ひ出でざるはなかりき。曰ふ、此の池、いく千仞とも知れぬ波の底は、やがて魔の池と通ふ。魔の池のある處、これ妖精の國なり。國の君は一人の老婆なり、髪は逆まに銀の毛を植ゑて、瞳に怪しき光を放つ、一日にひとたび、その黄金の魔の鞭掉つて、魔の池の畔りに立てば、國民みな集ひ來つ、池の畔を繞つて歌聲面白く舞ふ。人みなの手に花束あり、一葩また一葩、舞ふに從つて池に拋られ、興ずることいよよ酣にして、花い

よゝ繽紛、波紋いよゝ多かり。思ふこの波紋はその波紋ならぬかなど、そぞろ儚なき想像を驅りては、ほとゝ恐ろしさに得堪へず、後も見で逃れ歸りたることもありしか。

垂たる雲の蒼きが樣に、枝蔓りて葉萎れる樅の老樹の上、魔王かつてこゝに宿り、狠毒の瞳、下界を見つめては折々に瞬くか、妖星一つ、光紅きこと血の如きが、亭々たる第一の稍に輝きまさる夜半。あるは片われ月の一痕に、生き乍らに裂く、餌食の生血や滴らむ、闇を啼く梟の聲凄じく、怪物屋敷の名、一入に人を怖ぢしめたりしか。

里の子が、踏み荒したりけん蓬、茨の、身の丈よりも高き一筋道を、心細くもとめ來れば、蛇いくつともなく道を横ぎつて走り、恨みありげの眼の光、幾度か心冷さしめつ。流石に春は、幽けき名なし小草の花、力なく咲き崩をれたる見る。來て見れば樓櫓の上、晨蓼々たる大鼓の響、出仕の刻を告げて鳴り渡れば、麻上下の稜いか

めしく、諸士相簇擁して城に登りけむ、嚴めしの關門今も立てど、また叩かん人もあらざるべく、軒朽ち椽破れて、狐兎晝遊ぶ、あゝ昔これ村の主、なにがし氏の舊き棲ゐ、いま御館荒て、昔時の俤いづくにかある、坐ろ鷓鴣泣くてふ、荒凉の念に堪へざらしむ。ましてや庭前の一大櫻樹、氏が在りし昔は、莞爾として嬌びたる靨、『今日來ずは明日は雪とぞなりなまし』と惜まれて、絃歌嚠喨の聲絶えざりしも、氏一朝去りてより、また杯を銜んで賞でん人もなきを、春來るごとに開き落ちて、ありしむかしを忘れぬ心、いたはしからずや。

この丘の背面、小さき渠に臨んで千仞削成、見る目危き青き巖は、疊々として山の半面を裝へり。吁この青き巖よ、天門に光りの幕張られ、大日滴露に接吻して、彼方の峰に踊躍し初むる時。長風に袂を孕ましめて、人この削巖の上に立たんか、絹をかつぎし綠りの野

邊は、みな紅の單衣もて被はれぬ。彩氛六合に遍滿くて、遠き山近き丘、靉靆たる紫の雲に浮動し始めぬ。銀蛇を走らす清瀨川、せゝらぐ波にも油を湛へ、眼下三つ四つの茅が屋には、黑き煙中空に冲るべく始めぬ。清くうるはしき、朝ぼらけの田舍の空、高く長嘯すれば、心頓に伸び、浩然の氣雲の如く湧いて、風に御し、空に步する縹渺の思ひなからむや。

× × × ×

目に滿つる麥隴の、隙なく綠りなると、禾黍の秀でゝ油々たるところ、これぞわれ等が、雲雀の巢を取らんとて、幼時踏荒したる所なりしか。さはれこの里知らぬ旅人の、法三章の札の下、畑うつ農夫を驚かして、夢魂幾歲月、榮華の跡を問ふとも、誰かは爲に顧るものあらむ。顧みもせず空嘯きつ、燻らす煙草の烟の末は、遙かに春風に斷へて、あはれ亡國の恨、知らぬは商女のみにもあらぬべし。

× × × ×

われ鄕を省せる一日、草青くして水繞れる、舊知己この朽葉が丘の眞畫を訪ふ、關門またく朽ち破れて、櫻樹いつしか斧斤に斃れ了んぬ。たゞ漸々たる滿隴の綠麥、南來の和風に靡いて、誰が爲の裝を爲すものぞ、蕭索落寞たる這の個の景、轉た感多きわれをして、國破れて山河あり、城春にして草木青しの歎に沈ましめき。

× × × ×

去年花を看る城郭に在り
今年花を看る村落に向ふ
花開いて舊に依り自ら芳菲
客思居然として寂寞を成す、
亂後城南花已に空しく
廢園門は鎖す馬聲の中

飜つて憐れむ此地春風在り
水に映じ籬を穿ちて幾叢を發す
早時遊伴但何の處ぞ
祇間蜂の樹に隨つて繞る有り
春愁を慰めんと欲すれども酒家なく
殘香細雨空しく歸り去る、

（漢詩）

× × × × ×

上野の鐘の音、夜深を告げ渡るいつもいつも、想ひ起さるゝは、
落葉が丘の鐘聲よ。
眺め寂びしかりし哉、この丘の邊の雪の夕は。凍れる密雲萬里に
渡りて、鈍色の空、名殘りなく天地を打掩ひぬ。劔なす寒飈、猛き
火の如く狂ひおらび、激しき波の如轉り旋るほど、颯たる一吹き、
原頭の松を横擲りする時や、松が小枚松の細葉、みな活きぬ、震ひ

悚きぬ、そこに一つ一つの悲鳴ありて、餘れる哀れみを空に訴ふ。
若し夫れ聲なく搔き暮して、降りしきる霏々たるもの、紛々たるも
の、巴となりはた卍となり、其響に和して起つて飛ぶときや。たと
へば仙姫、綾羅の袂を飄へして、廣寒の宮に白雪の曲を舞ふなるか、
香なき天花の、繽紛として亂れ飛ぶ。そこに瑤の臺あり、こなたに
珠の樓あり、かなたの丘には、丈なる白髮ふり被れる老將軍の、白
羽の麾を手握りて、白袍を穿ち白馬に跨がり。こなたの巖には、雪
眉の老僧の白衣を着け、禪杖固く立てゝ無言の咒を唱ふ。
かく降りしきりて小止みなければ、森も白く陵も白く荒野も白く、
黑ずめるは、今たゞ清瀨の河波のみ。日脚短かき冬の日は、たゞ靜
かに靜かに暮れ行かんとす。德利提げたる村童も、雪に喜び狂ふ小
狗の影も、今はゝや見えずぞなりぬ。村人はみな圍爐裏圍みて、榾
火の熱かさに頰も紅からんを、時失ひて、寒林に小雀の啼き噪ぐは、

明日の餌を憂ふにやあらめ。あゝなれ等何の運命、小やかなる身に毛衣薄く、今宵の宿りいかに寒からし。

ふり仰ぐ、落葉が丘の鐘樓堂、降り積む雪繪の樣に屋根を埋めて、たそがれ告ぐる鐘の聲、一杵また二杵、其下より搖ぎ出でつ、隱々として沿ねき村を亘りぬ。往き交ふ人もなき雪の街の、二の字二の字の下駄の跡より、まづあたりは小暗くなりぬ。村はいよゝ靜かなり、暮れ殘るは、たゞ滿目の雪のほの白き眺め。

× × × ×

白き幟り古びて立つ、二重の朱の華表をくゞり、石燈のいく級かを數へて上れば、小丘の上、神樂堂の彼方、一神祠あるもの、これを村の鎭守の社、八幡の宮居となす。甍の千木、森々たる老杉の頂に現はれ、岫を出づる白雲は、朝夕に來りてこの楹に碎く。

仰げば遍額蝕ばみ、風に白れて、記せし古篆の文字も朧ろに、鼠

矢堆かき賽錢箱のあたり、わづかに米粒の、はら〳〵と散點したる。

袖にもわかぬそよ風に、紫の鏽浮べる古き神鈴の、おのづからに鏗然と鳴るところ、境內落寞神寂びて、人一たび入れば、幽玄深邃の空氣身を壓し、敬虔の念自ら起るを禁ぜざるべし。

秋の祭の紀念なるべくや、奉納相撲の土俵場の、小草こゝらに生じたるを、降り續きたる此頃の雨の、自らに小さき瀦を湛へつ。やや堆き砂の上に、小笹淺く差したるは、昨日や里のうなゐ子が、遊び戯れし跡なるかも。風情ありや。

祠畔の藪だたみに、交はり咲ける一株白椿の花、一葩風なきにほとりと落ちて、一鳥なかぬこの丘の、さらにさらに幽けきなり。

さはれ時ならぬ大聲の軍歌は、白日俄かに此寂寥を叫破して起り、擊ち合ふ竹木の音凄まじく、堂の椽を蹈み鳴して馳驅せしは、吾人が戰爭遊戯ならざりしや。

峰の巣を殲さんとては、昔物語にありけんやうに、寂莫と默して立ち給へる、地藏尊の尊像に攀ぢ上り、果ては尊像の御鼻を打ち缺き、御腕を捥ぎ奉りたることもありし――されど慈顏なる地藏尊は、微笑莞爾たること前の如く、決して怒り叱し給ふことなかりし――あるは蟋蟀を求食らんとて、石垣の石を引きめぐり、あるは神體を拜せんとて、錦の御帳を引き裂くなど、いかに惡戲好きの頑童なりしよ。

一年三度の大祭は、流人が赦免を待ち望む樣に、われにありて、いかに待遠きものなりしよ。此の日村人、皆業を休みて、其心みな怡悅に滿ち、其面みな歡喜に溢る。もし夫れ祭りの場に至りては、更ためて說かむも管々しや。聲を嗄らして叫ぶ商人の掛聲は、高く響いて、人を呼び集ふる鐘聲と和し。堆かく積まれし桃李は、饅頭、餡餅、團子と並び。繪草紙は百色眼鏡と雜居し、山雀の藝盡し、地

獄極樂のからくりある雜沓の中を、天晴れ一世の炫衣靚裝、左視右眄して練り行きしは、これ何人の幼時なりしぞや。

× × × ×

寂しき哉この水、慘として流れず、暗碧を湛へたる小沼の面には、前山の黑ずみたる影を蘸して、一木一糸だも亂るゝことなし。釣する翁の、青き蘋、生ふる涯に蹲りて、宛らに凍れる蠅にも似つ。一竿の風月、悠然として世事を忘れ了しては、浮世の外に蟬蛻したるにやあらめ。見やる遙けきあなた、鱗くづ筌すべく、繪に似たる四ッ手網の、あるかなきかに懸けられたる番小屋の邊り、太蘭、萍、菰なんど押分けて、漕ぎ出る一葉の藻刈船。世にも憂きなげに靜波にうけて、棹歌杳渺霞にきねつ。縷々たる一すぢ、金龍の搖ぐ影を後へに畫き去りて、蘆の牙角ぐむ處になづみ、つひに其ゆきけむあたりを知らず。われ黝然たる、葎が池の波色を想ふに堪へず。

われ村茶屋のあしたを想ふ。

× × × ×

あゝ村はづれなる村店の春よ。朝餐の後なり、里人は鍬荷ひて、野良耕す可くいそぐ時、店頭の老媼は、一人一人に晴朝を祝して、小川のつくるところ、土橋のあなたへと目送しぬ。それも今はあらず、茶鐺は沸々の響をあげて、たぎりつゝ爐のあたりに蹲まりぬ。屋後に二三もとのいさゝ叢竹、東風にかよひて簇々と鳴りわたれば、彼方此方へと枝移りして、さゝめく小雀の翅輕げなる。

此處を過ぎんとするとき、必ずや多くの旅人は、しばしの疲れを休むべく、胡床に腰うち懸くべきか。旨くもあらねど、駄菓子の二つ三つを撮むとき、嫗が酌み出す一椀の苦茗に、そもまた何等の緣しなからでやは。さらば聞かまほしき哉、そも旅人よ、おん身はいづくより來り、いづくにか往く。いかに悲しき懷ひを包めばとて、

花に柳に、樂しかるべきふる里を見捨てゝ、知らぬ他し國の空なに故に、かくはふれ漂浪ふ身なるぞも。叶はぬ戀路に世をばうらぶれし。親やいまさぬ、子をや失へる。江上ふな人の、立籠むる薄霞を穿ちて、帶より直き碧波を下る見し時や。さては奥山遠く踏み迷ふて、千仞萬仞の溪底かすかに、春告げ鳥の啼く音、夫れかと許り聞きにし時や。なれが心の緒いかにわびしく、便りなき響きに打ち鳴らされたりしか。岸うつ波の、限りも渚に立ち盡して、友なし千鳥の影を寒み、小嶋のあなたに消ゆるあたり、雲井に續く大和田の、沖空綿渺と眺めやりし時、坎壈半世の小歷史、忘られも得せで繰返されつ。刻みて深き失望の色の、垢つきて骨瘦せ、日に燒け黎みたる額の上に、いかに哀れにも浮びたりしか。

さもあらばあれ、たとへば行雲の心定めぬ、旅の身こそ中々に羨ましき哉。そこに畫だくみもあらむ、歌人もあらむ、頭陀や飴賣や

逼歴者や、來るは巷の方に、去るをば松並木に、嫗はたゞ平均なる、無心の愛嬌と一椀の澁茶とに、露隔てなく送り迎へつ、矯飾なく巧言もなく、かくして終り行べき身の、いかに平和なる一生なるよ。

* * * * * *

清淨なる哉、眞青に澄み渡れる天象、一羽の微けきも見え透くべく、瞭然たる秋空の下、靜かに痩せてつゞける小さき丘、人の蕭々と弔輿を擔ひ、細路迂徑、蛇の如きを、繞り繞りて登り行くを見る、いかに。若し夫れ蜻蛉、其上に舞ふて、青く晴れたる、遠の小山の峽より、分明にたてる老松の梢こめて、緩やかに天末に消ゆる黑き煙を、指して何かと問へば、これぞ東村のなにがしが、屍やくなるそれよと答ふ。あゝ「駒取りや本の雫は末の露」、明日知られぬ露の身の、後はたが身の上ならんなど、泡沫夢幻の觀念は、心なき野夫の胸にも沁まずや。われ葬りの式輿ずるの餘り、其輿に踵いて、草柴

山にいたりしことあり。時は秋なりき、晴て高かる空なりき。老僧が誦する經、棺が沒すべき墳墓の坎、幼きわれには、一つ一つに物珍らしくて、笑ひのゝしりつ、式を了ふるを見護りしことありしか。われいま悄たり、深く草柴山の秋を銘す。

* * * * * *

われ杳として里の小川を想ふ。波は日光にきらきらと閃めきて、輕く暇を縫ひ畔に隱れ、蒲、河骨、水草等薫る里の小川の、末は青き房糸の、中ごろよりいくつにも解けたらむ樣に。はた春の蛇の、草むらを匐いて行くにも似て、見えつ隱れつ、さながらなる迷宮の、苗代小田のはざまに注ぎて、幼なき聲音は、潺湲として長へに老いざるよ。

さては風にそよぐ、稚き秧の根をば洗ふべく。天翔り行く、雲の姿の靜心なきを、水のおもてに止めつる果は、また閃々として、倦

まず疲れず、菜の花がくれせゝらぎ行く。

そこには繩もたぬ宛がらなる不動明王の、赤銅色の膚をば、半ば緑の波にひたす里の童よ。手網手に手に提げて、しきりにひしめきのゝしりつ。小蟹の窟を覆へしては、少さき魂を奈落の底に逃げまよはしむる。憶へば幼き昔のわれも、また其の腕白の一人なりしよ。

小止みなき五月雨に、水嵩まさりて土橋をこゑ、蒲かつみの上に濁り黄ばめる水瀬は絃放れたる矢よりも急に、鯉鮒などの、時得たりげに浮き沈む。ましてや稚秧挿さむ早乙女が、蕭々の雨に歌聲煙り、蓑笠裝ひたる田舍男の、馬に畔途を濕れて過ぐるほど、遠山里は墨繪かとばかり、雲立掩ひて見わざるもをかしからずや。

＊　＊　＊

われは村長が背戸の槐樹を想ふ。犬は三餐足りて、樹蔭の眠り穩かに、鷄は落穗を啄ばまずて、拘把の生垣に牝牡相呼ぶ。眺めは見

渡す限り遙かに。滿眼の秋の風、刈穫時の黄ばめる稻穗に囁きて、千頃萬頃のそのきはみ、何ぞそれ渺茫たるや。

遠樹の眺めこそ、更にさらに可笑しけれ。たれとなく、人を懷はする日光の下に、樅、樫、榛、榎なんどの喬木の、梢高き木立ち、茜色、はた鳶色、さては黒ずみて密集し、田隴遠く、茅屋の間に居並びたる村落を見渡すときやいかに。

家は見えず、自ら洩れて移らふ烟。疎らなる林を、秋白れる村を、野を斜めに照す夕日影寒く、暮靄遠くよりやゝに罩め來るあたり、農人畔みちを渡りて家路に歸る、孤村を夕暮の眺めいかに。「孤村流水六七里、殘照斷煙三四家」の趣、具に認め得たるに庶幾からずや。

たそがれ、風淋しく懸稻を吹き、田より田を打ち繞りて、聲立てて都の方に流れ行くなる、野川の岸に簇立せる、白き穗薄を吹き搖かす。落葉燒く烟、遠の村園より立ちのぼるなど、心細からずや。

秋はやうやく暮れんとするなり。

＊　＊　＊　＊　＊

かくてわれ、明月軒に臨み、清風佛燈を煽る盂蘭盆會を想ひ。秋雨にたそかれ行く、賤が媼の糸車を想ひ。子守女が、淋しき子守唄を想ひ。蟬時雨、街は焦熱地獄の暑き日を、帽子も着けず狂奔した る昔を想ひ。茶摘みを想ひ、中元を想ひ、正月を想ふ。

現在より未來に、過去より現在に、故郷より現住に、幼時より壯年に、轉輾珠の端なき如、思ひ辿るとき、われ實に一抹の笑容を捧ぐると共に、亦一掬の涙あることを禁ずる能はず。

＊　＊　＊　＊　＊

ふる里はみしよにもなくあせにけり
いつちむかしの人ゆきにけん

（西行）

五　秋風一夜

われは今日も猶あるが如、小兒として至りて平凡のものにてあり き。われは我が父上より、精神的に、肉體的に、先天的に、はた後天的に、何一つとして、其の優れさせ給へる點を承け嗣がざりき。父上は丈高うして肩聳ね、清癯仙鶴の如く在しき。父上は涙脆き情の人ならずて、寧ろ嚴格にして物に動じ給はぬ性の、意志はた極めて強く在しき。されば、その學に志し給ひて、まづ數學が自らの短所なるを悟り給ひし折とかや、殆んど寢ねずして、其學に拮据すること五週間に足らざるに、早くも級數、求積、代數、幾何の奥義を窮められて、好成績、優に專門教師を瞠惹たらしめしといふに、こ

れ徴するも以て、いかに卿が精力と意志の強かりしかは、なほ以て大方に察し得らるべきか。かくてその紀念として遺されたる、その折の苦心の痕＝數學の冊子は、身と等しく書笥の上に積まれつ。己れ由來、頭腦疎くして心計の事に拙し、いたくそを嘆かれし母上の、己れを刺激すべき材料として、つねに携へ出でゝ示さるるものは、必らずや此等の冊子ならずはあらざりき。

父上は漢詩を作し給ひき、讀書に耽けられたまひき。取り分けて史籍にありて、異常の嗜好を有し給ひにき。父上はた、いたく酒を嗜まれき、醉に興ずる折々には、聲高に漢詩吟み、古今興亡盛衰の跡を論ひ給ふなりき。われやなほ記す、茅檐を叩き、雪濤を捲き、立ち木と草とをひたに殺らすなる、嵐の羽吹き激しき北日本海の冬よ。窶れたる面輪を炬燵に頰杖されて、餌覘ふ鷹よりも烱たる瞳子の、『二十二史劄記』の上、深く注がれたりしを。醫師の諫め止むる

こと、いと苦ろなるを事としもし給はで、著述の業に精神籠め給ひしことを。かくて節を過ぐる飲酒と勉學の齒は、さらでだに羸弱せし、卿が身心を嚙むことやゝに。哀れ若草萌ゑ出る彌生は廿一日、明星光り一つ一つにかすれ行く曉や、杳然たる靈魂、冷ゑたる肉體を游離し、聖なる帝鄉に向つて、永久に旅立ち給ふ、哀しからずや。われや盃を手にせず、寧ろ酒腥にすら醉を感ずるなり。わが身病を知らず、老いたる樫よりもなほ健かなり、みなこれ絶ゑて父上に似ざるものから、よしや愁ひに健やかなることの、かの鋏人の如しともあれ、才拙くて智乏しき輩の、百歳生くるとて世に何の益かは。紅葉と紛ふなる熱血をば、開ける書の上に噴きて、圖書の堆裏に生を抛たんこと、わが父上の如くありてこそ、中々に學者到底の本分なり、高き譽れなるべしとか聞ける者を。いま己れ、かゝる父上の子と生れ出でて、其半ばなる精力をも得有たず、其の聰明の、いく

ばくを稟け得ぬ甲斐なさよ。あゝ父上子を生んで徒らに豚犬、われや自ら己れを悲み、己れを儚なみ、顧みて父上を悲まざることを得じ、咳。父上の性は嚴霜烈日、殆んど近づくべからざるものあり、不義を惡むこと、蛇蝎より太だしうして、面り人の非を責むる、敢て一歩を假し給ふことなかりき。さるからに到る所に衝突を賚らし給ふと共に、いくばくか狹隘に趨き、株守の弊に傾くことは、蓋しかゝる人の徑路にありて、遂に免るべからぬ自然の勢なりけらし。

「もし渠にして、更にいくばくの包容の量あり、些の謙讓の德あらしめば、更に高き地位に達し得たりけむものを」、こはこれ亡き父上と仲好かりし、友なにかしの評語なりとか聞く。然り、父上甘んじて、其の言を受けざるを得じ。

書窓の人を以て生き、書窓の人を以て死す、父上の一生はこれなりき。到底これ浮世の俗才、李と混じ、張と和することを能はざるも

のなりき。悠々として自ら高うし、察々として自ら清うす、遂にこれ汝々の世間に混ずべく、餘りに其心頑なるものなりき。渠は逝きぬ。富まずして、容れられずして、榮ねずして渠は逝ぬ。あゝ祝鮀の佞、宋朝の美、なほ世に處する難しと孔夫子は嘆せり。さらばかつて佞ならず、かつて美ならず、突兀として棒の如く、榮ねずして逝き玉ひにし父上は愚乎。痴乎。或は痴なるべし、或は愚なるべし、しかも愚なる父上の愚なる子は、即ち叫ぶ、これ何たる譽れぞと。夫れ父の心、子たゞこれを享くれば足り、一家の事、家人自ら治むるに足る、他人圜り視て垣牆に呶々するも、そも予等にありて何の關する所ぞ、あゝ父上斯の如くにして逝く、兒、われや、卿が爲に悔いじ。恐らくは父上、また自らに滿足して、毫も生前に悔ゆる所のものなかるべし。あゝ父上、美なる一家の遺法を以て、已に業に予れに垂るゝしかく美なり。然り示す所、富や何するもの、世上の

榮はた胡爲るものぞ。兒や愚なりと雖、希くは夙夜に黽勉して、卿が示す所に怍はざらんを期す、阿父よ、靈あらば庶幾は安んぜよ。

わが六歳のいはけなき折、早くも天に上り給ひし父上より、若しわが、何等か少しく得る所ありしならば、そは時と移り能はず、餘りに株守的なる我が頭腦と、及び史癖あるこの二つの點ならむのみ。實にや其服侍の時間を、より多く母上の膝下に費したりしわれは、其のすべてに於て、母上より受取れる所の、極めて多きを辭み得ざりし。

母系のいづくより引かれたるかは、われ素より知らず。たゞ母上の阿父なる人は、東都の町醫なりしといふこと。其邸もと築地にあり て、其の人となり頗る豪放、而して任俠、慈姑の取手に黄八丈の小袖、幇間に似たる當時の醫師たらんには、餘りに硬骨に過たりしこと。異母兄妹の三人を遺して、一朝急なる板築に身逝られしが、其

兄妹の一人は母上なりしてふこと。明治の初年、江戸城燒拂の風聞あり、市民荷擔して立ち、道塗鼎の沸くが如く騷げる時、母上も等しく難を避けて、心安からぬ東下りせられ、遠く東北の親戚に身を寄せられしこと。其後縁りありて父上に嫁ぎ給ひしが、東都は直ちに干戈の擾亂を經て、參商百里、一族のいま何處にあるやを詳らかにせざること。兄上が父上の箕裘嗣がれたる後、われをして母系を冒さしむべく、父上と兼ねて定め置かれしこと。江戸の佳節に於ける御殿女中の、いかに華麗なる裝せしかといふこと。母上が幼くて、一分二分の小遣錢をば、わが祖父なるべき人より頂戴さるゝやがて、直ちに草艸紙屋の塵頭に就きて、『八犬傳』『自雷也』など、新版の草艸紙を購ふを例とせられしこと。母上を透して、わが智識に收め得たる、母上一家に關する消息は、大抵斯の如きに過ぎざりき。

それよ玉霰板屋を撲ちて、冬ぞ淋しき山里の、人目も草もうら枯

れし遠里小野には、狐啼くなる冬の初更よ。縫針持つ手、しばし止められし母上の、炬燵に温かきわれ等を顧み、やがて懐ひ出る古き昔を、悠然に語り出で玉ふことの、これぞ日ごろの鬱拂ふべく、いかに深き慰めの、その唯一の術なりしぞよ。髪綠りなりし乙女子の、空想の夢に醉ひたりけん、覺束なかりしその俤。いま新たに想に活きては、初春の輝き、麗なる眼眸に含まれ、若き血の色焚ねんばかりに、その窶れたる頰の上に漂ふ。

夫れよ青年凌宵の意氣、磊落なり、不羈なり、常住定かならざりし父上を掖けて、二九に家を成し給ひつる母上よ。世に運命の轍、軌りは常に常なくて、三十路を踰ゆるいくばくならで、鰥羽早く孤となり給ひつ。客土の家を鬻き、幼なきわれ等の二人を伴なひ、降り積む雪の關山超にて、もとの故郷の山川に、細き煙颺げられしより、薄倖の雲、たゞ十重二十重、いかに繁くいかに隙なく、か細き

おん身を取り圍みたりしぞよ。男鳩の後に立ち添ひて、物おびねしたりけんあゝかなる女鴿は、今し枯葉より脆き翼鼓いて、千里の杳冥を衝かねばならずなりぬ。爪は刄なす老鷲と列並めて、砂子飛ばす長風に、其力を競はずならねばなりぬ。

收入と呼ぶべきは、小作せる幾頃の田畝よりなく、何等の儲蓄とてもなかりし一家の經濟は、たとひば一緡の青錢をも、すべて母上が工夫に待ち出でざるを得ざりき。かくして一家の主婦たりし母上の、内にありては親切なる保姆、節儉なる家政家、勤勉なる下婢、精力卓絶せる勞働者として。外にありては、國家の一國民として、社交の一主人として、身體に精神に、球の如く絶ゑ間なく、廻轉せざる可らざりしはこの時なり。日に日に傾き行くなる、崚嶒たる家道を障ゑ得て、八年一日の如かりし、あゝ母上が德と劬勞も、また思へば偉なりしかな、仰げば大なりしかな、崇かりしかな。

かゝるとき、戛然たる一道の活火、母上の御胸に焔せしものは、たゞ祖父君より承け得給ひし雄々し魂よ。かの女は自ら鍬を執りぬ、藍を植ゑぬ、小麥を植ゑぬ、大根を、茄子を、胡瓜を種えぬ、自ら機織りぬ、自ら紡ぎぬ、自ら桑を摘みて蠶を養ひぬ、藍は製して糸を染むべく、小麥は以て大麥と換ゆべし。更に裁縫の道敎ふべく、子女を集ひぬ。しかして自らは、また縫針を取りて、他の爲に裁縫の事をなし玉ふなりき、唯一の手助けとしては、采掃と烹炊の事を、姉上が司り給ふ間に、われには讀書と習字とを敎へ給ふなりき。

それ男子、心と胸の寛く裕かなる、春の海のひねもすのたりのたりたるは、到底これ、これを女子に望み得べくもあらず。ましてや「勝ち氣」なるを經とし、子曰くの道德主義＝嚴格は霜威よりも凛たるを緯としたる、女性母上の如きに於てをや。かの女が、一家を攝むる主人公として、其始めて社會に面りしたる時や、まづ看取し、肝

に銘刻したりけん觀念の最初のもの、即ち曰く、「世の男子、何ぞ女性の弱きを輕侮するかくも酷なるや」。二のものに曰く、「われ一個の女性といへども、いかで一歩をかれ男子の輩に讓らむや」。かくして其神經は、毛程の微かなる顫動にも、容易く感ぜらるべきが如く、恐ろしきまで神經質になりぬ。はた女性には通有性なる、その狹隘き見聞と偏見とは、漸く世間の一切を擧げて、不信と疑惑の下に措く可くなりぬ。夫れ水到りて而して渠成る。これもまた自然の徑路にはあらざりしか。

われ學校の歸り路、一帖の墨を遺失せしとあり、百方に搜り索めて、つひに索め得ず。母上謂へらく、敎師が監督の方、大に到らざるものあればなりと、直さまに師かり訪はれて、其不行屈（？）を論はれしことありしを我は知れり。師後に曰く『卿の阿母は恐ろしいよ』と、我爲に赧然。一醉漢の近き傍のものなるが、夕暮、わが家を訪

へるとありし時、母上の出でられて、儀容正しく、聲すがすがしく、瓜田に屐を容れず、李下に冠を正さず、婦人の家、何時にも男子の訪問を煩はさじと、叱責し玉ひしことありしを我は見たり。里人は寧ろ母上を憚りき、畏れき、げにや母上の勝ち氣は、其極度に走れりき。女性にふさはしからずの風評さへ、折々にはわれ等が耳に上るものから、われ爲に、辯ずべき一言の辭を有せざりき、あゝこれ寧ろ、世間が迫りて然らしめたるにあらざりけんか。われ等たゞ、母上が健氣なりしに泣くのみ。

「親なき子とて卑まれじ。」これ母上がわれ等に對する、鞠育の大法條なりき。「太凡婦女の性、情に脆くして涙多し、子を育するの道を、動もすれば、愚痴に誤りて、他日其子の放縱なり、悖戻なるを見て、始めて老の涙に暮るゝ也、卿等幸なく、夙に父上を亡ひぬれば、妾代りて鞠育の任に當りぬ、われ今卿等を薫陶して、婦女の手に長せ

し痕を存せしめ、父なき故ぞと嘲らしめば、地下何の顏ありて、卿等が父君に見えんや」と、即ち賢なれ、智なれ、直かれ、從順なれ、陋しからざれ、他に劣らざれとは、われ等を教訓さるゝに於て、御胸に描ける綱目なりき。渠女が此の理想を實行せん爲には、あらゆる苦心、あらゆる手段を用ゐぬ。あゝ其の訓戒の、想へばいかに鋭かりしよ、其體罰のいかに激しかりしよ。手を以て口に續ぎ、手は以て打ち物に更りぬ。『卿等何故に、わが言のしかく守り難かるべきか、かくまで思ひ量る我心根の、何故にかくまで、御身等が理解に入らざるべきか』。かくの給ひては、深き深き溜息し玉ひつ、熱き涙はら〳〵と滾るゝ眸、凝れるばかりに、じつとわれ等を見詰めらる御眼ざしの、今なほ髣髴として、我瞳子の裏に現はれ浮ぶよ。今にしてそを思ひ偲ぶ、其御涙一滴の尊とかるは、かの尺徑の眞珠よりも。悲しきは血に啼く死出の田長の、腸を斷つべう夫れに似たる

を、今にして憶ひ悟るあれど、あゝ母上よ赦したまはれ、和田津海よりも深き、卿が情の底を掬むべく、當時のわが智識、分別は餘りに淺かりし也、狹かりし也。そを量らんには、わが心餘りに無感覺なりしなれば＝然り、われはそれ等を成すべく、餘りに稚けなかりしものを。

われは賢かりしか、智慧ありしか、目より鼻へ抜くるの才ありしか。もと天稟なるべきこれ等の東西は、寧ろわが有すべき質にあらざりし。はた有つべく、羨むべしとせるものにあらざりき。

陋しからざりしか、他に劣らざりしか、然り、紀元節の祝賀式に、二子新裁の羽織着て、村一番の豪家の子を驚かせしわれの、また精神の上に於て、よしや左程に優らずとも、また左程劣れるもの、卑きものとは覺えざりし。衆兒童が、豪家某氏の寵兒の往き交ふ跡を、影の如くに追隨しては、木の實、菓子などを賚ふを榮とせるを、わ

れ見て卑しとせる程に。はた父母の命令をも顧ず、爲すべき業をも爲さずして、一日を遊び暮すなる村童のある者を惡みしほどに、わが道德的觀念に宿れる標の的は、學の友なにがし、くれがしに較べて、左程劣れるものとは覺にざりし。純朴にして禮義に嫻はず、偏僻性を爲せる里人の、貌荒くつけくして、言角立てるが中に、獨りおのれのみを側ち見て、姓名を呼び棄てせざりし如、級中にありても、われは太だ下位にあるものに非りし。

さらば順從なりしか。わが順從は、寧ろ卑屈と名づくべかりしの、或ひは適當なるものなりしならむ。姉上は意志強く、決斷早きを母上より承けて、事に望んで動かぬ、男々しき婦人にて在す。婦人よりも、心容易く搖かされ易きわれは、此の點に於ても、いたく愧ぢざるべからざるものありて存するなり。

さらば直かりしか、然り……、直かり……、いな、答ふるの半、

われ忸怩として、紅潮の自ら面を衝いて上るを抑へ能はじ。われは世に例多き、田舎の多くの村童の如く、他し人の果園に入りて、紅熟の木の實を竊み取らざりき。主人が朝夕に丹情籠めし、他し花庭の芳葩を摘み棄てざりき。さもあらばあれ、白を黑となし、紫の朱を奪ふ、虚言はより大なる罪惡にあらざりしか。

世に人の佯るものを以て、直ちにひとしなみに、大膽なる者の仕業かの如く呼ぶ。然り、渠れ恐らくは大膽なるべし。さはれ人に良心あり、道德の觀念を懷けるとき、孰れか多大なる苦痛、良心の苛責を耐ゑ忍んで、道德の罪惡を犯すべく、なほしかく勇なるものぞ。われは想ふなり、佯りの二葉たるや。極めて憐れむべく、はた同情すべきものならざるかと。少なくともわが場合、確かに夫れなりき。人よ試に想へ、性餘りに怯懦なり、餘りに卑屈なるもの、而して體罰を恐るゝこと、形なき幽鬼を恐るゝよりも、なほ怖ぢ懼るゝものが、

無心にして失錯をなし遂げたる其刹那を。その心象に起る、混亂のそもいかなる者かを。

風の扉を叩くに似て、而も聲なく念頭に浮び來るものは、先づ夫れ體罰の印象なるべきか、あゝ謬りなき寸歩の前に、恐るべき係締を張りて、餌食を俟てる體罰よ。かれ惡魔、錯れる小兒の前に、常に其の鋭き爪を磨ぐ、一躍して其犧牲を握むに於て、動機の故意なると否とを差別するなき也。あゝ戰慄すべき體罰よ。われ今いかにして、その來襲より脱る可き乎、百方に思慮を廻らして、漸くに見出したるたゞ一條の逃路、曰く、虚言！

たとへば一歩、また一歩、再び歸來す可らずに、正義の大路より逸したりともあれ、鹿を追ふものは山を見ず、道を擇ばずしてひた走れる、心弱く氣怯ぢたるわが如き者が、いつしかかゝる裏徑、樵の徑に迷ひ入れることの、果して大いに罪すべきものあるか、恐く

はあらじ。

村を離れたる一里、一小驛あり、桑谷と呼ぶ。われ一日、母上に代りて、そこを見舞ふべく起りたるとあり、さて巷に入りぬ、ある雜貨店頭に立ちつ。繪を描くべく、繪を彩る可く、太だしき嗜好を有せし予の、店頭うるはしく列を爲せる、インキの種々なるに瞥見を執りし時、われはは や、左右の考もなく、賚せる囊裡に、我掌は落ちたるなりき。かくてインキの紫と赤との二色は擇び取られしなりき。この刹那よ。われ愕然たり、われはわが感に歸りし也。あゝこれ、母上が衣縫ふべき爲の、絹糸購ふべき代にはあらざりしか。わが四肢悚然たり、自らに慄ひ戰くを覺ゑつ、さはれ其覺醒はあまりに遲かりし。事のありやうを陳べ盡して、估價の返還を店主に請ふ可きか、性餘りに羞澁なりし予の、そは遂によくし得可きものにあらず、さらば……、あゝさらば、いかにしてか都合よく、母上を

糊塗しまつる可きぞ、一里の長途の熟考は、當時のわれには、極めて巧みなる、恐るべき決斷と政策とを與へたりし也。

やがて家門に達せし予れは、まづ極めて敏捷に、手にせるインキ壺を取りて、椽の下にと押し隱しつ。さて何喰はぬ顏して。

『母上よ、兒は今こそ歸りにたれ』。

『いかにこの日中を、遙けき途を、嘸や暑かりけむ、咽も渴ゐけむを、汗も夥しかりけむを。さらんとて、新しき、冷たき水も汲みてあり、まづ衣を脫ぎて水に浴み、さて飯を認めてよ』。

『いなとよ母上、稻田さわたる風のいかに涼しかりし、小川の汀には、釣人の笠影さへ多かりけるを、左程に暑しとも覺ねざりし。ただ母上よ。兒がいたく愚なり、用意なきと仕出したるを恕し給へ、われは糸購ふべく賚らしたる、其の幾ばく錢をば、いづくにか遺失したりけるものを』。

『さるか、さらばいたくな悲みぞ。失せたる東西を悔めりとて、そは何の効かあらむ。糸は村のなにがしが舗にもあるべきを。さて兒よ、たゞ心して忘るべからぬことあり、凡そ人は、大事に注意せんことの肝要なる如く、またいかんの些やかなる事をも、輕々しく等閑に見捨てざらんことこれ也。凡そこれ等の事は、世に成り出でん程の人の、屹と心得では叶はぬ事なるぞかし』。

『心得たり、母上よ、兒はこれより、誓つて御訓を忘るゝことなかるべし、心安んじ給へ』。

流石に子供心のわれは、滿腔の滿足と誇りを包まんには、餘りに心弱かりしよ。折しも友どちの訪ひ來るに遭ひつ、椽の下なるインキ、窮やかに取り出でて、卿のはわれのより色わるかり、價も廉かり、容量も尠なかりなど、誇りの鼻うごめかすを、目快くも認め給ひしは、奥の間に、ものゝ書繇き給へる母上なり。

『之はいづくより、いかにしてか獲來れるぞ』。

『こは友なるなにがしの君のなり』。

『な僞りそ我が兒、おん身は女性の親と侮り、斯くまでも妾を蔑ろにし、かくも妾を欺むき、盲目のものとし輕しむるよな。思ふに一時の曇に、嚢中のもの失ひしと謝しつるもの、いかでこれ等の代となりたるならでやは……あゝ思へば、おん身の心は、何とて斯までうたてく、情けなくなれるぞや。思へ、卿が欲しと願ひし程のもの、われたゞの一度とて、能はずと拒みしことやありける、はた卿が欲りするほどのもの、購ひやらぬ不慈の母とや思ふ。……

……おん身いかに穉なしとて、またく分別なき嬰兒にもあらぬべきを、忘れもすまじ汝が姉上の、明日校を退かんとせしその前つ夜を。なが姉上は學ぶことを好めり、はた校の成蹟とて、決して拙しとは云ふ可らず。さては日に日に開け行く世の、この文明の世の

樣を、身は女子として古とは異る、いかで學びの道、忽せにすべきに非ず、もしわがか弱き腕もて、おん身等二人が學びの資を、いかにしてか支ふべき術あらば、せめては高等小學を卒へんまでも、姉上を校に止めたかりし、思へどもなまよみの甲斐なしや、なが姉上、つひに校を退かれたり、いな、妾熱鐵を呑む思ひして、姉上に校を退かせぬ。その夜、その事の悲しとて、姉上も泣きゝ、卿も泣きゝ、妾も泣きし……。

姉上はかくの如かり。たゞ獨り、おん身獨りに不自由思はざらしめん爲にこそ、姉上も犧牲となれるなれ。妾もまた、女の手一つの苦しき中を、七重また八重に繰合せて、御身が爲としあれば、身分不相應の品にてさへ、隨分と整へ遣りけるなれ。みな夢にもかく許り、空恐しき、さもしき心起さしめんとの、そがとてしたりけんや。黃金は千鎰とも露惜からず、怨めしきは一人の親の眼を掠めて、

曲事爲さんずる其心根にこそあれ……』。

矢庭二つの壺、母上が掌にありと見る間、流星の如く空を飛んで、發止とばかり、庭もせに稚なき桃一樹の、幹のあたりに誤またず中れば、玻璃の壺は、脆くも千片百片に碎けつ、幹は浴るや紅紫の瀧津瀨、宛らに蠻人の血にも似て、淋漓として滴るなりき。

友は辭ひぬ、われは泣きぬ、母上も泣き給ひぬ。

* * * * *

われ豈蘇張の舌を鼓して、敢てわが非を文るべしとなさんや。なほ世の詐る者の間には、そこに幾何か同情すべき點あり、憐れむべき點が存すべきものたる知る。なほかつ、わが此の事例に至りては、われつひに何等の辭、こを辯ずべきあるかを知らず。これ迫られたるにあらずして、自らの行ひ非なるなれば也。餘義なくされたるにあらざれば也。なほ且つ、佯りに訓れし習慣は、更に人の惡德を助

け長じて、惡德の惡を二重にする也。いな、罪の容すべきもの、憐れむべきものをば悉く除き去りて、眞の罪のみに凝れる人となさしむるなり。思へば其の惟ふべきは、まさに其の一歩のほゞにある哉。

雨や雲となる、雲や雨となる、いづれか先、いづれか後、われや得知らず。たゞわれ想ふ、小兒が心の瑕と、目上なる人の制裁とを比ぶる、猶足を繫げる係蹄の繩の、挽搔くに從ふて緊しさいや勝る、それに似たることなきかを。げにや只菅に、嚴しきのみなる制裁の鞭は、小兒が心の疵癒すべくもあらで、中々にそを爛かし、はた潰ねしむべき爲の、劇しき毒藥たるものならめ。

いさゝ叢竹そよぐところ、水馬文字かく里の小川、いかで自らにして濁るものならむや、牛羊これを飲み、これに浴みてこそ、始めて濁るものなりけれ。世の僞りの源、おほ方心弱き人の胸に泉む。かれ實に佯るべく餘義なくされたれば也。また憐れむ可らずや。古

き聖者は云ふなり、「われ其罪を惡んで其人を惡まず」と。われはある場合に於て、かくぞ云はむとす。「われは其人を惡まぬ如、また其罪を惡まず」と。單に其外面のみ觀じて、責むべく刻なる、壇に道說く人の心、いたく忍べりな。われ他し人か、訓の庭の餘りに嚴なりしより、心邪み情の根枯れて、光りなき世の闇に立迷ふもの見る毎、同情の涙、思はず偃き合へずはあらざる也。

われや何の幸、それより後やう〳〵に聖の書をも讀みぬ。直しきものは心つねに寛けく、歪めるもの心つねに痛める、活きたる多くの事例をも視つ、かくして甲乙を較べ、彼此を考へ、人の道の、必ずや正しからざる可らざる所以を悟りぬ。此の信、一たび立てり、わが心莚にあらず、捲く可らず、石にあらず、はや轉ばす可らず、あはれ母上の御靈よ、天に在さば、庶幾くは現世なる、孤なる兒の懺悔を赦し、搖がざるべき決心の、固き誓をも聞き給はれかし。あ

あ禍福はなにか、貧富なにか、よしや兒の性、兀突棒の如く、東西に漂浪して、遂に世に容れられざりとも、われや直く、われや主持を全うして、溝壑に陷り死す、抑も何の悔い憾む所ぞも。かくてこれやがて、母上の嘉し玉ふ所ならずやは。

＊　＊　＊　＊

伸びたるものは、いつか縮まざる可らず、張りたるものは、つひに弛ばざる可らず。爭で劣らじ、やはか侮られじの矢竹心、たゞ自我を專念として、一筋に張り詰めたりし母上が、絶間なき戒心と苦痛とは、何等か和ぐべく、慰めらるべきものなくて、長へに續き了ふすべき理なかりき。

婦女の酒に酬する、世に指彈きすべき一つと數へたるもの、已に双が岡の法師あり。われは男子、なほ世の男子の盃を銜むを嫌ふ、まして女性のさるべきをや。たゞ獨り母上に置いてのみ、取り別け

てある恩典あるべきを思ふ也。ありて存せざる可らざるを、主張して俺まざるもの也。あゝかの女、よしや其の面には、力めて冷酷の衣裝ふとも、内に焚ゆる感情の、乃より鋭き母上なり。想へ、中夜もの皆靜かにして、萬籟眠の床に就きたる比、獨り攪めて、徐ろにわが周圍を思ひ、世間を思ひ繞らす、かの女の心そもいかにと。俄かに記臆の褥より攪めて、無情の齒牙を剝き出すものは、先づ日中の侮蔑なるべきなり、嘲罵ならざるべからざるなり、あゝうたてき世、苦しき世、この情無の世に生きて、さて便なくあぢきなく、かゝ弱きわが身の末はいかならむ、われはなほ忍ぶべし、兒等が行末はそもいかにと。思ひ辿る、心は千々に亂れ糸の、懊惱、煩悶、憤恚、悲哀交も潮來して、小さき胸はほと〳〵搔き搗らるべう、目は眩み頭は疼み、たゞ願はくはこの儘に、常世の眠に就かなむ唧ちなかりけむや。死出の山路の時鳥、血をも吐かなん、胸も張り裂けなむ、

苦衷と憂憤との慰め求めて、即ちかの酒盃に走る、獨り母上にありてのみ、萬已むを得ざるの逕にはあらざるか。あゝ忘れても掬みやすまじな、高野の奥の玉川の、毒ある流れと知り乍ら、猶渇にては掬ぶを堪へぬ、旅人の心、また憐れむ可き也。あゝ融陶たり一杯の天地、「寐る間のみ人にかはらぬ思ひ出を、浮世にかへす曉の鐘」母上たるの衷心、また悲しからずや。

さらに好み給ひしは、物語小説の類なりし。げにや凛たり、霜にもめけぬ水仙花の姿をば、母上其れを、かの封建武士の俤ある、わが祖父上に承け得られつ、さはれまた其の中に、しとゞの雨に伏し惱む、萩、野菊のしをらしき、やさしき情を包まれざるに非らず、この情これを、稗史の上に寄せ給ふなりき。想ふ、春はどんよりと花曇りの彌生月の眞晝を、一もと若木の薄紅梅、一葩また一葩、しづ心なく散り舞ふ、庭の面の長閑けさはいかなりし。南向きの小障

子押し開けて、裁縫の暇に繙き給ひし、『源氏』の上にはらはらと落ちて、心なく朱を點ずる落花の心、風情ありしかな。『源氏』は木版の、小形なる青表紙にして、句讀なき總平假名、力なき古風の繪を挿みたるが、簞笥の上に堆く、凡て六七十冊ばかりか積み置かれし。幼なかりしわれ、たゞ何ともわく由なくて、世にも興なき書籍もあるものかなと思ふなりき。

後には、自ら小説讀まるゝ暇なければ、己が校よりの歸りを待ち、其裁ち縫ひ給ふ膝の邊に、讀まし給ふことの常なりし。されば、さらでだに多少の嗜好ありしわれの、ます〳〵稗史を好く樣になりて、殆んど食さへ忘るゝ程なりし。校より歸るや、まづ今日の日課を複習し、明日のを豫習し了るも遲しや、讀み懸けの稗史携ひ出でつ、「いづくよりなりけん」とは、母上よりか、われよりか、必ず誤またず、提出さるべき言葉なりしか。さるからに、われ頻りに探り

究めて、それ藏する者ありとだに聞けば、一里二里を遠しとせず、借るべく之を訪ふを避けざりき。げにや其頃の小說てふは、上田屋、兎屋などの出版ものゝ、多くは馬糞紙のクロース製にて、表畫は雜なり、釘裝も極めて粗なるもの、若夫れ今日の東都にては、四谷、麻布邊の繼樓屋の店頭、わづかに其一二冊を見懸くべき外、露店にすら、をさをさ影を收めたる代物なりしぞかし、われは『太閤記』を讀みぬ、『水滸傳』を讀みぬ、『天草軍記』より『岩見武勇傳』より『雙蝶記』の京傳より、『八犬傳』の馬琴より、『飛驒の匠』の六樹園より、『太平記』の古きより、『明治太平記』『島田一郎春雨日記』なんどの新しきまで、凡そ見廻す眼に當り、搔きま探る手に當る、稗史といふ稗史は、何くれとなく殆んど讀盡しぬ。やがてわれは、村に類なき小說博士として。はた物語聞くべく好む、一部下級兒童よりの、物語りのオーソリテーとして推され、はた仰ぎ瞻らるゝなりき。さ

はれかくの如く、放棄後の時間、日暮の時間の多くを以て、樂みを村童と相結び能はざりしわれは、また種々の戸外遊戯と共に、自ら絶緣せざるを得ざりき。

母上が慰藉の最後のもの、しかして其慰藉たるべき目的の最後のものは、實に家庭そこに存せずはあらざりし。父なき子とて甘からしむ可らずとは、泣を忍んでわれ等が心に荊し、われ等が頭に鞭したりけん、嚴なる薫陶の動機なる如。「片親なる子のいかに憐れむべきぞ」とは、あらゆる幸福と、自由と、美德とを得せしめんが爲に、食を割いて予へ、衣を脫して掩ふべく、耐へ得可らぬ凡てにも、齒を食ひしばりて耐ゐられし、慈愛なる愛撫の觀念なりしよ。

兒童が幼時の中心は家庭なり、「過去」なる懷古の眞核は、常に故鄕ならざる可らず、我やたとはゞ、碧落を渡る黃雲一ひらの、飄搖としてたゞ跡も無き、世に漂遊のその身なり。目を擧ぐれば江山の

異るありて、楚囚の思ひいと切なる夕、想ひは綿々たり、蠶兒の糸と長く、つひに追臆の緒を繰りて、稚くて棲みけんわが家庭の、あり し面影に歸らずんばあらざる也。

小指を折り僂ひつ、もういくつ寢れば鎭守の祭りかなど、寢覺の床に其日を待ち兼ねたりしが。僂ふる中にも烏兎は飛んで、久しくもありしかな、八とせを棲み老いしわが故鄕の家はよ。

西隣りは大工にて久助といふなり、職としては、さほど巧妙の譽れなかりしものゝ、たゞ實直をもて名高きなりき。鋸屑や鉋屑や、堆く散ばれる工場訪ふては、われ益なき木切れを貰ひ來り、積みては崩し、崩してはまた積み直すことの、宛らなる今日此頃の、わが空想にも似たりしか、あゝ儚なき樂しみ、ありのすさびの手すさびも、今は中々になつかしく、夏草の繁き思ひ出の種なるかな。

樂天的なりしかの大工の、狂ひて逝きしを聞けるは、暫らく後の

事なり、何等の緣故よりなりけん、われは得知らず。家も搖り動く笑ひ聲の、いまなほわが耳に印せるに！。

勤勉にて無口なる、緊れる小さき體と、熱日に鍛へたる鳶色の膚とを有てる、農夫常藏氏の小屋は東隣りなりき。渠れはもとよりよく働きき、渠れが妻も働きき、渠れが娘も働きき、都ならば玉や敷かめ。天さがる鄙のことにしあれば、四時に藁をもて厚く敷かれたる常藏氏が廣庭は、いかにわれ等に恰好なる、自然の土俵を作りたりしぞ。渠れが二人の男の子は、膂力厭くまで強く、骨節厭くまで太かり、膚は鳶色の光澤よきなど、みなこれ恐らくはかれらが父祖より、直接には乃父よりの遺傳なるべし。其力强きを利用せるわれの、わが年長と書を敎ふる、權力とを振舞して、わが羽子作らん爲に羽を抽くべく、其家の鶩、鷄など追ひ廻すべく、いく度渠等二人の子を餘義なくしけむ。

家後にさゝやかなる畑と藪だゝみとを隔てゝ、良雄君の家に接せり。良雄君は倔強なる壯佼なりき、今は國家に干城たる身の、砲烟の夢、いまいづべの野山に迷ふらむ。其母は恐しく叫び立てゝ、其子等を叱すること絶間なかりき。其父は酒色の巷に流連して、家道を顧みざること多かりき。

良雄君が家の奥の間には、一隻の張交せ屏風ありき、煤け黑みたる、平家一族を畫きたる錦繪を貼したる。知盛の面は蒼白く、敎經のは渥丹の如かりき。つぶ〳〵と肥太りたる惡入道、大入道は淸盛ならずや。涅齒畫黛、史に傳ふるやうの美少年は、靑葉の笛の音と名も高き敦盛ならずや、經盛、維盛、重盛、宗盛、さても平家の一族に、「盛」の多きことぞなど常に思ひてき。

前の家は、伯樂とか云ふなる、馬賣買する商人を宿りさする、きくと呼べる老夫人のそれなりき。呉莚てふもの肩より斜に懸けて、

片尻端折れる伯樂とかいふ類の、日夜に出入するを、われ日夜に馴れて見るなりき。喚きのゝじる聲いとだみて、ひとへに破鐘を叩くが如かり、耳掩ふべく、快からぬ會話さへ稀ならず洩れ來。かの女は男勝りと呼ばれて、好める夫を撰擇すべく、自由なる權力ありとさへ傳へられつ。げにや今日のかの女の夫、そは明日のものに非りき。かくしてかの女は、渠女一箇ともなく、夫婦が保てる家ともなく、貧しきがまゝに、たゞ盃盤狼藉たる破屋の、其日その日を暮し行くなりけり。おもふに其胸の中には、何等か一種の、面白き哲學觀をしも藏め得たるものなりけめ。

一條の小渠と一條の通路とは、自然に大路の境を劃りて、わが家は其中に立てりき。兄上在さぬ後の我が家は、單なる三人が棲まはむには、餘りに廣きに過ぎたるものなりき。さらでだに臆病なるわれの、夜を廚に行くすらも、蠟燭の力を要せざるを得ず、便所まで

にすら、棍棒なしに往き能はざりしよ。平和なる村には、雨戸の準備とてもなく、霄々ごとの月の光り、障子越しにわれ等が寢顔を覗くめり。小さき前庭の籬笆には、ぬかごと朝顔の蔓と、たゞ一面に這ひ纏はりつ、箒の痕つねに漣を畫いて、一莖の醜草なき地の上には、秋、霜月、葎に虫の音も弱りて、秋老いまさる末枯れを、白菊黄菊たわゝに咲き亂れ、十一月、紅ゐなるなるてんの實、霜を帶びて天上の星と輝く。秋海棠はうち萎れ、細菊所狹げに、いたる所に領土を廣げて、ひそかに種族の繁榮を跨るに似たりし。かなたの梅の稚樹は、始めて二つ三つ實りたるを、笊に入れて携へ廻り、他日の累々を祝したりしものよ。笆を隔てゝ畑、畑の中に大いなる桑の老樹よ、その堆き叢こそは、如意金箍棒とわれ自ら名づけたりし、黍稈の棍棒打ち揮ふて、こゝに朝比奈の大力受けても見よや、哀れむべき赤蛙の大殺戮を行ひしところよ。

はろばろと蒼く澄みたる空の海に、波立てず駛る白銀の、一葉小舟にも似たらん孤雲の圍ゐよ。打ち返さぬ畑に、十六角豆の蔓、蛇の脱け殼と白う枯れぬ、たゞそのまゝに、打ち殘されたる蔓竹の、遠山の巔磨らんばかりに、秋の夕日にひよろりと立てるを、上に赤蜻蛉のすい〳〵と、羽打ち交して飛ぶを見ては、秋もはや末かと、いともの哀れに。門の側に老いたる柿の樹の、霜降ること日に繁くしては、枯れ葉名殘りなく墜ち盡しぬ。返り花咲く小春日和を、梢頭の熟柿、寒鴉の啄む見ては、遠山の巔白からんも、はや遠からじなと打詫びつ。

木槿、山梔子の小柴垣、家を繞りて其極まる所、門を前なる青桐一株あり、これ母上が他出し給ひし、月よく夜よき其夜の半を、巨人の掌に似たる其葉敷いて、姉上と御歸り待ち明したりしもの。やがてこれ、われらが鄕を辭ふの朝、婆娑たる一葉風なきに墜ちて、

會者必ず離るゝを告ぐるにかあらん、別れ惜むげなるを泣かしめたるものにあらざりしか。

東隣りを境して、大いなる栗の老樹あり、枝や梢や蓁々として、五月雨じほ〳〵と物淋しき夕暮を、白きそが花の聲なく墜つる、いかに幽なる景なるぞも。若し夫れ神無月の時雨降る頃を、長き夜の寢覺の床に枕を欹てゝ、栗子の枝を辭するを聞くいかに。一吹き風、颯と葉末をわたりて、雫とゝもにはら〳〵と散る、地を掩ふ獲物を想ひ浮べては、いかにわれをして、鷄鳴く、曉の遲きを恨ましめしぞや。

栗樹の下を距るわづかに數弓、小さき池あり、池の畔に杜若花咲けり、濃紫のなりき。門の後に小さき竹藪あり、箭柄竹多かりき。盜猫を射んが爲に、弓と矢とが作らるべく、はた軍ごつこの武器紙鐵砲が作られん爲に、鞭と旗竿とが製されん爲に、月に其幾百幹か

伐採らるゝべく、全き藪、殆んど禿ならんとしたるもいくたびぞや。

かゝるが中に、一家のアイドルたりしわれは、夜は燈の影にたゞちに眠り、朝暾庭の若葉に眩きまで起き出でず。いかれ樂しき日月を、この仙境の裏に送りたりしよ。さはれ母上逝き給へる今は、九垓と現世とを隔てぬれば、千とせ百とせ頭を翹げ、足を蹺たてゝまち望むとも、母上また歸り來まして、便りなき己れを慰め給はんよしとてもなみ、薺の如き深慈いづれの時に被らなむ、望みは燃ゆる炎の果なうも消えぬ、いざゝらば、われまた多くを云はざるべし。八年の昔一片の辭、よし辭や蕪にして詞は整はずもあれ、當時に印せる血の如き苦衷、いかで其一搦の痕なしといふべきや。

× × × ×

白雲を飛ばし木葉を捲きて秋風吹く、風に臨みて涙流るゝと古人も云ひけむ、秋風吹く時吾は何となく故山と一族とを想ふ也。想ひ

起す故山の風月、清楚なる秀巒はいづくの邊ぞ、晝夜混々く、故山の美を叫きつゝ走る清流はいまいかに。吾れや楚囚にあらね共、目を擧れば白雲迢々く、江山の異なるを見て、故郷の愈遠きを覺ぼゝゆる時、實にいふべからざる痛楚の情をば感ずる也。江山は異なり、鄕關は遠し、遮莫重疊の千山は攀ぢて又攀ぢ、長江の滾々には筏して渉らば、なほ懷しき其風月を見るべきよすがはあらむ、只ひとり我父上何くにいまし、我はらからはいづくにかある、幽冥道を隔つれば魂は奥土遠くして呼べども返らず、況んや今夏亦母上の、同じ道にと志さゝれて凄氣水の如く清風そよ吹く佛燈の邊、孤影朦朧たる一人とはなり給ふをや。秋風、秋風、吾いましを羨む、肌を劈くなる寒風は、脈々二十四番の魏紫姚紅を吹きて、暖かな竹春の風となり、綠蔭に萬斛の涼けさを送る夏の日より、木枯寒く瘦する身をさすりて冷かなる冬となる、かく四時に序あらば、其きはに生れ出し

人も亦然らざらむやは。盛ありて衰あり、枯ありて榮あり、歡樂極まりて哀情生ずるもの、人誰か然らざる。獨り我一家のみ然らざるなり。『埋れ木の花さく事もなかりしに身のなる果ぞ哀れなりける』とは實にや我一家を總合せし好題目なる哉。我先考は生れて次たりし身の、家に箕裘を嗣ぐの憂なかりしかば、荒阪片土師友に乏しきを慨かれつ、少壯劒書を擔ふて四方にさすらひ給ひ、京の東西を歷遊して諸名家の門を叩き、△△△△先生に師事して濂洛の學を修められき、醫士を以て家を起されしが、後匕を抛ちて敎の司となり給ひぬ。其性嚴格に在して權貴と雖一歩をかさず、漢學は其最長ずる所、兼て史籍に精通せられ、青樽は作詩と共にいたく嗜なみたまひき、字句は忘れたれど和氣清麿を咏せしものは、特に自ら得意の什と許されたまひしとぞ。われ今夏故郷に歸りて、親戚なる人の許に寓せし折、やれたる襖に題せられたる詩の、餘りに先考の手跡に似

たりしまゝ、問へば果して然りと答ふ、題は關山（羽後嶮道）の詩にて七言絶句、起承も亦忘却したれど、轉結は確に『魚貫而下魚貫下、前人脚在後人肩』と認められにし筆の跡にいとゞ昔の忍ばれて、特に堪難きものあり。又『國史摘註』となん呼ばれし、國史を編まれんものをと、參考の諸書をば机傍に山堆せられつ、旁引搜索到らざるなく、刻苦勵瘁精神を罩められしもの幾とせかありけむ。一朝肺のいたつきに床上呻吟の人となられて、略痰いよ〳〵劇しきに及び、くすしがいたく禁ずるをも耳にし給はず、寸刻も筆を廢されず在せしが、偶ま近隣俄然火を失ひし一夜、烈風之を煽りて延燒百戸に餘り、剩さへ我寓舍と、先考が主り給ひし鄉黌とは、哀れ咸陽の一炬、烏有の焦土と歸し了んぬ。この事、いかに先考が病憊せられたる御心に、一層の苦悶をば加へけむ、御病はこゝに革り、所は名に負ふ寒地とて、ふきすさぶ烏海風、ふりしきる雪霰れの、はら

はらと面を撲つ暗き夜半、門に立ち聲を枯して、按摩呼ばれし母上が心づくしも、徹宵睫を交えず、至らぬ隈なかりし看護も、悉く水の泡とはなりぬ。不幸なる母上と、己れ等姉弟と、滿身の熱血を瀝がれたる、國史摘註の未定稿を枕邊にして哀れ若草萠出る彌生の二十一日、あけの明星光微かなるとき、溘然たる靈魂、遠く彼帝鄉に向ひて旅立ち給ふ、想ひ回らせば、早十三の裘葛を經たる其昔にてありき。

是より先、——なる片土に嫁かれたる長姉は、呱々浮世の空氣を呼吸してより、幾旬もあらざる阿弟と先後して、長に天上に眠られぬ。我兄上は、天晴有爲俊爽の才を齎して、七年の昔東都に逝れ。曩に長姉の夫たりし其人は、皇國の爲、彼蠻奴と戰つて、草滋る臺灣原上の露となられぬとぞ。特に母上は二九にして嫁づき、疎放不羈、細事を省みざる先考を内に助けて、孜々たられしは物かは、兄上逝

かれし後の家計を、かよはき腕に支へられて、孤鸞獨棲十有三年、内には頑陋なる、吾等兄弟の二人をはぐくみ、外には近隣に、笑を貽さぐらむと勗めたる、其際の苦心はそもいか計に在せしぞ。且數年此方、力としもし杖ともせられし吾爲に、百里の遠きをも厭はれで、他家に獺睒の勞をとられぬる母上の、思ひきや、今一朝にして逝れんとは。吁子の生育と、そか反哺の孝とを、未だ百に半ばせざるに見捨られつる父上、圓滿なる慈母として、一箇の好ホームを創建すること叶はざりし姉上、兄上は業を逐ぐる錦衣の榮なく、阿弟は一箇の國民として、社會に負へる己が責務を盡すなく、況んや母上が、徒らに山大の苦ありて芥蔕の樂みなき、吁天は何すれぞ、我一家をして悉く短命薄命に死なしむる、人の艱難を嘗るを許して人の快樂を享るを許さゞる。將阿弟と先考とは——の濱に、兄上は東都の客舍に、姉上は東奥の片土に、獨逆緣にのみ遭遇せられし母上の

み、風清く山青き故山の土に、皆生所を異にして今亦死所を異にす。よし執て悲痛慘憺の事となさゞる迄も、誰かは云はむ享快受福の一家境なりと。

一青丘あり、故山の村盡る所、田家を離れて近く、滿山の古杉蓊鬱枝を交へて暮鴉を宿す、借問す、此老樹幾百千年の昔よりか根を此には止めし。丘麓の麥圃は夏來るごと漸々として雲雀の褥を設け、昊々たる旭暾は、朝な朝なの霞を破り、杉の梢に分上りて、村の全くに輝やくを廢せざれと、嘗て隴頭鋤を取りて、之に耘り、仰ぎて遍滿無私なる光をおろがみし人は、やがて髻邊の霜に老いぬ。山門をくゞり、東を指してうね〳〵たる墓徑を辿れば、一老松畔、風跡雨痕、三基の石碑ありて寂げに薄尾花荒草の中に立つ、蟋蟀霜枯れたる草葉の露に咽び、颯々たる松籟心あり、不斷の風に悲哀の歷史を歌つて哀れに、暮夜雨黑うして餓狐悲叫す、『稀に來て訪ふも寂し

き松風をつねにや苔の下にきくらむ』。

父上逝き玉ふや、我六歳の髫髦、法式の逮夜、小碟に滿酌せる酒を傾けて、宿醉に臥しぬる程の頑童なるを、いかでかは父上の事蹟につきて、十分の半をも知るべき、吾今日に知る所のものは、皆母上が口傳によるものにして、よし知れりとなすも、音容風采の、睫底と皷膜に把持せるものは極めて朧朦、うたゝねの夢よりも、猶幻の幻たるにてある也。阿弟と長姉とに至りては、當時幼孩乳房を離れざりし吾が露程も稔知せざるは素より然る者ありしも、只兄上のみは己のそが膝下に侍る事、年にも半しけむ、觀音堂のあたり秋老けつ、萬戸衣を擣ちて月あかき夕、雙影を地上に印して、曾遊談笑をせしことの、いかに樂しかりしよ。匹馬東にさりて又歸り給はず、其京より、風邪より肺炎、肺炎より脚氣病の變勢となりしを報ぜられつるも、母上は故有つて、上京の途につき給ふこと叶はざりし時、

其一面識なき二人の友人は、いかに其さゝやかなる貲財の他、收入とてもなき一身として、馳驅奔走、無限なる深情もてみとり吳しぞ、我此時にありて、齒僅に十有三、未だ當年の事實を知盡し能はざりしが、今はしも、當時の書簡を筐裏に覓め得て、其亡兄に對する友人等の愛情の篤き、殆んと上天なる彼天帝が假りに姿を人間に假りたるかの、疑惑を其中に夾まずんば非ず、あゝ今日澆季の世、信義猶此人あるか。而も天命如何ともなし難く、遂に萬事休せる人となりし、病狀の猛烈に至りては、讀み去り讀み來る毎に、頗る慄然たるものなくんば非ず、其遺髮と小照とは、今や故鄕の苔下に眠りつゝあり、瞑目一番靜かに默想すれば、髣髴たる言容、高く談じ笑ひて城府を設けざりしもの、髣髴として目前に躍るの心地ぞする、若し夫れ記臆未だ青き母上に至りては、又云ふを須ゐざる也。

——に在せし母上の、いたつきありて故山の親戚なる家に寓せら

るゝてふ報信に接せるは、恰も今茲六月十五日にして、急遽七年頃見ざりし故山に歸りしは、實に其十九日なりし。己が母上と不本意にも、「定省温清興無限」の意を、一封の信書にこめたりしもの茲に五歳、いとゝ肉豐かに、光澤うるはしきみかんばせを拜しまつらば、いかに嬉しかるべく、而も是日夕理想して措かざりし所のものなりしを、今や漸く病床に起直られて、痩盡したる指頭は、枯木の如く、蒼くやつれたる御顏は、藍に似たるの人に對し、之を五歳にして始て相見るを得たりし母上なりと云ふの止を得ざるを想ひ奉れば、我深情の悲痛抑いくばくぞ、他を顧みて泫然たる涙の衿を濕ふすを覺ねざりし也。折節みとりに下村せられし二歳相見る姉の居ますに涙を收めて懷舊の談は洋々として起れば、母上亦病苦を忘られて、圖らざりき故郷を去りて七年、此に始めて一家集合團欒の歡會に遭んとは、歡會か、團欒か、吾は未だ悟らざりき、最幸の中に最悲劇を

藏するものは、浮世の反覆にてありしを。遭遇は離別の始めと誰か之を云ふ、己は今此語を敷衍して、而も七歳始めて相遭ひし、此團欒か終生相見るべからざる、新なる永遠の離別の莚なりしを悟らざりし也。母上が姉弟の相つとへるを見て、最早病も薄らぎしと曰ふに、己れは再び旅裝を治むれば、嫋々として、椽ばなまで僅かに送り來られしみ顏の、此れぞ今生の見收めなりけるに、氣付かざりしこそ悲しけれ。此里に歸るも、宵々の夢は飛んで、孤床の邊に牽かざるなかりしかども、多くは快癒の途につき給ひけむかと打過ぎつ、月を超へて早五日とぞなりぬ、『絶食の模樣』てふ報に接せしが又さ程までにはと打捨置しも仇なれや、七月十二日、訃報は忽然として、風の如くに己を驚かしぬ。あゝ夢か、長へに夢ならんを翼ふ、幻か、永遠に幻ならんことを望めども、吁。

吾は再ひ郷里の天にと志しぬ、時に暮夜、到れば親戚は悉くつど

ひて己れを待ちぬ、夜はいたう更けて家人皆寢ねぬ、滿室蕭瑟として凄氣杳々、香煙あるか如く、なきが如、縷々白木の位牌に靡き燻じて、幽かに鼻を衝く處、吾は姉上と、一箇の亡骸を安置せられし龕前に坐はれば、懷舊の情、うたゝ胸を衝いていとゞ哀し。あゝ頑是なき昔の吾は、いざ知らず、物心覺えそめし頃よりは、よろづ念頭に止めて忘れぬ者を、親一人にて育てたる不幸の兒とて、姉上に超たる寵遇を蒙りしにも係らず、凡てに頑陋なる我は、凡てみ心に逆らひまつる事のみぞ多かりき、恣なること言ひ出でし時もありき、いかにそこひも知られぬ御苦心をばかけまつりしぞ、將爭かでかは忘れむ腹痛に打臥しぬる時戴きたる梨の甘味を。そも葛籠子てふ惡瘡に、或は眼を患へて、裁縫給ふ膝を枕に聽まつりし昔譚の面白きを。日はどんよりと、櫻花閑庭に散る座敷に仕事せられし母上の傍、我は年頭に他より賚ひし料紙もて綴れる帳面に、學びの舍にて習ひ

得たる作文をば、寫せしこともありき。秋風塞きたそかれ、賃仕事も出來ねばと、一寸の隙を惜まるゝ母上は、姉上諸共、家園の雜草を掃除せられて、己れにもとの命令にそむきつ、村巷に同氣相求む る頑童と遊びくらせしこともありし。己か手跡の拙なきを憂へられて、手づから己が腕を執り、運筆の法を敎へ玉ふ折、兼ていたう習字を嫌たる己は、筆を握り目を閉ぢて運ばせねば、半にして廢しぬることもありき。夜は多く寢ね給はで、己が夜半の夢浮圖破れし時も、ほの暗き孤燈の下、針を執らるる母上を見まつるは常なりき。遠く遊びに耽りて、暮風のうら冷かなるに氣附かざりしも、夕人して衣こし給へしも幾度なる。己がいたく小說を好みしも、母上が好み給ひければ也。我幸にして釣魚紙鳶、其他の戶外遊戲を好まず、且獨棲を好むも、亦惡友と交はればと、常に閑居せさせられし習慣性なりき。曩に鄕に歸るや、母上は曰ひぬ、我病は斷じて、健康の

體に復すべければ、汝幸に患ふべからずと。大阪に於ける舊跡名勝、何くれとなくねむ頃につげ敎へらるゝに、歷史癖ある己れにはいと面白う感じき。歸さ東都を過られて、阿兄が墳塋を尋ね、悲哀の深機に擊れ給ひしを語らるれば、吾も亦姉聟なる人の戰死を傳へ、いと悄然たられし彼人は、他を弔するの語、今や其身に當りて其跡を追ひ、寂然たる古塚一堆の主となりて、當時の一言は、是永訣の語となり了んぬ。其早晩癒えてんとは、遂に不起を覺られずして、猶余を慰められんとの御言葉なりしか、將自ら勵まし、自ら二豎の陶然として、直に怠たらんことを期せられしか。寓家に三光鳥を飼ふ、節奏頗る「月星日」と叫べるに似たり、其籠は懸垂せらるべく、恰かも病床の横にありければ、母上はそが囀づるを聞かるゝ毎に「命かない」と啼ける也と嘆ぜられしと云ひ、且つ生前、已に喪後の後圖を姉上に傳へられきと云へるに徵すれば、なゞて自ら死の日夜に

近づき來れるを知らで在すべき、知らばなゞて一信を飛ばし、己れを招き給はざる。姉上嘗てこを以て質されつるに、一度相見たれば、又遺憾なしと曰ひて、堅く我行を止められしとぞ、絶食の摸樣てふ報知をも、意に介せざりし不孝の罪は大なり。そも父の遠逝せられしや己れ六歲、詳に當時を知盡する能はねば、責ては母上の物語りに、心慰めんよすかともせしを、今や死の惡魔は、そを傳へ給ふ母上迄を襲はむとは。僅かに一日の抱持、當時に捧げし一杯の水は、是を末期のものとして、其瞑目にも遭まつらざりし、吾遺憾はそも何を以てか譬ふべき、天地を窮極すと雖も、綿々たる此怨みは、遂に盡くる期なからん也。簡を己に裁し給ふや、毎に曰はく『其元事まことに手跡惡く、少しも手習はいたさずや、隙あらばまづ手習をなさるべく候、算術と手習は、假令學校に參らずとても、ひまある節は習ふ可くくれ〳〵もねがひ上候』と、あゝ我はよし、書跡を學む

で張旭に駕し、算數に通ずること、神の如くなりければとて、只母上は何の時、何の處、來りて己が進化をば顧み給ふぞ。遒麗なる水莖の跡獨存して、其人は萬古千秋遂に見るべからず、御心に背きて、いたく譴叱を蒙りつる毎に、何故にかくまでと呟やきしこともありしが、今や想ふて、社會の笑よりも、母上が一言の叱りぞ樂しかる、母上の御魂にして歸り給はん事しあらば、吾は千里を遠しとせずして行くべきが、夭々如たる母上の嬌容にして、再び見るべかりせば、吾は母上が他出せられつる一夕の如、千秋萬斯年、音無しう待居らむものを、何故に母上は、早く歸らぬ旅に啓行せられ、茫々たる乾坤、漠々たる荒原に立てる、孑然たる二孤子をば殘し給へる。故山春は歸りてうるはしき櫻花は咲出でなむも、母上は何故に再び歸り給はぬぞ。萠出るも枯るゝも同じ野邊の草、いづれか秋に逢はで果てざるべき、定めなき世に定あるは死なりとは云へ、世には八十路の

坂を超えて、猶老骨矍鑠たる媼もあるぞかし。子孫膝を繞りて、團欒の筵樂しき宴げに、日を送るなるも多きぞかし、居るに樓臺の壯はなきも、容膝の程はあらなむ、食に八珍の美味なく、衣に綾羅の裳なくとも、里人の手に作られし青々の野菜、傖婦の手に織られし丈夫なる木綿は、少なくも十九年間、劬勞の萬分が一を慰さめまつるを得んとは、實に吾幾年後の確實なる豫期にして、この理想を築かんが爲には、何者をも敵として厭はざりし者、今や見事此理想は彼バベルの高塔と、同一樣の觀を顯しぬ。百に半して超ゆるもの僅かに七歳、何故に母上は、遠く白雲堆裡の人とは化し給ひ、玆に無限の憾をは遺されしぞ、我は一朝一夕も、母上を安んじ慰さめまつらざりき、吾は自ら勞働したる價を以て、母上に美味を獻ずること能はざりき、我は實に不孝の子なりし也、さはさり乍ら、母上は、不肖なる己をも力と賴まれて、吾將來を樂まれしは、常にしかく人

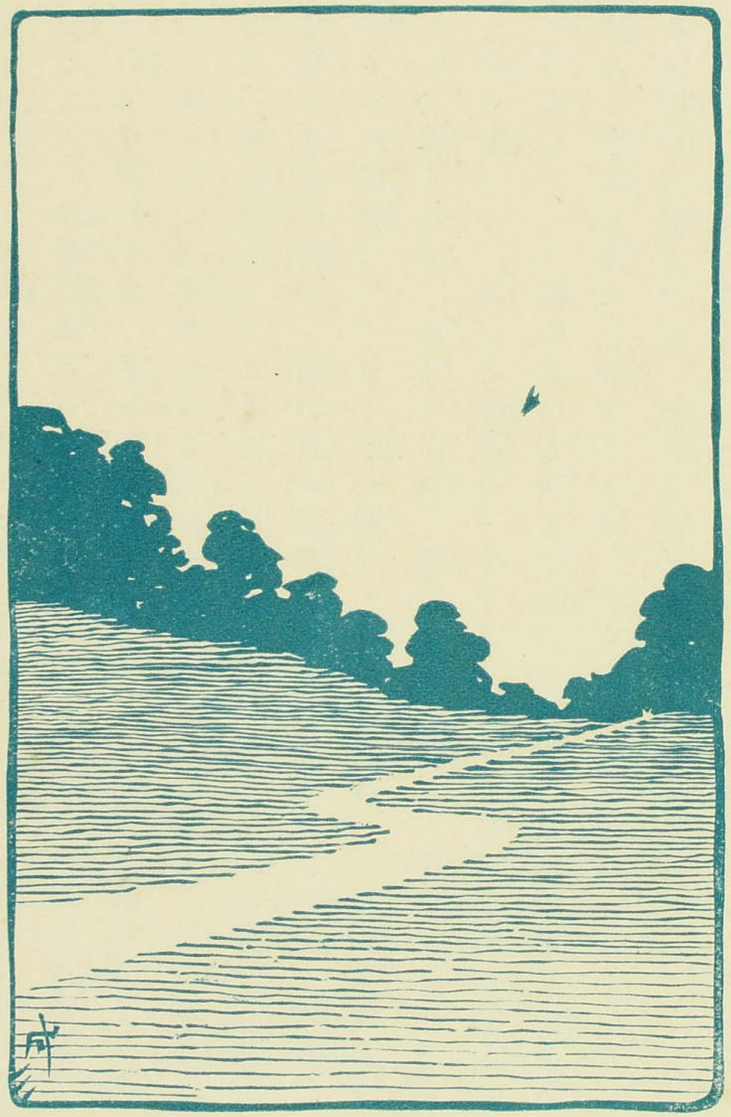
にも告げ、自れもしかく意ひ給へりしを、いかで自ら死を好み、憾を棄て給ふべき、『よもすから落葉聽く夜の枕哉』あゝ我は遂に死の運命を免るべからざるか、我は遂に二人の孤子を此世にすて、良人の跡を趁はざるべからざる乎と、想ひ到りたまひしときは、いかに哀情の悲しきものあられけん。あゝ悲慘なる運命の大鐵鎚を、此人に下せし、蒼たる彼天道は是邪非邪。吾人は是を追窮して、天網恢々の語が、何の定義、何の理論によりて割出されしかを知るに苦しまずんばあらず、嗟嘆噓欷、殊更に女の身の姉上が、泣音忍びてよよと泣かるゝに誘はれて、潸々たる涙瀧津瀨と下り、せきとめんとして、滿袂に抑ゆる吾等が悲哀、哀れ當日の哀情人しるや如何に、涙の隙に吾はいひぬ、姉上は猶三十日の久しきを看護せられつるに非ずやと。

寓家が言ふべからざる懇欵は素より、七年動靜すら知らざりし亡

人の一朝の喪に、耕耘の業を抛ちて來會せし、鄉人の舊に換らざる質朴深情は、多年浮世のあら波に浮沈せる、我腔裏の琴線に觸れて、實に萬點の涙なき能はざる處。あるはどこまでも眞面目なる者、三四杯の醪酒に醉狂するもの、飽まで呑み飽まで食ふ者、高談するもの。數年前の旅路に、己が見聞の該博を誇るもの。皆沈鬱憂淤の內に、一片の笑靨を捧ぐるを禁せず。況んや陰雨前後を埋めたりし當時に於て、昊天は殊に母上が葬儀を卒ふるまで、積雲を開きて、其啓行を導けるに於てをや、母上たる者、亦少しく悵々たる恨恚の、幾分を鎖殺するに足らむか。醒覺すべからざる空骸は、棺槨の中に移されたり、そも猶蓋を開いて、賴みなき消息を聞かんと欲するを得べかりしも、今や無情の釘頭は、一分又一寸、蓋より箱に向つて綴られぬ、丁々たる其響は、いかに一打又一打、吾腔子に響きしことの酷なりしよ。清淨なる現世の空氣は、又棺中の凡てを辭して、

猶再開くべしと疑ひし、閉られたる瞼は、長に黄泉の底に向つて閉られぬ。行は暗澹又蕭索、其新しき棲所にと志し、寂々たる讀經の裏に、岩床深く五十有七年、悲哀の歴史を此世に殘して横り給ふ、黄土厚く閉して、梅が香送る朝風も、しばなく雞の朝聲も、寒き眠りの此枕をば、亦喚起せんすべもなく、來り吊はむ人あれば、松風悲しみて青山愁ふが如し。

墓徑をそぼちゆけば、當時に矍鑠たりし其人の塋邊、榿、野菊の、とり〳〵に伸び滋りたるなど、今昔の感いとゞ深かる朝、雞頭花も、盛土新なる眠宮に叩頭けば、昨日の花は色褪せ香うつろひて無常を告ぐる顔なるも、いかに我思をや知る。枝垂れて、露重げに宿りたる自然生の尾花薄など、いづれか哀れを催す種ならざる。我は慰めまつるべき言葉もなくて、南無阿彌陀佛、只此六文字に、無量の憂意を封ずるある耳。門前の小田に植られし澤瀉は、母上と此に詣



でしとき、其日光を浴びしを賞せし者、「お墓參りですか」と問慰めげなる里人に遭ひたる、殊更に雨の晨ぞ憐れなる。

已れ一度鄉を去りて玆に七とせ、晨夕營々たる懷鄉の念は、事々物々に就きて、一個理想の故鄉を形成して、僅かに其鬱懷を洩せしが、今や來りて、眞なる鄉關に一歩すれば、一種異樣の感なからんとするも得ざる也。山河は依然、舊によりて靑く、只相驚くべきは、里人が有爲轉變にぞある、老は逝き、壯は老いぬ、三日相見ねば、目を刮る吳下の孺子、遂に吾人を欺かず、吾人が就て一驚を喫せしものは、彼少男女にてありき、何ぞ知らむ、當年父母の膝下に攀緣して、呱々たりし當時のわらんべは、是れ竹旆を執り、黍稈を携へて、山河を驅驟する、今日の腕白兒童なるを。今我れ無邪氣なる此故鄉に入て、此無邪氣なる小兒に對すれば、喟然として、我幼穉の當時を回想すると共に、陶然として、只太古の如きを感ずる也。瓦

盃藁席、紙雛の人形を弄ぶに餘念なかりし幼女は、戀を知り、春を知るの處女となり、或は他に嫁すべく、家庭の賢母たりぬ。當年の學友吟伴、亦四方に離散雲縱して、其僅かに故郷に停るものは、田圃に相遇ふあり、赳々たる武夫たるあり、或者は左官となり、敎師となり、或者は木工と成る、獨り舊によりて零落萍散の靑衿、自ら顧みて慙愧赧然。

夕べの雲は晴れて、遠く森を罩め、暮れなむとして暮れざるの天、己れ夕餉を了へて、前庭に佯徉する折しも、夕燒、堂の頂きに、薄れ薄れ行く落葉が丘の鍾樓のあたり、うら寒き晩風に誘はれて、幽かに響來なる一聲の暮鐘『さらでだに秋よ野寺の一つ鐘』時は秋ならねど、我寓居は山麓にあり、朝暮こを聽きて意とせざりし者、今病篤き人のありて、村人が爲に通夜せむものなるを耳にして、病てふ聯想は遂に死に想ひ至り、再轉して母上に及び、無限の幽思に撓

たるゝを覺えき。舊宅は、今や我親戚なる人の居となりぬ、己れ止を得ざるの事ありて之を訪ひしが、主人は素、農を業とせるの人、家は凡て當時の俤を止めず、果然斬られて薪とやなりけむ、佐野の昔や忍ばれけん、梅樹は云はずもあれ、竹籬に沿ふて、生茂りし花卉は、すべて跡方もなく、在りし昔し、母上が潔癖に誇られたりしもいづこ、棟梁柱楹、なべて藁、或は柴楷の烟に燻りて見る影もなし、又何くに、かの南窓と書棚とを存せむや、吁。

弦月微かに朽葉丘邊にかゝりて、蜩蟬漸く啼止める夕、我は從弟と、露を蹈みて山に登り、頓て懸崖によりて眺めやれば、只漠たり邈たる遠山暮靄の中に、清瀨の流其間を貫きて、滾々として白く遠く、木橋の横はれるは模糊として、扁舟一葉の泊せるに似たり。已にして水の如く晴れたる蒼落には、月裝ひて、空の如く澄みたる河中に影を投じ、奔湍に碎くれば、碎けたる一片を載せて、渾々たる

一潭は彼方へと走り去る。遙かに望むで、田郊村落たゞ一樣に淡々
模糊、簾帷を隔ちて、髣髴たる美人を見るなんどのごと、山下の路
のみ、獨り嘵々として葉末の露をも辨ちぬべし。忽にして天風蓬沛、
袂を捲きて起れば、衣を千仞の岡に振ひ、足を萬里の流に濯ふの概、
我は七年の昔に歸りて、而も又念頭拈出す、己か幼時母上と當時の
寓家を訪ふ毎に、此路を過るを常とせしが、今や則ち亡し、哀れ悲
しきかも。

落葉が丘に遊び觀音山に登り、あるは月夜栗樹の下笛聲の揚るを
聞き、馬を驅りて素山の青草を蹈み、或は鄕人の許をおとなひ、恩
師の門を叩きまつる、俯仰感慨、談は一として懷舊の種ならざるな
し。若夫れ屋梁に懸れる殘月、瘦せて人に似たるの夜半、或は清瀨
川邊の夜の雨、川柳の枝糸に似て、物悽く星の如き向岸の燈火、淙
々たる水の音、四隣寂たる半宵の枕に通ふとき、幾何の幽情に枕紙

をぬらせしぞ。

喪にあること已に十有四日、恰かも二週忌日となりぬれば、はや
いつ迄か在るべき、來ん年の今日ぞ亦も訪はなんと、名殘をしき里
人と、山河とに別を告げて再び故鄕をば出立ちぬ、村極まる處、遙
かに蒼流山の古森を伏おがみつ、哀れ不孝の子、江東、生けらるゝ
時、膝下に定省の義を修むることなく、今や侍りて、墳塋に蔓る夏
草を掃はざるのみかは、日の夕、雨の曙、千里萬程、孤旅の空に香
を捧げ、花を供へて御心を安めんよすがもなき、將何を以てか此罪
を謝しまつらむ。漣々幾行の涙に、朦朧たる故山は目睫を去りて、
青鞋は悄々、異鄕の雲に迷ひ入りつ、我は再び、花晨月夕、思を惱
ます遊子とはなりぬ。

今や縷々たる愁情は、故山に對して未見の前に一層しぬ、夏は半
となりぬ、炎威黃金を鑠らして、人は北窓の下に、一肱の夢を結ぶ、

片時も、己はいくそたび、神斧神鑿高く懸たる朽葉の崖、青葉萋々、風颯爽たる處に飛けむ。魄祭る盂蘭盆は來れり、靈前の燈火影ほの暗く、線香の煙かすかに、露に烟ぶ蟋蟀の庭砌に悲むとき、獨り明月に座すれば、あやしき迄に、過ぎにし事の想ひ出らるゝ也。朋ど ちと共に、糠塚山邊に、桔梗刈萱を手折りて佛前に捧げしも、七年の前なる故園の此夕よ、母上が指揮にて、小麥稈を燒きて魂迎へしも、亦今よひなりしを、いかで知り給ふべき、今日今宵却りて魂祭らるゝ人となりて、瓜牛茄馬に扶けられて來り給はむとは。「昨日見し人や隣の玉祭り、」一句誦し來りて、殆んど己が爲に作られしに非るかを疑ひ、滿腔の悲憤冲々轉ろに逼るを覺ふ、果なきは人の命なる哉、『盆よりぞ秋は憐れになりにけり』己れ今歳に於て玆に秋の憐れを覺えぬ。

一輪深苍月、半夜板橋の霜、皐亭に一葉は下りて、四壁已に秋の

聲、目に見耳に聞くもの一つとして寂條の景たらざるはなく、西風旅雁を吹いて、綿衣涼を感ずる頃とはなりぬ。「時」はいかに我をして懷舊の道途にさまよわしむるよ、天邊始見鎮西山と、大書せし酒塵の屏風。草茂れる堤防に、相撲とりてころげ落ちたる。酒造檢査の爲とて來りし、收稅吏に禮したりとて褒られし。燒魚を竊みし猫を叩きて、我烱眼を母上に誇りたる。さては寓家の前なる一本杉の事、門前なる柿樹の黃みたるを、鴉の啄みけること、獨り夕陽の堤、清瀨の川水を送り、船人の長閑なるを見て、何となく悲く感せしこと、ありありと躍り出る過去の現象は、分明塵芥の細小も及ぶ也『その儘に露置く袖は乾かぬに、はや七歳の秋も經にけり』先考阿姉阿弟逝られて已に十三秋、兄上が喪を距ること玆に一週年、魂は棟木を繞るてふ、母上が四十九日も早過ぎぬ、あゝ蒼流山の邊今いかに、秋草ほしいまゝに伸荒れて、墳塋を沒せしが、青苔石を繞つて讀む

べからざるか『霜月照屋壁、霜風湧江波、終夕不能寐、展轉思懷多、忽夢吾母來、宛然度山河、問兒衣薄、語短不及他、兒寒猶可忍、地下知如何』と古人は悲歌せし所、魯の聖人は、夢にだも周公を見ざるを怨む、吾一度も亡き母上を夢みざるは、赤誠猶至らざるあればにや、或は秋晏高朗、灝氣洗ふが如く、白雲悠々たる晩景、己は桑畑を驅めぐりて赤蜻蛉釣に狂し、赤蛙を捕へて、母上に庖厨を賴みまゐらせしも、枯葉落ち苅穂列を正して、架木に懸れる田畔。われ入日と共に家門を入れば、味噌汁の香り鼻を衝く、頓て三人團欒して、夕餉の食饌に向ふことの嬉しかりしも、今は昔しとなりぬ。木の葉を飛してしめやかに、破蕉を音づれ、ねざめの扉を叩いて寒き秋さめそぼふるなど、あゝ故山の風景今如何に『木枯しやいとゞ都の懷かしき』。

我母上が小照と墨跡を拜するや、如何に考ふるも、遠近の途に上

りて、冥府の人となられしとは思ひ寄る能はず、而も愈追窮して、其逝き給ひしことの眞にして、永久歸期なかるべきを感ずれば、茫然自失、千仞の崖巔より、落下するの情あらんとす、あゝ此小照、此墨跡、孤影相弔せる吾をして、愁情を牽かしめんため、遺し給ひしにはあらざりけむ、借問す乾坤、只營々たる此二筐物、はた幾歳の長恨をか傳ふるぞ。

今己が此を草する、筆と紙とに、ひたすら星霜と全力を盡せしものは、果して何の要ありてなる乎、一秒も早く、一毫も速かに、少くも十數年來の劬勞を慰めまつらん、安樂なるホームを形成せんに外なかりし者を、今はた誰が爲にかせむ、筆を拋たむか、紙を扯裂せむか、語を寄す世間滔々死後の榮を喋々するの愚人輩よ、位爵富貴、皆是れ後昆を砥礪せむが爲の、告朔の餼羊なるを知らずや。莊嚴美麗の廟屋に、轟く讃美の歌聲も、高を北斗の星と比ぶべき黄金

の多きも、四大空に歸せる死者の耳には何とかせむ、ましてや、是をだに爲し得べからざるに於てをや。豈はた千言萬語を重ねて、厭までも容捨なく、家庭の和樂を蹂躙せし、飢たる死の神を罵殺するも何とかせむ。吾人は信ず、我一家に對する務め、只早晩一家を地下に訪て、極樂淨土の邊、現世の不孝不悌を謝するの外なしと、而して鄉人は云ふ、我一家を起すの責任、かゝりて卿の肩にあり、卿の義務、亦彼れにあらずして此に在りと、我は未だ其理を是認せずとするも、而も何事を忘却するも、我は鄉人の敎訓を見捨得べからず、枯柳廋影を畫くなる破窓、破机を擁して光明滅する、前途はかなき將來に思ひ辿れば、ゆくりなくも過去の事歷は、秋砧と繰返されて、果つべくもあらぬ千緒萬懷は、虫聲いよゝ繁からむとして、蟾影益朗ならむ、玆秋と共に深うなりまさらんとす。」

* * * * * *

尊き人訓えぬ、艱難は人の試金石ぞと。賢き人は訓えぬ。人は艱難に對ひ立ち、艱難と鬪ひ、つひに艱難に打ち克たざる可らずと。崇き書の面、尊き文字は書き現はす、「人の艱難に打ち克つてふことは、世にもこよなく美なり、勇ましき勳ぞや、手柄ぞや、名に譽れに、黃金に美屋に、光の駛きがごと、直ちに酬はるべきものぞ」と。母上世に立ち玉へり、戰へり、しかして克ち玉ひにき、しかも弱き者、女性たるの身もて、心もて。

さらば母上、いかばかりの酬をば獲たりける、？、土は肉を埋めぬ、地の懷に。苦は名を埋めぬ、石の懷に。かくてあゝいかに莫大なる報酬なりしよ、夕風にかつ散る、秋の一葉よりなほ脆き、永久なる世よりの「忘却」は！。

毒茸紅き片山蔭に、苔に埋もるゝ一基の古塚よ。蒔きぬ、しかも

* * * * * *

苅られざりし。徒らなる一生の悲哀の歴史を、地下に賚らし給ひつる亡き母上よ、光なく幸なかりし我が母上よ。おん身此世に在ぞかりて、二無きものと愛で、字みけん、おん身が拙く魯かなる子は、今香華捧ぐべくもあらぬ、百里の外に漂ひつ。あはれ皂隷庸丐の輩だにも、父母の御墓には上るべく、馬醫夏畦の鬼すらも、子孫の追善供養は受くるといふものを、われ等一たび去りてより、白雲上つ峰を鎖して、遠く人烟を隔つれば、誰一人の閼伽を手向くるものなかるべく、巴峽の秋の深くして、蒼苔に置く露繁きも、苦を削りて、慰めまつらん心ある人もありやなしや。われつねに悚然として、我不孝とつとめざるの罪とに慄くとき。しかもわれ、かの弱きものを生贄として、その血を啜り、その肉を屠り、なほ貪つて止むを見ざる、「世の道」てふものを咀ふて、束の間もなほ忘れ得ざる也。

* * * * *

さはれまた想ふ、世に立つべく屏風の戒めの、何事も直くのみありては叶はぬ世を、わが母上の、かゝる世に立たんには、心餘りに硬かりき、強かりき、直く在しき。个の婦人として、殆んど完全なりし母上の、猶其の志強かりしだけ、節硬かりしだけ、心直かりしだけ、其苦闘の度は、ます〳〵激しくなりゆくなりき。あゝ鸞羽はやく孤にして、兄上、姉上、相繼いで逝かれぬ、われたゞ一人、わが世侘しく生き殘れる、母上たるものゝ境、また悲しからずや。ましてや十四年間の精神の苦闘は肉體の過勞と相幷んで、ひとり斑々たる、兩髩の霜を早うしたるのみならず、また百年の老を、一朝に招きたるものあるに於てをや。

さはれ肉體に於て精神に於て、榮あり克ちある苦闘の歴史は、やがてわれ一家の系圖に、精血をもて彫らるべく、我子より我孫にと、永世に言ひ續ぎ語り續がるべき、世にも希有なる事例なるべし、貴

重なる寶典なるべし。

さもあらばあれ、花より美はしき妻を娶り、玉より麗はしき子を設け、牡蠣殼の如く知れずして生き、蜉蝣の如く默して逝く。人生六十年のことたるには、餘りに甲斐なく、餘りに儚なき生涯ならずや。思へば家名は何か、富とは何か、所謂世の法則なるもの、われにありて毫毛のそれよりも輕かり、恐らくは、終生に妻なかるべきわれに、また世を終ふて子なるものなかるべく、かくて榮あり、崇むべく仰ぐべき寶典は、つひに長へに湮滅して、かつて傳へられずして止むべきか。よし傳へられずして止むべしとも、わが五十年の生涯に、忘られんには、そは餘りに明かに、はた神聖なる模範なるを。いざさらば、卿は躬らを犧牲として、たゞ一家の爲に瘁されたり、おん身が一家の爲に瘁せるところ、われさらば、一身を捨て一家を棄て、これを國の爲、人道の爲につくさんか。かくしてわが劒

摧け、わが馬斃れ、わが骸平和の戰場に曝されて、紅葉なす渾身の血潮、われを葬りの花圈飾る時や、これやがて、天國なる御身が膝の邊に跪いて、蜜より甘き笑顔、再び相見まつらん夕なるらむか。

＊　＊　＊　＊

われ獅子庵支考が『舞子の曲』を誦し、一誦また二誦、つねに瞑然として魂銷せずはあらず。

たらちねの親の心ぞ子は知らぬ、くらぶの山の山猿も、人にかはれて小袖きて、なに故郷へかへらぬぞ、にしきを闇の紅葉川、船漕ぎ捨てゝ上の空に、日和見る手も笠の端や、杖つくゝと白ぬひの、つくしにも行き吾妻にも、行衛のものや思ふらむ、おもはぬ人を雲の井の、綱手にわたりくらべても、其身の憂さは知らずや、世をあかさるの舞の袖、それをかさ

しに世を偲べかし、汝も聞かずや我兒をたきて、青葉しげき思ひは、親猿の腸斷ふるとこそ聞け、桃李の花の都とても、我ふる里の栗柿に、何かまさるの色に愛でて、此世を仇に舞の手の、曳く手もつらき猿曳きに、何うらむらん三つ四つと、いつ思ひ出のあるべきや、およばぬ空の月を戀ひて、水をかゞ見の影うとき、身を老猿の音をや鳴くらむ。

六　歸省

日暮楊柳の曲を聞けば、世界を擧げて與ふるも、寧ろ歸りて舊廬に眠らんと欲する、これ遊子の情なりとかや。西の國に詩人あり、かつて『ほーむ、すゐーと、ほーむ』の曲を歌ふ、情緒纏綿、調哀哀、遊子千古に袂を掩ふて泣く、歌に曰く、

千萬の歡樂や、金殿玉樓やの間に逍遙ふとも、
いかでわが葎生の賤の伏屋の、その樂しく美はしきに及ぶべきかは。

御空より下る奇しき崇美ありて、もの皆ひとしき聖光を浴びつるわが家の如きは、これ天が下いづくにも、つひに索めて

索め得ざるところ。

わが家よ、わが家よ、樂しきわが家よ、
樂しきわが家の如きは、世界また何の所にもあらじな。

＊　＊　＊

遠くふる鄕と立ち離れて、榮華夢よりも儚なきを悟れる遊子
われの身は、
今更に戀しき哉、わが陋ろしきわが草の家よ、
あゝ嘗ては、我が呼ばひに打ち睦みて、
華やかに歌ひたりしかの小鳥もがな、
われにこれ等を與へよかし、
いな更に、これ等よりも愛らしき「心の平和」を與へよかし。
わが家よ、樂しき樂しき吾が家よ、
世界いづくにも、樂しく美しき吾家より勝れるはあらじな。

＊　＊　＊

歌つて未だ閑らず、遊子の青衫ことごとく濕ふ、歸心徒らに矢の如く急にして、故鄕はいづべの天にかある。仰げば凹凸せる亂山と、際みもはろばろと白雲の、空しく其間に眼を斷つある耳。

「鄕里は知らず何の處かこれなるを、雲山漫々人をして愁へしむ」。

＊　＊　＊

われは故鄕を距る一里、一つの小さき驛路にと入りし也。こゝぞこれ、名高き一劇曲の副主人公、潔き封建武士の模範として、君が爲、捧げて何か惜からん、捨てゝ甲斐ある老後の一命を、潔よく霜刃の下に殉へたりけん、なにかし氏の居城ある處。

さては我が村にて、整ふべくもあらぬ貨物の供給は、必ずやこゝに仰がるゝなりき。はた我が村の婦女等は、そが機杼の下の產物なる、縞木綿地木綿をこゝに賚らすべく、木綿問屋吳服屋の店頭に、

適當の鳥目と取換ゆるなど、簡易なる太古の風俗の、明らに認めらるべきもまたこゝなりき。

月に一たび、母上がこの町へ見舞を拂はるゝことは、われに取りて無上の待遠きものなりしかな。何等かの土產賚らさるゝべく、例として缺かるゝことなかりければ。

さては予の、母上の代りにとて、こゝを見舞ふいつもいつも、われはいかに嬉しかりしぞ。麥藁帽子も購ひたりき、賤が嶽七本槍の繪草紙をも購ひたりき、ペンを、筆を、書をも購ひ賚らしき。かくてわが一里の青田を過ぎて、郡役所の白堊空に聳ゆる、この町の巷頭に立ちし刹那よ、喜びの波、いかに激しくわが鼓膜を鼓ちたりしぞ、凱旋門潛る兵士の思ひに、濶歩して進み入るを常としたりしよ。

今やいくたの山光水影を過りて、われこの街に入り來れば、依然たる當時の書舗は、例によりて態をも變へず、塵頭の顧客は山をな

せども、知らず舗頭の賈人、よく當時の小郎君を認め得るや否や。

われはは、こゝも故郷の心地して。朦氣なりし理想のふる郷、今やうやくに確實となりぬ。現實に活きぬ。

進む一歩は、一歩より近き故郷の土よ。ふる郷の風よ。

針より細き早苗田わたりて、久し振りなるふる郷の清風よ、土に命あり、風に靈あり、みな懷しげにわれを取圍んで。

われは今ぞ、故園の村界にぞ立てるなる。

＊　＊　＊　＊

あゝわがふる里よ。

こゝぞわが村界なりしか。

今更の樣なる心地して、われ今村界に立てるなりき。

此の一刹那よ、うれしみ、歡び、痛み、悲しみ、うら珍らしみ、たゞ〳〵何とも得知れぬ感愴の、たとはゞ魔が射る、白羽の征矢の

一すぢよ、羽ふくらせめて、我胸もとを貫きたれば、我が感頓に鈍く、我が思ひ遙けくなりて、さながらにひたと化石しつ、やゝ暫し、我れかの中空に立ちつくしたりしは。

あゝこれ、わが戀ひ戀ひしふる里なりしか。

七とせの其歳月を、知らぬ山河に漂らひては、あくがれたりしその故里よ。　朽葉の丘峙つ所、清瀬の流れ凉しき所、久しき怠りをも謝しぬべく、いくばくの變遷をも尋ねなむ。心惱む客窓の朝な夕な、儚なき理想の影に畫きて、玉ゆらの慰めとはなしたりけむ、其まぼろしを今現はにすべく、村界に一歩せる刹那の感ありき。

いはけなくて棲みし面影よ、夢裡たゞ過ぎけん日月の、あゝ何かしは今はたいかに、くれかしはそもいづくにかある、沸泉の滾々とわき出でつ、雪より白き緒環の糸の、染まざりし古へ繰返しては、亂れ緒の俄かに整ふべき術もあらず。

夏は初めなりき。

若き翠り葉密かに立ち籠めて、饒かに萠え出でたる桑畑ゆ、昔に渝らぬ村人が、年々に怠らぬ蠶飼の業に、勤勉なるべく、富有なるべき、無言の消息こゝに傳ふるよ。

奇しき香り、やさしき慰め、日に燒けもし黧みもしつらむ、我頰のあたり徐ろに摩でて、故郷の風あり、そよ〳〵と吹き通ふ。瑞穗うな垂れては熟り重き千ひろの麥に、斷えずて寄するさゞれ波あれど、我が胸今や、朝の樣に和みたり。黑き一塊あり、隕星の迅きに似て天に冲る、雲雀なりき、樂しき囀り、あゝ心ゆく許りの長閑けさよ。仰ぎ見るあたり、碧落青紵紗を敷きつめて、白きは羊毛の吹き飛びけん、一片雲の眼も遙けく、漂ふとある葉山のあたり、翠りは木々の梢より起りて、乾坤一つの新綠ならぬなく、日は暖かなり、

まともに我額を照して、我頰さながら火の色にほてれり。柔らけき光の、頂より胸、胸より腕、我體のなべて包み了へし時、我骸はただやゝに、蠟の如くに融け去ぬべくなりぬ。嫉妬、猜疑、客土よりの土産そのあらゆるは、皆我心より忘られて、平和またくその空地を領したるなり。

かくして三寸の青鞋に、堤の若草踏んで立てる我れ、恰も夢なり。微かに咀きあり、いづくよりとも知れず、我心の小琴、今し其一線に觸れつ。

「これ爾が故郷にあらずや。これ爾が久戀の故郷ならずや。」

「響やう〳〵に高うなりまさりぬ、一線より一線、波動は名殘なく傳へ亘りぬ、全線鏗爾として鋼鐵の響あり、一聲の搖ぎ清く凉しく鳴り渡りつ。

「あゝこれ爾が故郷にあらずや。」と。

われは我幻覺より攪むべく、遂に辭し能はざりしなり。

然り、我故郷なりき。

さはれ、さはれ、我は惑ひぬ、「故郷とはいかなる者ぞ」と。

聲あり、語れり、「卿よ何をか惑へる、これ卿が故郷ならずや、御身は記せり、卿が幼き昔へを、好める相撲に耽るべく、年々の土俵設けたる、實に我屬に外なかりしを。實にや情け深かりしおん身は、冬の封しの餘りに嚴かに、我等の屬常に、蕭條の死の色着けたる憐みつ、青帝の駕を繞らして、かれ霜柱の矛戟より、遥かに苛政免れしむべく、矢庭に火を集へて、我等が生育を早めし故舊なりし哉。

おん身いくとせ、活潑なる其面輪と容止の、我等が領土に隱れてより。遮莫卿あらざるも、村の童の憐れ深きは、猶おん身が憐れ深かりし如、冬の虐げを憤つて、我等が爲に喪衣を焚きつ、我等が膚を暖むるとの、猶おん身がなせる夫れに渝らず。かくして我屬は歳

また歳、蒼く輝ける上衣を襲ふて、つねに柔らけき微風と共に、恵深き日光に面りし得。蒲公英は咲めり。奇しき頭振り立てゝ、土筆も萠えぬ、嫁菜も五形も壺菫も、普遍なる春の恵み浴びて、光りと熱とのうま酒に醉ふ、いづれか等しからざらん。かくして村の童等が、いかなる踏藉と喧閙とを、我属に加ふるとも我等恨みず、村の小娘等が花籠に、我等のいく本摘み入らるゝとも、我等聊かも咎めざるもの、皆これ渠等が寵の渥きに酬ゆると、然かも卿が其昔、垂れたる大慈眼忘れぬべく、皆そが故にあらずはあらずかし。

あゝ少年無邪氣、眞紅の血に充ちたる卿が頰、今いかにして斯く、傷ましくいたく瘁れたる。快活に天眞に、我属を踏藉せりけん其脚の、なぜしかく力なくて、今し卿が故郷に入るべく、しかく臆しつ踟蹰しつるや。我属素より、卿が面を再びするの、榮を怡ぶを心よりするものなるを。

げにやおん身、卿は千の石匠を倩ふて、己が名文字を、碑の上に彫らざりければとて、卿が名は卿が故郷より、長く忘られたりと信じ給ふか。あらじ、あらじ。故郷何ぞ卿を忘れんや、忘れたる者、寧ろ卿自らのみ。見よ頭を擧げて、朽葉の丘、清瀨の流れ、風にさやげる滿丘の木の葉は、淙々たる波のとよみと共、齊しく歡喜の聲を合せて、「ウエルカム」の曲唱するに非ずや。山河情あり、何ぞ卿を捨てむ。たゞ花蜚んで花歸る、七年の春秋、此美なる山川に歸らざりしもの、歸りて、父考の墳塋に見舞はざりしもの、斷じて卿に情ありと云ひ能はじ、はたいかんぞ、卿に辜なしと云ひ得べきや。よし卿が無情、卿をして其ふる郷に對する、卿が萬般を忘れしめよ、はた村人をして山河をして、悉く卿のすべてを忘却せしめよ。たゞ何の日何の時、必ずや、卿が此山河に生れて、幼時を此山河に費せしことの、旻天の記錄より取除き得べきか。形は煙と消え失せめ、

言葉は塵の如沈み去るべし。天の石板に彫れる名文字の、長へに磨滅し去らん何時ならん、其遂になす可らざる間、卿は猶此里を以て、露を假寐の草枕、明日は浮雲の定めなき、他しの里と眺むるを、よくし得んか。

容は逝きぬ、神獨り、悠々の間に貽るもの、所謂故郷、斯の如きにあらずや。」

我れ今堤の一草によりて、朧ろげ乍らに、「故郷」の意味を解し得ぬ、然り、「形逝いて神遊べり、」斯くの如きこれ故郷なりし哉と。

大地を埋めて立ちこむる、桑の緑り葉其葉末を透して、一すぢの水の色、汪洋として、限りなく碧りなる見る、これぞこれ清瀬の清流ならじか。一枝の釣竿に無上の怡樂あり、日ねもす此河岸に影醮せし、村の翁も見えずなりぬ。張れる翼の眠たげに、ゆきかへりたりし白帆影、今日はあらずて、水嵩やゝに低ければ、龜の甲、乾す

かと計りまがはれて、中流思はぬあたりに、砂洲を築きぬ。

裸なる子の四人五人、泳ぎ戯れて餘念なき、おぼろの面ざしいたく肖たるを、かれはなにがしにあらずや、くれがしに非ずや。あらじ、あらじ、そは早も七とせの過ぎしなるを、いつまでかかくて、いゝわけなくあらむ。その筈なり、今は腕白やいたいけ盛りの、やうやうに我郷を距れる頃、始めて胎を出でたるなりけんを。

對岸の村や畑や、野面の眺め綿渺たり、畑極る所欝たる杜あり、繁き杜の木立洩れて、白きは幟にぞあらむずらん、朱の鳥居微かにほのめく、ありし當時の鎮守の社、猶そこに立つなるべし。

河は遠く、兩つの村を境して、流水の末の漸く細く、漸う狹く、つひには一髪の微けさ劃して、はづかに白き波光水色、行衞も知らねばそれかと計り、かなたの雲に混り入るなりけり。あゝ夢か七とせのこの水に、石拾ひては水切りて、浮べる雲を騷がしけん、あど

なき兒は今のわれなりしを。

それよ渡頭船を艤ひて、とある河水横らんとせしことの、想へば幾年のことなりけむ。はしなくも其上流が、故郷の地を浸すものなるを聞いては、楊柳飜々たり水逆に流る、感慨ほと〳〵堪ふべうもあらず、時は秋なりき夕なりき。蘆花雪と飛んで、渡守が鬢頭の霜よりも白き處、わが手その一杯を掬んで、深く故郷の土に祝福あらむを祈り、たそがれ寒き舷頭に立ちつくして、人世の蹉陀に長喟せしもの久しかりしか。

あゝ砂滾ばす清き流れ、舷にさゞめき岸邊繞り、汀の幽花の根を洗ひ、魚界の洞に音訪れつ、淙々として流れ逝く、今昔へに異らざるも、而もいくとせのいにし秋、我掬せりけん一勺の水、今はあらじな。智恵の實の苦き味ひ初めて、人世の風波に飄へる身の、聖かりし幼時が、とことは歸らざるべきそれにも似て。遮莫、爾が晝夜

を捨てず、渦みつゝ旋りつゝ謠ひつゝ躍りつゝ、夜半の寐覺の淋しきを、渡守が小屋に夜々訪るべく、なれの聲音が、しかく長へに老いざるもの、あゝ我知れり。なれが兩岸の豐沃輔けて、擊壤の怡しみを、あらゆる村人に與ふることの、年また年渝るなかるべき、自らが恵みいかに大なるかに、プラウドとトライアンフの奏樂なればなるを。

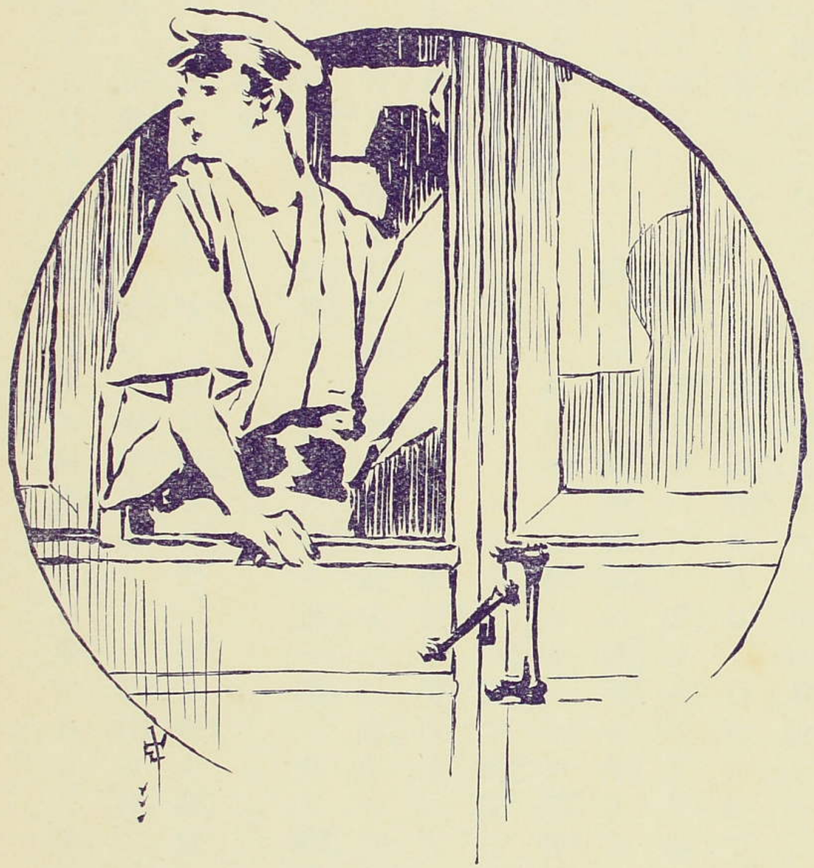
あゝかく明かに諭り得し時よ、吾心のいかに苦しきをなれは知るか。村人が負托果し得もせず、天晴空荷齎らして、郷に向へる我の心の、いかに悶へたるかをなれは知るか。あゝ爾が鼓聲などしかく急に、我が胸を刺すことの、なぜしかく苛ひどき。

あゝこの皷聲、われまた聞くに得堪へじな、聞くに堪へずして、猶聽くべく望む、故ありや。見ずや搖籃の幼な兒を、母が振上る笞の下にも、涙滿つる眼に媚を捧げて、幾分の宥めを乞はんとはする

也。今世間の呵責に飫いて、暫しを故郷の懐に眠るべく、歸り來りたる己れなり、など獨り、我れのみを嬰兒ならずとはいふ。

＊　＊　＊　＊　＊

老杉矗として山を繞りぬ、嚴めしく現世の域り分ちて、自然の石垣結び築くめり。これや實に、我村の墳墓の域蒼流山よ。嘗て生きたりし我村人の、終世を世路の崎嶇と鬪つて、榮譽の屍、常に持來たるゝは茲よ。太古の昔も、今時の新らしきも、猶まさに來む盡未來際、花々しき苦鬪は永刼に續くべく、光榮ある屍、また長へ、此土に埋もるなるべし。かくして我慕はしき父上また、今此冷かなる土の下、墓木も拱すべき久しき世紀を、樂しき天國夢みて眠り在すべく、吾もまた早晩其眠宮に侍りて、生前の不孝謝しまつるべく、宿命有てる身なるぞかし。まことや己れ性として靜を喜む、死は豈大靜の極みならずや。われ頻りに死を愛づる、此愛いかで、他人に



推し及ぼし能はざらむや。抑生は桎梏なり、死は解脱なり、桎梏を惡んで解脱を喜ぶべく、これ普通の人性たらば、われいかで、他界の村人渠等が爲に、死の解脱を讃美すべく、謠ひ能はざらんや。かの肅々として弔輿行く、蹕從の人、瞼邊悼惜の涙玉の如きとき、吾ひとり微笑を手向くるもの、これなり、これなり。今や卿等靜かに眠れり、苦しみなく涙なく煩悶なく、かくして卿等が現世に於ての純朴なりし生涯の報酬は來れり、かくして現世の勞は酬いられたり、已に然り、我たゞ卿等地下の靈に對して、賀すべし憂ふべからず、笑ふべし悲しむ可らず。底事ぞ、睫間に宿る露一滴、たゞ卿等にして其故を解せんか。

何故とな、思へ、風にも堪へぬ我弱き心の、天を掩ふ浮世の風塵に混じては、忘執の邪念、徒らに胸膈に蔓りて、純朴の撓へ、幾度か折れなんとしけるよ。たゞ暖かき故郷の懷に擁かれて、聖り人、

おん身等が言貌に接する時のみよ、我心の矢痍、立ろに癒されて、天の子、の古へ、索め得べかりし也、さはれ今萬事已んぬ、卿等皆墓石の中に默して、現世またとことはに、見られ得ん由のなからんとは。辜ある人に巧笑あり、都びとの陰險はこれよ。辜ある人に荆鞭を捧ぐ、田舍人のまごゝろ、そこにあらずや。空荷とや、漂浪して成すなかりし、辜やまこと我れにあり。われや只かの巧笑を惡んで、ふる里人が「まごゝろ」ある、その荆鞭こそ、偏へに望みたりしかな。望み望みて歸り來れば、思ひきや、卿等早くも我れを見捨てゝ、天に歸るべく、しかく急ぎけんとは。荆の鞭よ、荆の鞭よ、奈何、花空しく落ちて、水は無情徒らに流れぬ、晏天に叫んで晏天寂たり、天の人何の時か歸り來むや、家毎に颺る烟はあり、窓ごとに赭き面はあり、しかも皆ありしおん身等にあらざりし、寂寞たる天地、吾にたゞ一人の母上在すあるのみ。

嗚咽、歔欷、これ婦女がたゞ一つなる武器にして、泣き、涙、たゞ乙女の頰にふさはしかるべきのみ。

さりとは、昔を思ふて今を哭す、せめてはゆるせ龍鐘の涙、ひとり雨の如く河水に濺ぐものあるを。

小高き丘の上、質素なる木造りの小樓立てり、忘れも得せぬ、わか村翼にはあらざりしか。甍高からねど、直ちに天に達すなるべく、紫の雲、つねに山を繞つてたなびきつ、こゝ西の村界、屹として立つもの、はやいく十の世紀ぞとよ。魯かなる者を譴むるが如、譽れある人を稱ゆるが如、手柄なき子を誨ふるが如、左に「慈」の寶珠あり、右に「嚴」の縛繩ありて、たゞこの村を崇くすべく、日に夕に、出で入る人を戒めて、監査の眼須臾くも緩めず。いかで己れ、飼育の甲斐なかりしもの、忸怩とじて、面に慙るを辭し得んや。

あゝ我、いにし昔この里を辭ふや、實にこゝよりせるに非ざりき。

母上と己れと、唯二人、そは、小雨そぼ降れる晨なりき、形影蕭々、東の村界に汽車に搭じて、斜風細雨、朽葉蠻頭の一本杉の、其梢朦ろに罩むるを眺めつゝ、低徊の涙、轉た忍びえ能はざりしが。今し、日は晴れたり、天はあをし、さはれ我れ愁ひに、白日に衣らるべき錦衣賚らさぬ身の、おゝ君よよくぞ歸りしと、滿足の笑顔に迎へ吳るる村人一人なく、子として出で子として歸る、いかに淋しかる歸省にもあるよ。

今はた首を擧げて、この巨人の面、見果るとも得せで、竊むが如き歩み、はや堤の幾丁を過ぎたり。かしこはわが黍稈揮ふて、戰さ事に餘念なかりし小路。そこには、梢攀ぢて實を摘むべく、家主が一喝を喫せし老梅樹。津頭の渡守、幾とせの世の波に、額に疊みし皺繁かるべく、苍頭なる駄菓子屋の主婦、例によつて元氣なりやいなや。朽葉の丘の麓迚りて、お堀の水涸もせぬにまづ嬉しく、呻吟

の間とある門口に就きぬ。然り此冠門よ玄關よ、雨淋風打の今も猶、客窓宵々の夢に上りし、我想像を誤またざるはあれど、此小城壘に住ゐてゐます、從弟一家の小世界は、露の變動なくて在すべきか。轉ぶが樣に走り入りて、入口の障子矢庭に押開けば、晝寐の甘寢まづ破られて、訝りの瞳凝らし給ふは、忘れも得せぬ主の君、即ち我從弟の君にて在しき。怪しみ給ふさもこそと、我は我名を名乘り出るに、さてこそ、何となふ似つかはしう覺えたれ、さはれまたいたく面かはりせしことゝ、暫しは驚き給へる樣子なり。妻の君も出でましつ、我健かなるを稱へらる、久濶の閑話、いと〳〵ねもごろなり。病みます母上の枕邊に侍べれば、いとゞさへ痩勝ちなりし、御體の肉落ちて、手足さへいたく骨立ち給ひぬ、五年前の面影、見らるべき由もなきに、涙偃きあへざりしかども、赤心深き、此家人の看護りにて、日まし快き方にとの玉はるゝに、心やゝおちゐつ。

主の君は世々相繼いで、刀圭のことを業とし給ひ、傍ら農桑の業にいそしみ給へり、五たりの子福者にぞ在すなる。

家は乾きて、高き地に建てらる。朽葉の丘を前に控えて、割けるが如く嶄巖立つ。清き渠麓を繞りて、時は夏、蓮花今盛りなり。後は椽より直ち、なだらかなる自然の蛾なり、矮やかなる灌木と、綠草の叢生へたる間を、紅白躑躅、斜めに畦を織る。四面開けたれば、嵐氣自在に軒を掠め、風馬を叩いて「五月の歌」絶えずほがらかなり。小學校の白壁も見ゆ、落葉が丘の鐘樓も見ゆ。

風呂は焚れたり。拾里たび路の友たりし、淤塵と垢といづくにか忘れて、さながらの蛻に椽端に立つ時、風袂を捲いて、涼しさ云ふ計りなし。夕日影うるはしき胡桃樹の梢、蜩蟬金鈴を鳴らし始めぬ、夕炊の烟に思ひ出でたるらし。

妻の君鍬執りて、茄子畑耘るに忙はし、跳足なりき。あゝ愛すべ

き勤勉の風よ、長へに田舍を保つが嬉しくて。

* * * * *

主が長なる乙女他に嫁がれぬ。我祖母上とも慕ひまつりし、主の母君なる人は三年の前墓石に就かれしとか。露知らざりしかな、知らざればとて、一片の念佛だに捧げず、懺悔の極みなりしよ、今更に線香炷して、靈の前に慟哭す、人亡餘故宅、空有荷花生、念此昔如夢、凄然傷我情、繰返さるゝ恨み、綿々として、香の烟と盡くるを知らず。

一家の明星、十五歳の從弟歸れり、其身の丈のいかに伸びて、いかに大人々々しうなりしに驚きしかよ。柔媚ならで朴茂、輕躁ならで活潑、こゝにも一人、田舍風氣の保持者を獲たる我心、いかに滿足に充ちたりしよ。あゝ水清く山高き故鄉、寧馨兒此の如きを擧げしを、吾謹んで卿等に謝す。

あゝ田舍の勤勉、田舍の質朴、田舍の清淨、われ七年の久しきを經て之に對す、依然たり、七年の昔の如かり。然り斯の如き故鄕よ、よしおん身は、吾を虐待せよ、踏み躙れよ、なほわれは忘じ難し、捨て難し、ましてや心弱き此多年を、社會の風霜に暴せる我の、今悠陶たる極樂境、四邊に蓮華散ぜぬ計りの、この太古の空氣に喰喁するに於て、叫ぶも理りならん、泣くも道理なるべし。只希くは五年の後、十年の後、我業快よく成就して、故園歸去來を賦せんとき も、樸實、堅茂、ねがはくは斯の如くにてあれな。あらず、もゝとせも、また千萬年も。

夜、家を盡して燈火びを圍み、隔てなき懇話の莚開かれぬ。主の君、渠が家族の小照、我先考亡兄の書簡など、何くれとなふ取り出でて示さる、寢ねたるは更けてなりき。

所替はればか、眠り遂に圓かならず、極めて鋭くなれる神經の、

夢醒の行き合、假令ば風の響の如、ふと少やかなる音に驚かされつ、目覺むれば、雨戸なき紙窓皆白かり。鷄鳴函谷に報ずるなきに何の天明ぞ、これ月光の朗として、久濶叙ぶる顏に照れるなりけり。鐘聲あり、不動山のなるべし。針聲なき夜氣を震盪して、嚴かに眞夜中響き亘れる時、たとしへなき幽懷水の如く、我胸を刻んで滲み來るものあり、一歩また一歩、吾今こゝに、暗く黑き墓坑の中に墜ち行くらん心地す。淋しき哉や餘韻、やがて我聽覺より、微かに微かに、つひにあなたの世界へと沈み行きぬ。

去りて街に漫歩すれば、流石に交通少なき片田舍とて、家並の變遷こそは多からね、人事の際に於て、げに多くの變遷を見たるなり。知りたる主人は多く老い去りて、渠れ己れを認め得ねば、己れも亦渠れを確むるに苦しみ、親しき友は長け、知らざる兒女は多く生れ、忘れ居し當年嬉戯の童子は、今や成人して、立派なる一個の丈夫と

ぞなりぬ。殊に著るしきものは、うなゐ髪の少女早くも戀を解し、耻を含む處女となりたることなり、否更に花嫁となり、頑是なき稚な兒を擁くに至りては、圖らずも古詩人が、『如今風罷花狼藉、綠葉成蔭子滿枝』の感なくばあらず。

君は水上の梅の如し、花水に浮んで走ること急なり、妾は江頭の柳の如し、影水に沈みて隨ふこと能はず。

謝蕪村に澱河の一曲あり、吾人が故郷に對する衷情、髣髴として箇中に告白せらる。

われや漢の天下を保ちて、大風の飛揚するを歌はんよりは、寧ろ沛の小巷に、父老と草麻を談るの安きを擇ばんかな。しかも母上の病半ば癒えたりとあるに、かくていつまでか止まるべき。急ぎて歸裝治むれば、主の妻君これを止めていふ、

『七歳の遭遇、など辭はんずることのしかく匆々に在す、たとひ二

三夕は留連するとも、誰れか惡しと遮るべきものぞ。』

入りて母上に質せば、皈れよと答ひ給ふ、いつも乍らに氣丈に在すことよ。

麥藁帽子片手に、青鞋ふみ固めつ。

『さらば母上、ま幸くて在せ。日に力めて自ら藥養し、一日も早く、素の壯健なる母上たられてよ。』

『さらば姉上よ、母上を看護らるゝに餘念なく、さてかの地へ皈られても、よく舅姑に事へ、夫の君に仕へ給へかし、返す返すも、母上が看護ぬかり玉へぞ。』

『さらばよ主の君、主婦の君、祁寒に炎暑に、萬年の身を厭はれてよ。』

『さらばよ、從弟の君、われは去らなむ、螢の光り雪の窓、寸の暑を惜み用ゐて、あはれ下和の璞、その千乘を照すべく磨けかし、來

ん年は、何がしの校に入るとぞ聞く、疑はず、當年の級中を抽いて、至榮ある月桂冠を戴くもの、寧馨兒卿にてあるべきことを。』

みな椽はなに立ち出でゝ、われを目送しぬ。

折しも曇れる空、更に一朶のむら雲を加へて、山鴿の聲ほろほろと、天候の惡しうなりまさらんずるを報ぐ。

再び村甍や山河やに別れを告げて、われや低徊やゝ久しく、今まさに村界を出でんとする比、小雨やがて沛然として降り來ぬ。流石に帽庇傾けて顧りみすれば、雨雲次第に山の腰引き纏ふて、戀しきわがふる里影、あはや淡としてながらんとす。

七　歸んなん、いざ。

青山北郭に横はり、　白水東城を繞る、
此地一たび別を爲し、　孤蓬萬里に征く、
浮雲游子の意、　落日故人の情、
手を揮つて是れより去れば、
蕭々として班馬鳴く

（漢詩）

「星月天にあり、四方に人聲なき、岑たり寂たる夜坐を、忽ち淅瀝として以て蕭颯、忽ちにして奔騰して滂湃たり、波濤の夜驚き、風雨の驟かに至るが如、其ものに觸るゝや錚々たり、金鐵皆鳴り」て、聲の樹の間にあるを聞く時、盧山の詩人ならざるも、誰かは心思は

ず澄みて、神爲に喪ふ所あるがごと愴み、「あゝ悲しい哉、秋何ぞ來れるや」の喟きを發せざるを得るものぞ。

＊　＊　＊　＊

あゝ秋は來りぬ、心づくしの秋は來りぬ。そもわれはいさ、「おぼつかな、秋はいかなる故あれば、すぐろに物の悲しかる」べきやを。はた知らず、秋の風にいかなる色ありて、愁ひを人みなの心に染むべきやを。しかも己れ、はかなきこの塵の身を、浮世の巷に立迷ふては、蹺て望む彼方の岸に、一炬の微けき光それさへ、見出だし得べからぬに泣くものなり。

浮世の嵐吹き捲くこと烈しや。現し身の苦艱に泣き泣きては、返すべくもあらぬ過去の思ひ出を、せめてもの理想の樂園となし、果敢なき隱れ家とも思ひ頼むわれ。たとへばこれ、あわかなる白鳩痛手負ひて、獵夫が索めより逃るべく、暫しを小草に隱るゝにも似たらずや。

かくてわが世の秋の聲は、これわが情の底を射て、世にも强き愴みを覺えしむべく、毒ある素矢の弓弦の響。

かくてわが世の秋の風は、わが愴んでそを聞くとき、思ひ出繁き悲みを、里の砧と繰返さしむるもの。若し夫れそこに、容なき巨匠が鑿の刄ありて、云ひ知らぬ自然の詩味を、深くわが胸に彫る時や、潸然たる涙、雙の頰を傳ふて下る、ひとへに千草の露よりも滋きものある也。

ましてやこゝいくとせ、いくとせ旅寐の山川を見捨てゝ、懷かしきふる里の空と離り、幾宵馴れ睦びにし友どちと立ち別れて、いまし遙けき百里の客土に漂らふ、こゝらの歳のこの秋に於てをや。

かくてわれは泣き、われは吟じ、われは叫ばむ。人は狂へりとなさんか、それもよしや、我妨げず。たゞ切にねがふらくは人よ、わ

が悲みの、わが涙の、その何故なるかを問ふ勿れ、たゞ何故を以て何故を葬らしめよ、感情の極みなるべき涙其ものは、つひに理性の剖析の、四を分つて、二と二となすが如きを容さゞるものとか聞けるを。

＊　＊　＊　＊

かつて詩人の秋を悲むを聞く。

秋風の吹きわたりけり人の顔。

實にや刑官秋を司る、空には空の浮き雲を拂ひ、地には白く暴れたる地の骸を遺し、沿ねき凄殺と寂滅とを、宇宙の有象無象に吹きわたりて、西方より來る秋の風よ。

奇しき威あるはげにこの風の態なる哉。もの一たび此息吹きに觸れては、忽ちに其生と色とを失なふ。見よや搖落の翼に拂はれては、大方の草木も黄ばみ殺れぬ、葉は裏枯れて梢疎らに、かつては大空

も見わざるまで、繁りし深緑りの今跡もなう。世にも力なげの瘠枝に、しばしの命托せしもなまよみの甲斐なしや、一葉朝に墜ちて夕に一ひら、諸行常なき理に洩れで、飛びては行衛も知らぬ病葉の、わびしく定めなきわが身の上は、實に夫れにも似たらずや。

偃ふればいくとせの昔、武夫の上矢の鏑一筋に、慰めもなきその客土を辭ふべく、己が思ひ立ちたるは、夫れよ、青葉若葉の深緑り、葉山繁山に立ち罩むるころなりしか。

＊　＊　＊　＊

己が鹿嶋立ちの前、三日許りの夜なりしか。小河内の君と嚴原の君と、とも共に我が寓を訪れたりしは。

打ち連れ立ちて茅が屋を立ち出づ。空には足曳の山の端に、いざよふ二十日ばかりの月、地は遠の山、近き村、たゞ茫として狹霧に煙り、際みなき水田に波ほの白くて、井偃に洩るゝ通ひ水の、蛙の

聲と眠たげに聞え來るほど、風緩く天外より墜ち來ては、まだき稚なき稻の薫りを、涼しく靜けき夜の天地に滿たす。

一すぢの畷路、團たる途上の露に裳裾揭げて、そこはかとなく逍遙へば、いづくの桂男がすさびかも、遠き村里より笛の音の、悠揚として颺る聞ゆ。清き響の漂渺と、時にそへていとも興ありや。月下に向つていや澄みまさるに、迭みに往きしを述べ、來ん行末を談じ、歡唔いまだ罄きざるに、樂しき時は早くも流れつ、月影山寺の鐘聲に落ちて、更の轉た深きに驚き、再會また何の時をか期すべき、濕ふること多き袂を分ちたりしか。

＊　＊　＊

啓行の前一夜、われ用事ありて街に往く、夕暮なりき。想へばわが今し、何心なく立ち停りし邊り、これや去年の年の暮を、輕業すなる童女等の、世にも慘むべき運命に哭きしところぞ。こゝなにが

し座の甍、仰げば白雲を頭に纏くことの、今とて變らふことなけれど、獨り其白雲の行衞にたぐひて、何處にか行けんいぢらしの子等よ。命拙なきわれもまた、今卿等が跡にならつて、明日はこの里を見捨てなんとす。しかも今わが仰ぐ甍空しく立ちて、そこに見たりし卿等あらぬ如。さては花の都、塵の巷、聳ゆる甍の數や多しとも、わが今仰ぐこの甍にはあらざるべきを。さらばよ、この街、この甍、よしや思ひ寢の宵々に、都の夢は惹かんとも、暫しは現に見る可くあらぬ、さらばを今宵の名殘なり。

われたゞ立ちて想ふ、人顏朧ろ氣、家々にはや瓦斯燈照れりき。

＊　＊　＊

われや今し去らんとす。

あゝわれ鴻爪雪に印して、萍遊の跡また尋ぬ可らず。去年の師走、青鞋しばしこゝに落ちて、はつかに結ぶ草枕、假り寢の夢の穩かに、

せめては茄圃瓜疇、今年うき秋の、野のあり景をも味はんと期せしものを。儚なしや今日この宵、再び此の地を後ろに見て、いつまた顧みべうも覺ほへぬ、千里の旅路に就くかと思へば、丈夫ながら悲しくて、頬に滴るものなきにしもあらず。

斗鷄の進み、無情の軌道を走りて、われ今や去らんとす。蚊遣火ほらほらと、いづれの軒にも燻り、白き煙は、菅の根の、流石に長き夏の晷をも立蔽ひはてぬ。食も認めつ、浴みも了へぬ。家の諸人が前に跪いて、永遠の別れを惜みつ。

門を出づ、玲瓏たる月の光、千萬里の外にも照り渡りぬべく、地に挽く松の影を蹈みて、見返り勝ちに苍に出づれば、老いたる人は涼み臺の上に、餘念なき經驗の垂訓、白き頭、團扇の搖ぎとふるひ。心に明日なき青春の壯きもの等は、この清き宵をわがもの顔に、情慾と冷涼とを趁ふにいそがはし。車夫膝栗毛に一鞭呉れて、いく街

の冷露と夜氣と燈光とを見遣し、いまし電燈眩ゆき停車場の、その入口に轅は下されたる也。悲や、喜や、笑ひや、顰みや、聲なき泣きや、人の世の七情あらゆるを、洽ねく狹き此一室に滿たして、さながらに芋の子を熬るなりき。

人は前後に徬徨り、左右に波動打つ。ふと立ちて、われに揮する二人の青年あり、瞠目すること少焉、あゝ如何に懇ろなるよ。己が今宵の門出送らむとて、小河内の君、嚴原の君、われをこゝに待ちてあられしなりしを。われ情篤き君等が情に咽びて、名殘りの物語り暫しだに絶間なき。

夏衣たち別るべき今宵こそ
ひとへに惜しき思ひこそすれ。

時は迫りぬ、鏗々たる報らせの鐸、あまねき人の耳を貫いて、人みなの胸の中、靜かならぬ心の波ぞ騷ぐなる。二人の友どち、ひた

すらにわれを慰めて、切符をも購ひ呉れぬ、何くれとなく、途の心得など説き訓ふる。

車に上る。

『さらば決心の轡ひきしめて、努な横なる路に逸し給ひそ。時は熱き盛り、且つや水の質さへ悪しゝと聞けるを、渇きの餘り、氷などを多分に啜られて、身をば損ずることなかれかし。夜半の蒸し暑きを衾かき脱ぎて、風邪の覗ふ所となられな。』

『途にあつていくばくの警戒あるべきは、われ等が言はずもの事なるべし。さてかの地へ着かれては、まづ其地のさまの、御身の觀察に映れる限り、われ等に説き示されてよ。何事も鄙に燻ぼる身は、都の便り、都の友の便りより、世に嬉しく、喜ばしきものあるべきかは。』

『二人の卿が今に始めぬ、ねもごろの情、われいつの世にか得忘れ

ん、はた謝せんにも言なく筆もなけれ。たゞ願はくは、卿等も亦國家の爲、一家の爲はた己が爲、千金のかばねを攝養して、いよゝ學びの庭に力められなんことを。……、さはれ予れは猶健羨するに得堪へず、卿等が共に、和氣洋々たる家庭にあり、戸外雨降り荒び、風吹き荒むも、團欒の莚たゞ煦々として、午睡の夢圓かなるは暫くも云はず、旦夕に俯仰するところ、たゞ是れ山青く水清き、清靈の鄕に棲み老いつ、萬石の詩趣の裏に、幽邃なる詩腸を養ひつゝある も、……噫われや、われや悲しい哉、長く明徹なる秋の水と、孤峭なる秋の山とに相負きて、塵埃黄に冲る中に埋もれなんか。われは轉ろに卿等が清福を羨む、眞に垂涎す、……。』

『然り田舍の天眞と清淨なるを見捨つる、惆たり悵たるの情、卿にありては洵にさもあらん、しかもある可し。さはれそは私事にして、此行や重きものを。返す返すも、痴なる婦女の情を斷ち裁りて、山

大の譽擔ふ可き、青雲の業に樂しみ給へ。』

『さりき、われは餘りに女々しかりき、さはれ女々しきはわが常なるを、ねがはくは卿等よ、わがに愚かをば嘲りぞ。由來われの此の地にある、孤峭自ら樂むの身は、更に友なきわれを悲まざりき。しかも千羊の皮はつひに一狐の腋に如かず、われは愁に千百の僞れる友を得ずて、熱烈卿等の如きを索め獲たることを多謝す。

行き行きて倒れ伏すとも萩の原、われは勗め勗め、青山に空しき骸を埋むるに至りて、なほ止まざる可く。今宵の離別、離別の卿等が言を遙遠の紀念として、心の裏深くも鏤り刻み、誓つて遺忘の城府に囑するなからんか。』

＊　＊　＊　＊

石炭の焔、いまし炎々たる紅蓮の舌を吐きぬ、汽罐の水、沸々として極度の蒸氣を颺げぬ。送るもの送らるゝもの、柵の内と柵の外

とみな一入に愀然たり。折しもあれや汽笛一聲、長く鳴りて、洽ねき人の肺腑を貫くと共に、逶迤たる長蛇、いまし緩やかに搖ぎ出でぬ。愴みて立てる二箇の罔兩も、やうやうに黝冥に隱ろひて、はた見るべうもあらずなりぬ。男兒涙なきに非ず、離別の間に灑がずとか。眸を傳ひて、急雨の樣に溢れ墜つるは何ぞ。

今を今日と明日の域なる、刻みを無窮の曆に止めて、十二の點鐘はや打ち終へたり。車窓首をめぐらせば、月已に沒して、車中の人もみな眠に落ちぬ、さるからに、われも亦睚蓋ふに學ばんとして、夢遂に圓かならず、悲しき懷ひ濤の如く、愁への渚に打ち寄すること頻りなり。

これより先き、我れに隣れる椅子に二人の漢子あり、青森より搭せるなりとか。齒ともに四旬にも餘りぬ可く、鬚髯秋草の如く頰を繞りて、蒼き面、垢つける衣、其對話によりて、其閲歷の大方は察

り得ぬべし。由來少壯鄕を出でて、身はたゞ行く雲や流るゝ水の、鵬翼一たび翥いて、巨萬の利を不毛の地に握るべく、風を餐し雪を饕ひ、遠く樺太に渡れるなり。しかも時分渠れに利あらず、空しき失望と落膽とを、今ふる鄕の空に賚らさんとする途なりとぞ。

洩すに處なき滿腔の憤ほろしさを、わづかに一陶の酒醺に藉りつ、刹那の忘却境に眠る身の、憐れむべきは素よりあれ。哀れは更に、何をかも知らん由なき、ふる里なるめぐはしの妻子等が上よ。雪の夕霜の晨、その夫その親人が、双手の幸運を擁き得て、歸り來ん日を望みつゝある、そが心根はそもいかなるらむ。あはれ人生れて、定まれる活計なきより悲しきはあらじな。深く渠等が衷情に想ひ徹すれば、亦惻怛の情にも堪へざるなり。

* * * * *

小波退きて、眞砂に殘る磯小貝の、そのいろ〳〵の心と體を、た

だ一しなみに積み載せつ、滊車は今、人里遠く軌るなり。洞然たる巨人の影を、天鵝絨なせる空の闇に抛ちつゝ、火焔の吐き烽火に似て、折々に暗碧の天を彩り、魔獸の吼か、轍の響、森たる夜氣を、杜の山彥を、鳴り箭の樣に顫ひ動もしつゝ。

波ほの白く閃くは、野末のたまり水か。獨り覺めたるせゝらぎを、軋りの鞳鞳とうち競ふはいさゝ小川か。秋ざれば、岸に薄も戰ぐらむ、鶉も啼かむ、野菊も咲かむ、其川を超ゑ、この畔渡り、杜なるべくや、疇なるべくや、たゞひた走りに奔りゆく。

仰ぎ見ゆる、窈冥はたゞ蒼茫たり、星の光意味ありげに、たゞ爛爛として輝くなり。あはれ故園は遠し何の處。はた旦夕に書包み擁いて、學び舍に通ひし靑葉の杜蔭、いま夫れ何れのところにかある。

渺たり極みもなき天際の、濤のうねうね、眼はたゞ低迷せる夜山、影の如きにかぎられつ。遠の小山の遠里小野、そこには賤が伏屋な

るべく、微けしや、灯し火一つ洩る。行き暮れて、荒野さまよふ旅人を、千ひろの壑に擠すべく、魔が誘ひの照射かとも覺にられて、いと〳〵心細しや。

われいひ知らぬ悲しみに撲たれて、龍鐘の涙、たゞ頻りにはふり墜ち、無名村畔の小草にふり注いで、晨の露と置きまがふ。

短亭長驛、そのいくばくを半ばの幻に過りて、われとある山の端、微茫たる横雲の、ほの白く搖曳すると見る間、魔の領なる夜の衣は、山の頂きに盤舞すなる、疎松の梢よりやうやうに剝がれ往きぬ。一つ一つに、天路に別れを告ぐる星宿の、澹として夢よりも淡きところ、浮ぶが如くほのぼのと、明け行く復活せる新らしき天地よ、氣清く、空清く、水清く、紫山緑水、嫣たる容をあらためて、人みなの面に揖すなる、清く涼しき夏の曉よ。云ふばかりなき爽すがしさ

を覺にて、われこの時、天の中空に、杳として神の面影を見にき。

なにがしの驛路、白甍茅店に鷄鳴しげく、殘夢月は遠しと喞ちけん、炊ぎの烟綫々として冲るを認む。

こゝはくれかしの關の跡よ、關は近きころの兵火に荒れつ、さればよ詩人は詠ず、鷄犬蕭條亂後村と。いまや大荒一明、燿たる天日は、臙脂漲る大空に躍り出でぬ。舊き墟殘れる壘、さては秋待たで萎れたる、名なし小草の葉末にも曦影殘りなう、洽ねき光を浴びせつ。

かくてこの夕、われは都に入りぬ。紅の埃混々として、烟に似て颺る巷に、われいくとせか、長く魂搖々の客とぞなりぬ。

崔塗かつて泉を賦つて曰ふ、

遠く巖竇を辭ひて瀉いで潺々たり、
靜かに雲根を拂つて故山に別る、

惜む可し寒聲留まり得ず、
旋波浪を添へて人間に向ふ。
あゝ瀉いで潺々たるもの、聲裏何ぞ恨み多き、あゝわれ已に出で
て人間の寰裡に向ひぬ、源頭の明徹、また何の時にか望み得べき、
吁。

＊　＊　＊　＊

黄金の樓、珠の臺、人よ人爲の大觀か、よく脈々たる遊子の懷鄉
の情を勾し、よく攣き止め得ることを努、思ふ勿れ。あるものは冠
冕の榮ゑよりも、寧ろ牡鹿鳴く山里の奥に、山に樵り、水に釣して、
安らけく茹ふの樂しきを語らずや、寧ろ杖を立てゝ耕す可く、三村
の家裡、一犂の春雨、犢を野に追ふの更に安きを語らずや。
わが嘗て寓りし樓、地は高く燥き、欄遠く、幾萬の畫甍を眼下に
聚むるものから、暮の雲やゝに軒に迫りて、さながらに、物の憐れ

を夕暮の大空、われ燈し火掲ぐるをも打ち忘れて、肌寒き風に袂飄
へし、家山かへり見て轉た遠きに、瞻然として懷ひ愴みたることも
ありき。
夜は深く遠漏沈みぬ、物靜かなる大都の夢を、獨り覺めて護る朧
月の、さも訪づれ顔や。雨戸なき障子に、自然の幻燈を畫く折、わ
れすぐろそよふく天風の、盜むが如、呟くが如、羞るが如きにあく
がれつ。靜かに瞑目して靜想すれば、心早くも忘機の寂莫に入り。
さては人生と宇宙とを思ひて、滾々たる過去し方の懷ひ出に、溜息
長かりしこともありしよ。
かつては墓塲の側に棲みにき。夕空、われ好んでそこに徬徨ふ。
こゝらの塚よ、亡き人々の印よ。鏤めつ、塗りつ、飾りつ、奥土城
どころ何ぞ夫れ美はしき。天をも磨しなむ御影石の、他界の名刺何
ぞ其の莊なる。寛かに三家の民をも容るべき、廣き環堵は何ぞ夫れ

大いなるや。しかも田舍の墓塲に見よ、卵塔は古塚と倒れて、かきも拂はれぬいくとせの落葉に埋れぬ、白張の提灯は雨に暴れて、肉剝がれ骨現はれつ、誰が手向けの供物ぞも、たゞ山烏の求食るに委せられて、執念き色ある赤土の、蔓珠沙華紅く草枯れたり、自然生の薄、尾花、凄まじくも人を招くなど、凄、寂、幽、玄、それらの趣の、つひに覓むべくもあらぬに、われ凄然として涙下りき。

＊　＊　＊　＊　＊

あゝわれ孤劍こゝに墜ちてより、生よりも猶わが愛づる、「自然」より長く斷たれたり、仰いでそこに蒼々の山なく、俯して、また溶溶の綠水を眼にせず。

さはれ云ふこと勿れ、都に秋水の明徹なるを見ずと。飄揚として高く、遙けく、聲なくて、碧落に飛ぶ一むれの白き雲はなきや。云ふを休めよ、そこに秋の山の、孤峭なる姿なしと。木葉を吹き返へ

して、颯々戰ぐ風の音を聞け。

あゝ大火西に流れて、詩人まさに蓴鱸を憶ふの時は來りぬ、われや西東放浪の客、一たび故國を去りて魂已に遠く、人を懷ふて、涙空しく蠟涙と垂る。たとひ宵々の夢は飛びて、依稀として關山の風月を繞ると雖。あゝ故鄕は百里、路岐長うして盡せざる孤客の恨み、ひとり長鋏を彈じて、あゝ歸んなんか、歸んなんかの長嘯に、嗚咽するものそれいくばくの夕。

＊　＊　＊　＊　＊

「遠行にあつて山に登り、水に臨みて將に歸らんとするを送るが如し」といひけん、あゝ想ひやるふる里の秋山の姿は、いかに憭慄の懷ひに充ちたりしぞよ。

「岸柳蕭踈として野荻秋なり、都門の行客頭を回すこと莫れ、一條の覇水清うして劒の如きも、離人の爲に愁を割斷せず」渡頭の楊柳、

西風に黄ばみ盡して、斜陽を帶びて啼く蜩蟟の、聲悲うしてほとほと聞くべくもあらぬ、あゝ白波漫々たるふる鄕の長江の秋よ。

あゝわれ飯らんか、飯らんか。

＊　＊　＊　＊

余一日問耆老於故園、渡澱水過馬堤、偶逢女歸省卿者、先後行數里、相顧語、容姿嬋娟、癡情可憐、因製歌曲十八首、代女述意、題曰春風馬堤曲

謝長庚

やぶ入や浪花を出でて長柄川、春風や堤長うして家遠し、
堤下摘芳草、荆與棘塞路、荆棘何無情、裂裙且傷股、
溪流石點々、蹈石撮香芹、多謝水上石、敎儂不沾裙、
一軒の旅店の柳老いにけり、茶店の老婆子儂を見て、慇懃に恙無きを賀し、且つ儂が春衣を羨む。

店中有二客、能解江南語、酒錢擲三緡、迎我讓榻去、
古驛三兩家、猫兒妻を呼ぶ、妻來らず、
呼雛離外雞、籬外草滿地、雛飛欲越籬、籬高隨三四。
春草路三叉、中に捷徑あり、我を迎ふ、
蒲公英花咲けり、三三五五、五五は黄に三三は白し。
記得す去年此路よりす、憐れ知る蒲公英莖短うして乳を浥す、
むかしむかし切りに憶ふ慈母の恩、慈母の懷抱別に春あり、
春あり成長して浪華にあり。
梅は白し、浪華橋邊財主の家、春情學び得たり浪華の風流、鄕
を辭し、弟に負いて身三春、
本を忘れ末を取る接木の梅、
古鄕春は深し、行き行きて又行き行く、
楊柳長堤道漸くくれたり、

矯首はじめて見る故園の家、
黄昏戸に倚る白髪の人、
弟を抱き我を待つ春又春、
君不見古人太祇の句、
藪入りのねるやひとりの親の側

八　いざさらば

世界は廣し、人は澤なり、さはれ眞個の知己なき身は、獨り沙漠に立てるより寂しかるべきを。

あゝ何くの所か山なからむ、何くの所か川なからむ、何れの里人か朴訥ならざらむ、何くの朋友か好伴侶ならざらむ。さはれ己れ、久しく故郷の風月に違ひ、江山の勝、故山の如きなきを見て、始めて故園の慕はしく、かの郷黨の如きなきに當りて、始めてかの朋友や里人を思ひ忍び、人情行路の難に行き惱みては、益なき母上の戀ひしさいや益すなり。あゝせめては、父母上の墳墓あるそのふる里よ、里人あり、はた山河あり、起き臥す日に異に戀ひも渡る、あゝ

わが美はしきふる里よ。

夫れ比ひなく麗はしく崇とかる、わがふる里の「自然」の一筐よ、

われ已にこの一筐を手に擁かば、黄金も何か、譽れも何か。

歸りなん、あゝあゝ我は歸るべし、痴氣き人の夢よりも儚なき、

かの富貴と榮華とはもとより我が欲りする所にあらず、聳ゑて山の

如き大厦と高閣と、大牢の甘饌や蘭陵の美酒や、決してわが鐵腸を

拘ふべくもあらず。仙袂や羅袷や、銀鞍白馬楊柳の鞭、長安の少年

に傲はんことは、またわが斷じて願ふを敢てせざるところ。

あはれわれ、この愁多き都の秋を、わがふる里に入り立ちて、亡

き父母が御墓邊に、この身を長く老いばやな。

＊　＊　＊　＊

『歸らんとな』

友の面影、友の言、たちまちにしてわが想ひに活く。

『故郷は滅亡に瀕せり

はた瀕しつゝあり！』

＊　＊　＊　＊

かくてわれ、故郷に歸らんも、そは何の慰めぞ。中々に心愴まし

き、わが悔恨の萠しともなるべきを。

あゝ味氣なのふる里よ、一木斬られ寸土鋤かれ、知る人亡せて山

河亡びぬ、かくてわれ何のふる里ぞ。其情なき荒廢の跡見ては、ま

たく知らぬ他しの里よりも、なほ一入に味氣なくも思はる可きを、

われはた何の故ありて、再び蹤をそこに止むべき。さはとて人問ふ

を止めよ、旅ごろも、またふる里に歸らぬべく、更に樂しかるべき

仙郷やあると。ふる里已に斯の如かり、山また山、川また川、いづ

こに求むべき無上の歡樂境ぞ。

塵より輕き一葉小舟、もとより七情虚空なる己が行衞は、あした

岫出づる雲とよそへて、夕べ八百潮さはぐ蒼海原、それもよし、子子浮ぶ溝のはて、そに倒るるとも厭はじな。よしや浮き沈み、露ばかり惜むべきわれにはあらじを。かくてわれ三寸の息休まざる間、再び歸りてわが故郷を見じ。

＊　＊　＊　＊

あゝわが幼時の福は、わが幼き故郷と共に跡なくなりぬ。
かくて思ひ出多きふる里の、
さはれ慰めもなきふる里の、
荒るべくは、たゞ思ひのまゝに荒れよかし。
壊るべくは、たゞ思ひのまゝに壊れよかし。
われも嘗てはふる里の子の、今包むに餘る涙抑へて、またその里に歸らぬべく、かくぞ永き訣をこゝに告げなんとす。

＊　＊　＊　＊

過ぎて去にし歡樂の影追ふて、われ現在の零丁に泣くものにあらじを。
孤つ身をひたすらに、圍み繞れる禍の、おのれ露そを憂たむものにあらじを。
たゞ一雫の涙濺ぐべく、情あらん一人も現し世にあらぬことの、いとも激しきわが悲み、げにや夫れなる。
かくてわれ、世は廣けれど、われたゞ一人なる世界にわが世淋しく。
遙けき遙けき蒼海原に、木の葉の如、侘しく漂ふ、さはれ、
われ何の故ありて、こゝに一つの吐息も予れに惜める、他し人の爲に呻吟せざる可らざる乎。
恐らくは、家喪へるわが飼犬の、ありし主戀ひて、ひたすらに哭き悲しむべく、さはれそもいつまでかは。

やがては他し家の門を護りて、再びわが此の土を見舞はむ折り、わが衣の裾噬み裂くべきものを。

＊　＊　＊　＊　＊

さらば我が小舟よ、わが舵よ、われは卿等とともにはやも去るべけれ。

そは味氣なき、このわがふる郷にあらぬ限りは、白泡湧き立ち、湧きさはぐ、大和田の胸かきわけて、われはいづくの濱、いづくの里にも戸わたるべきを。

さらばよ、爾ぢ、暗碧の色凝りて濃き、大和田津海の荒波よ、いかでいつまでもわれを見捨てざれな。

さては甲斐なのわが骸、藻屑を潜いで、珊瑚の岩が根深く沈み行くとき。

なれが眞砂の底よ、なれが洞窟よ、いかで己れを歡び迎ふる

に躊躇へなせぞ。

さらばよ、さらばよ、

わがふる里よ、いざさらば。

＊　＊　＊　＊　＊

（西詩）

こゝにまた、われも長へ卿と離らんとす。

清瀬の川よ、いざさらば。

朽葉の丘よ、いざさらば、

老いし學び舍ぞ、いざさらば、

わが里人よ、いざさらば、

＊　＊　＊　＊　＊

さらばよ、さらばよ。

わがふる里よ、いざゝらば……。

いざさらば

終

新刊發行

姫路中學校教諭深澤由次郎君註譯

Christmas at Tompson Hall.

新刊○詳註附正價拾八錢郵税四錢

Anthony Trollope の "Christmas at Thompson Hall" は諸學校の英語教科書として好評ある短篇小説なるが其の趣向の面白き長き冬夜のお伽噺として又た三伏の炎暑に一服の清凉劑として津々たる趣味を覺ゆべし。ブラキー氏曰く學生は勉めて大家の傑作を讀むべしと、此書の如き蓋し英學生の一讀して益あるべき傑作なるべし（中外英字新聞評）。本書の譯文は深澤由次郎氏の懇切なる飜譯を經て（富村邸の基督降誕祭）と題し別に刊行せり（正價廿錢郵税四錢）

明治卅六年十月三日印刷
明治卅六年十月五日發行

著作者　千葉龜雄

發行者　東京市神田區裏神保町一番地　長井庄吉

印刷人　東京市日本橋區兜町二番地　齋藤章達

印刷所　東京市日本橋區兜町二番地　東京印刷株式會社

發行所　東京市神田區裏神保町一番地　太平洋館

發賣所　東京市神田區裏神保町一番地　上田屋書店

英語世界社發行書籍發賣所

書籍雜誌 勉強發賣

禀告

弊店是に斯業に從事する十數年、幸ひに江湖の御引立に依り益々進境に相向候段深く奉鳴謝候、今般更に業務を擴張し圖書雜誌類は卸小賣共凡て價格は低廉に發送は迅速に誠實勤勉を旨として從業可仕候間何卒倍舊御愛顧御引立の上陸續御注文の程伏而奉願候謹言

規程

○御注文の書籍雜誌代金は凡て前金にて御拂込被下度候
○郵券代用にて御注文の節は可成一錢切手にて一割增に希上候
○小賣御注文は單に正價丈け御送附被下候はゞ運賃は弊店にて負擔可仕候
○凡て荷造りは可嚀に運賃は可成的便利に取扱可申候
○御照會は必ず返信料御添付被下度さなくば御廻答不仕候
○郵便爲替振込局は御指圖無之方好都合に存候

東京市神田區裏神保町一番地

上田屋書店